

山鹿市文化財調査報告書第16集

梅 迫 遺 跡

県道和仁山鹿線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2004

熊本県山鹿市教育委員会

梅 迫 遺 跡

県道和仁山鹿線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

山鹿市文化財調査報告書第16集

2004

熊本県山鹿市教育委員会

序 文

山鹿市教育委員会では、熊本県山鹿土木事務所（現：熊本県鹿本地域振興局土木部）の委託を受け、県道令和山鹿線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

今回報告する梅迫遺跡の発掘調査は、平成10年度に実施され、縄文時代後期と弥生時代中期、歴史時代の遺物が多く出土しました。なかでも、縄文時代の動物形土製品は、九州内でも例の少ない貴重な資料であり、多くの成果がありました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展に少しでも役立つならば幸いです。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護に理解を頂き多大なご協力を賜りました熊本県鹿本地域振興局ならびに関係各位、そしてご指導ご助言を頂きました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成16年3月31日

山鹿市教育委員会
教育長 田 中 宏

例 言

- 1 本書は平成10年(1998年)12月から平成11年(1999年)3月に実施した、熊本県山鹿市大字城に所在する梅迫遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県道211号線道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査として熊本県山鹿土木事務所(現:熊本県鹿本地域振興局土木部)の依頼を受けて実施した。
- 3 整理作業は、平成11年4月～12月に行った。
- 4 整理作業は山鹿市出土文化財管理センターで行った。
- 5 調査区のグリッド設定は御ダイチプランに委託した。
- 6 発掘調査での遺構実測は、山口健剛、茨木浩二、齋藤隆志が主に行い、一部、緒方淳一、島崎貴代子、山崎絹子、松本尚子も行った。また、柱穴群の実測については、(有)遺跡整備計画に委託した。遺構写真撮影は山口が行った。航空写真は九州航空隊に委託した。
- 7 遺物は、土器を山口のほか、岡小夜子、城葉子、中山三恵子、小原朱実、宮田京子で、石器は山口が実測し、写真撮影はすべて山口が行った。
- 8 石材鑑定は古家修先生(山鹿市文化財保護委員地質学)のお世話になった。
- 9 炭化種子鑑定は御エーティック西日本支店に委託した。
- 10 本書の執筆、編集は山口が行った。
- 11 出土遺物は山鹿市出土文化財管理センターで保管している。

凡 例

- 1 本書で用いた高度は標高であり、方位は真北で示している。
- 2 挿図の遺物の縮尺は土器が基本的に1/3で、石器は1/2に統一したが、遺物の大小で異なるものもある。
- 3 図版に掲載している遺物の縮尺は統一していない。

本文目次

序文 例文 凡例

第1章 調査の過程……………(5)

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査の組織

第2章 位置と環境……………(5)

第1節 遺跡の名称

第2節 遺跡の立地する地形

第3節 歴史的環境

第3章 調査の概要……………(8)

第1節 調査の方法

第2節 順序

第4章 調査の成果……………(9)

第1節 縄文時代

第2節 弥生時代

第3節 石器

第4節 歴史時代

第5章 科学分析……………(7)

第6章 まとめ……………(7)

写真図版 報告書抄録

写真図版

図版1 全体写真

図版2 甕棺出土状況(集中部)

図版3 埋甕、甕棺検出状況①

図版4 甕棺検出状況②

図版5 住居跡

図版6 埋甕、甕棺①

図版7 甕棺②

図版8 甕棺③

図版9 甕棺④

図版10 弥生土器、古代土器

図版11 土偶、土製品、縄文土器

図版12 弥生土器、石器①

図版13 石器②

図版14 石器③

図版15 石器④

図版16 石器⑤

表目次

第1表 縄文土器観察表

第2表 弥生土器観察一覧表

第3表 打製石鏃計測値等一覧表

第4表 磨製石鏃計測値等一覧表

第5表 磨製石鏃未製品計測値等一覧表

第6表 石器計測値等一覧表

第7表 古代土器観察表

挿図目次

第1図	山鹿市内主要遺跡分布図……………(6)	第29図	弥生土器実測図5……………(39)
第2図	梅迫遺跡周辺地形図及び周辺遺跡分布図…(7)	第30図	弥生土器実測図6……………(40)
第3図	調査区グリッド設定図……………(10)	第31図	石匙、打製石竪丁、石錘実測図……………(44)
第4図	梅迫遺跡遺構配置図①(M区～W区)……………(11)	第32図	打製石斧実測図1……………(45)
第5図	梅迫遺跡遺構配置図②(F区～N区)……………(12)	第33図	打製石斧実測図2……………(46)
第6図	2号埋没出土状況実測図……………(13)	第34図	打製石斧実測図3……………(47)
第7図	3号埋没出土状況実測図……………(13)	第35図	十字形石器、円盤状石器実測図……………(48)
第8図	2号、3号埋没実測図……………(14)	第36図	円盤状石器実測図……………(48)
第9図	縄文土器実測図1……………(15)	第37図	凹石、磨石実測図……………(50)
第10図	縄文土器実測図2……………(16)	第38図	磨製石斧実測図……………(51)
第11図	縄文土器実測図3……………(17)	第39図	柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石竪丁実測図…(52)
第12図	縄文土器実測図4……………(18)	第40図	磨製石斧未製品、棒状石器実測図……………(53)
第13図	縄文土器実測図5……………(19)	第41図	打製石鏃実測図……………(54)
第14図	縄文土器実測図6……………(20)	第42図	磨製石鏃実測図……………(55)
第15図	動物形土製品、土偶実測図……………(21)	第43図	磨製石鏃未製品実測図1……………(56)
第16図	1号甕棺内出土石製刀子実測図……………(24)	第44図	磨製石鏃未製品実測図2……………(57)
第17図	1号～7号甕棺墓状況実測図……………(26)	第45図	磨製石鏃未製品実測図3……………(58)
第18図	8号～13号甕棺墓実測図……………(28)	第46図	砥石実測図1……………(62)
第19図	1号～3号甕棺実測図……………(29)	第47図	砥石実測図2……………(63)
第20図	4号～6号甕棺実測図……………(30)	第48図	石錘実測図……………(64)
第21図	7号～9号甕棺実測図……………(31)	第49図	磨製石剣実測図……………(65)
第22図	10号～13号甕棺実測図……………(32)	第50図	玉類実測図……………(65)
第23図	J区上坑実測図……………(34)	第51図	1号住居跡実測図……………(68)
第24図	円盤状土製品実測図……………(34)	第52図	1号住居跡出土遺物実測図……………(68)
第25図	弥生土器実測図1……………(35)	第53図	2号住居跡実測図及び出土遺物実測図……………(70)
第26図	弥生土器実測図2……………(36)	第54図	3号住居跡実測図……………(71)
第27図	弥生土器実測図3……………(37)	第55図	3号住居跡出土遺物実測図……………(72)
第28図	弥生土器実測図4……………(38)	第56図	土師器、須恵器実測図……………(73)

第1章 調査の過程

第1節 調査に至る経緯

山鹿市内8校区うちの一つである、市北西部の平小城校区内に梅迫遺跡は所在する。この平小城校区には山鹿市中心街から三加和町へ至る「県道和仁山鹿線」が幹線として通っている。この道路は交通量やバス路線であるにもかかわらず道幅が狭いため、地元住民から道路の拡幅が要望されていた。

近年になってようやく工事計画が具体化して、埋蔵文化財有無の照会が行われた。熊本県教育委員会の遺跡地図との照会の結果、予定地が周知遺跡の周辺部であったため、県の文化課により平成9年夏、試掘調査が行われた。試掘では、縄文時代と弥生及び古代の遺物が多量に出土し、遺構としてピットも検出された。県文化課は協議を行ったが、土木事務所は工事の設計上、計画の変更はできないということであったため、県文化課は記録保存のための発掘調査をする必要がある旨を伝えた。しかし、当時の県文化課は国体関係の発掘調査・整理作業が立てこんでおり、調査は平成11年度以降でしか行えないという状況であったため、それに従い土木事務所も工事着工を次年度以降に予定することになりつつあった。ところが、「どうしても今年度内着工を」との地元からの強い要望を受けたため、調査だけでも市教育委員会の方で対応できないかということになり、山鹿市と市教委、県土木事務所の間で再三話し合われた。結果、今回は異例ながら山鹿市教育委員会が発掘調査を担当することになった。

第2節 調査の組織(平成11年12月当時)

調査主体 山鹿市教育委員会

調査責任者 中原哲哉(山鹿市教育長)

発掘総括 木上幸一郎(文化課長)

調査事務 宮本栄次郎(山鹿市建設課用地対策室長)、狩野早智子(山鹿市建設課主任)、瀬上秀昭(山鹿市建設課主事)、木村理郎(文化課長代理)、八木田由美(博物館主査)、井上秋也(文化課主任主事)

調査指導 隈昭志(山鹿市立博物館館長)、中村幸史郎(山鹿市立博物館副館長)

調査員 山口健剛(山鹿市教育委員会文化課主事)

発掘作業員 一森正隆、茨木浩二、井口久代、岩永カシ子、緒方淳一、奥村千鶴子、坂本光、菊川健太、坂本須美子、下

田美恵、島崎貴代子、杉本房子、高橋道昭、磯父隆志、塚本政治、富田スミ子、中尾サツキ、仲間久美子、中村春子、谷田みどり、堀京之助、堀比沙子、福本洋子、松尾徳枝、松本エツ子、松永忠助、松本尚子、丸山アキヨ、村上孝司、森基正、山崎相子、吉田陽一、横手ユイ子

整理作業補助 前田軍治(山鹿市教育委員会嘱託)

整理作業員 木庭慶子、福本洋子、田代和之、森本タツ子、若杉敬子、平尾トシ子、城繁子、岡小夜子、中山三恵子、小原本実、宮田京子、山口美智子、森みつよ、木原真理、奥村千鶴子、堀京之助、堀比沙子、山崎相子、島崎貴代子、宮崎静子、堤竹千代、

調査助言・協力者 熊本県山鹿土木事務所(当時)、江本直、村崎孝宏、高木正文、三木ますみ(熊本県教育委員会)、坂田邦洋(別府大学)、中村修身(北九州市文化事業団)、西健一郎(九州大学)、富田純一(熊本市教育委員会)、幸平和(山鹿市文化財保護委員以下同)、松本敬治、児玉徳夫、古家横、横手大八、桑原憲彰、山下博孝、立山廣吉、河田久徳、地元区長ほか周辺住民(順不同、敬称略)

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の名称

梅迫遺跡は、熊本県山鹿市大字城字松ノ木原に所在する。本来、遺跡の名称は小字名が使われるのが通例であるが、以下の理由で梅迫遺跡と称することにする。一つは、当調査地は、以前から道路地図等で知られていた「梅迫遺跡」が続いていると考えられたためである。二つ目は、松ノ木原遺跡という遺跡が別にあり、しかも当遺跡と若干距離が離れ、地形的に同遺跡である可能性が低いためである。紛らわしいがご了承願いたい。

第2節 遺跡の立地する地形(第1・2図参照)

山鹿市は阿蘇外輪山西北部を水源として有明海に注ぐ菊池川の中流域に位置し、東西長さ約16キロにわたる菊池盆地の西部にあたる。市内は阿蘇火砕流堆積後、河川に侵食され形成された、いくつかの台地が周辺を取り囲む。当遺跡は市の北西部の平小城台地上に立地する。

平小城台地は、菊池川の支流の岩野川に沿って南北に長く伸びており、中央部のくびれを境に北側と南側に分けることができる。北側の台地に当遺跡は立地する。

北側の台地は、北東から南西に長く伸びており、現状で



第1図 山鹿市内主要遺跡分布図

1. 梅迫遺跡
2. 北原遺跡
3. 松ノ木原遺跡
4. 西付城跡
5. 城村城跡
6. 原口遺跡
7. 大原遺跡
8. 城下原遺跡
9. 東付城跡
10. 鬼天神古墳
11. 馬塚古墳
12. 西福寺古墳群
13. オブサン古墳
14. チブサン古墳
15. 西原遺跡
16. 川辺小学校校庭遺跡
17. 八幡林遺跡
18. 東鍋田遺跡
19. 五社宮石蓋土墳墓
20. 鍋田横穴群
21. 竜宮石棺群
22. 原ノ山遺跡
23. 牛草遺跡
24. 金屋塚古墳
25. 臼塚古墳
26. 弁慶ヶ穴古墳
27. 南島遺跡
28. 内曲遺跡
29. 笠仏遺跡
30. 桜町遺跡
31. 中村廃寺
32. 長沖遺跡
33. 蒲生上の原遺跡
34. 方保田東原遺跡

も東側は急な崖面、南側も勾配のある坂である。この崖下には、菊池川の支流である岩野川が北から南へ流れており、流域は広大な水田が広がる。この水田面から、遺跡のある台地までの比高差は約27mを測る。

現在、台地の東側は約70世帯からなる「城」という集落があり、川から離れた台地西半分はほとんどが畑地となっている。最近、ビニールハウスでのスイカ栽培が盛んに行われているが、養蚕が盛んだった戦後間もない頃までは、ほとんどが桑畑であった。

当遺跡の水資源の問題については、川と付近の湧水地の二通りが考えられる。台地下ではあるが、岩野川までは直線距離にして約600m離れており、現在も利用されている城集落内にある「井手」までは直線距離にして約400mのところにある。

第3節 歴史的環境

山鹿市は非常に文化財が豊富なところである。特に、市北西部にあたる平小城（ひらおぎ）地区はチブサン古墳に



第2図 梅迫遺跡周辺地形図及び周辺遺跡分布図

代表されるような装飾古墳をはじめ、縄文時代から中世まで絶え間なく数多くの文化財が存在する。

梅迫遺跡周辺部である山鹿市北西部を中心に市内の遺跡を時代ごとに概観してみる。

旧石器時代

この時代の遺跡は、市内は非常に少ない。長沖遺跡で黒曜石のマイクロコアが1点、蒲生下原遺跡で安山岩製の石槍と黒曜石製の細石刃、マイクロコアが出土している。今後の調査で、発見が望まれるところである。

繩文時代

前期、中期の遺跡が極端に少ない。現在散布地以外の周知している遺跡は、早期と後期及び晩期ごろの計7遺跡がある。

縄文時代の遺跡は、市北西部の鍋田台地や平小城台地、

さらに志々岐台地上に集中している。

まず、早期の主な遺跡としては、東鍋田遺跡、原ノ山遺跡、城下原遺跡、長沖遺跡そして蒲生上の原遺跡で土器片が出土している。前者4遺跡は調査面積が狭いため、多くを知ることはできないが、蒲生上の原遺跡では円筒形条紋文土器のほか県下では初めての帯状施文の押型文土器が出土している。

縄文時代後期以降になると、遺跡の数比較的多くなり、遺物の量も増える。主な遺跡は、東鍋田遺跡、牛草遺跡、城下原遺跡で、西平式、太郎泊式、御領式の土器のほか、打製石斧や石鏃なども出土している。遺物の量に反して、検出された遺構はわずかで、牛草遺跡で御領式期の2基の住居跡が検出されたのみである。このほか成竹遺跡から北久根山式土器と蛇頭彩土製品が表採されている。このほか梅田遺跡の周辺には原口遺跡、北原遺跡、大原遺跡が散布地として知られている。

晩期の遺跡は、東鍋田遺跡、西原遺跡、原ノ山遺跡、城下原遺跡があり、西原遺跡と城下原遺跡からは埋没が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、後期の集落跡が中心で、前期、中期の遺跡は少ない。これは調査数も関係していると思われるが、前期から中期の集落はほとんど不明である。当時期の様相を知る手がかりとなるのは、甕棺墓や石棺墓などの墓地からだけである。

市東部には蒲生下原（中尾下原）遺跡、市南部には内曲遺跡、南島遺跡、笠仏遺跡など中期後半が中心の甕棺墓群がある。なかでも蒲生下原遺跡では、前期末から中期後半にかけての甕棺墓が約100基確認されており、この地方ではかなり大規模な甕棺墓群として知られている。

梅迫遺跡周辺では松ノ木原遺跡が甕棺墓として知られている。昭和42年農道工事に発見され、当時の山鹿高校考古学部により調査された。中期後半ごろの5基の甕棺が出土した。そのほか地元の方の話によれば、以前から周辺の畑などで多量の土器片が出土していたということである。このほか、この遺跡からやや南の鍋田台地上には東鍋田遺跡から柱状片刃石斧が出土しており、中期中葉の大型の甕棺も検出されている。これ以外には、川辺小学校校庭遺跡、八幡林遺跡、五社宮石蓋土甕墓、竜宮石棺群で甕棺をはじめとする中期中葉から後葉にかけての遺物が出土している。

後期に入ると、ようやく方保田東原遺跡や蒲生上の原遺跡など集落跡が確認される。とくに、方保田東原遺跡は後期から古墳時代前期にかけての大規模な集落跡で、菊池川中流域における拠点的な集落として注目される。

古墳時代

古墳時代の集落址などは調査例がないため、詳しいことは述べられないが、後期を中心とした古墳、横穴墓は大変に多く、特に装飾のある古墳、横穴墓の多さは全国屈指の規模である。

梅迫遺跡周辺にはチブサン古墳、オプサン古墳、馬塚古墳のほか鬼天神古墳、馬塚南古墳、西福寺古墳群が知られている。さらに当遺跡が立地する台地の崖面には横穴群と付随横穴群があって、その数は確認されているものだけ

を合わせても、146基という相当数に上る。

このほか菊池川支流の岩野川流域には総数61基からなる鍋田横穴群が、古墳では鍋田東古墳、金屋塚古墳、白塚古墳、白塚西古墳が存する。上記の古墳で前方後円墳はチブサン古墳だけで、それ以外は円墳である。

古代～中世

律令制政治以降の山鹿の様相は、文献、考古ともに資料が少なく、あまりはっきりとは分かっていない。文献では『筑後国風土記』や『高山寺本和名類聚抄』（和名抄）のわずかな数行の記述だけである。和名抄から考えると、この遺跡周辺は「山鹿郡緒緒郷」に比定される。考古資料でも、調査例が少ないため多くを知ることはできない。須恵器や土師器の出土はわずかながらあるものの、それに伴う住居跡などの遺構の検出例はない。当遺跡近辺では、東鍋田遺跡から布目瓦片が数点出土している程しかない。やや東へ目を向けると、山鹿市内中心部付近で、軒丸瓦や布目瓦かなり出土し塔心礎が現存している中村庵寺（平安時代後期）や、布目瓦の出土地の山鹿郡衙推定地である桜町遺跡が知られている。

中世に入ると、知られている遺跡は城跡である。主に小山の山頂に築かれることが多く、市内における中世城の数は18に達する。中世の城や時宗、真言律宗、禅宗などの諸寺院は鎌倉末～南北朝初期に一斉に建立されており、中世でもこの時期が大きな変革期であったことが想定される。

さらに、時代が下って戦国時代末に「肥後国衆一揆」が起こり、肥後国主佐々成正と肥後の国衆が戦った。その戦いの最後の舞台となった城村城のほか、佐々氏の出城である西付城、東付城が当遺跡周辺に存在する。

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

今回の調査区は、草道に沿った長さ約90m、幅約5mの部分である。調査区は国土座標軸に沿って、5m四方のグリッドを設定し、北からA、B、C、…と、東から1、2、3、…と名づけた。この結果、調査区はF-9からW-4までとなった。（第3図）

表土までは重機で剥ぎ、それより下層については人力で掘り下げた。実測は、平板実測を1/100、甕棺は1/10、埋没を1/5、その他遺構を基本的に1/20の縮小で行った。

地表から地山までの深さは1.3~1.6mで、その間に主に縄文時代後期~晩期、弥生時代中期、歴史時代の遺物が出上し、2つの面から遺構が検出された。

第2節 層序

今回の調査でⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層(a、b)、Ⅴ層、Ⅵ層までの層序を確認した。しかし、調査区によって多少層序が異なり、確認されない土層もある。調査区G~M区まではⅣ~Ⅵ層が確認されず、Ⅲ層とⅥ層の間にⅤ層の土が混ざったカクラン層が入る。N区~V区までの整然とした堆積状況から考えると、G~M区の旧地形は現在よりもかなり標高が高かったのだが、古代頃に大規模な造成などで削られ、このような地形になったのではなからうか。また、最近の耕作(ゴボウを栽培していたと地元住民から聞く)の影響も受けているのであろう。基本的な土層の詳細は以下のとおりである。

Ⅰ層(0~30cm) 表土

Ⅱ層(30~55cm) 客土

Ⅲ層(55~95cm) 黒色土層(Hue7.5YR1.7/1)しまりがなく、粘性はあまりない。部分的に焼土粒を含む。縄文時代から古代にかけての土器、石器が出上する。

Ⅳ層(95~150cm) 暗褐色土層(Hue7.5YR3/3)しまりはあまりなく、粘性はない。火山灰層。縄文時代から弥生時代の遺物を包含する。アカホヤの二次堆積層と考えられる。やや暗い色調の土層を上層として分層した。

Ⅴ層(150~157cm) 暗褐色土層(Hue10YR3/4)しまりがあり、粘性がない。遺物は出土しない。

Ⅵ層(157~165cm) 黒褐色土層(Hue10YR2/2)しまっていて固く、粘性がない。全体に白い粒子を含む。遺物は無い。

Ⅶ層(165cm~) 黄褐色粘土層(Hue10YR5/8)しまり、粘性、共にある。

試掘の結果から、遺構確認面はⅣ層上面とⅤ層上面の2面にあることが分かっていたが、Ⅳ層と遺構の埋土が類似しており、Ⅳ層上面での検出は困難を極めた。微妙な土の違いからようやく古代の遺構を確認したが、それ以下の弥生時代、縄文時代の遺構はほとんど検出できなかった。また、Ⅴ層上面で確認できた遺構は、ほとんどがピットや土坑である。

第4章 調査の成果

第1節 縄文時代

今回の調査では、縄文時代後期、特に三万田式から御領式の土器が多く出土したが、それに伴う遺構はほとんど確認できなかった。わずかではあるが、当時代の遺構と判断できるものを挙げることにする。

1 遺構

(1) 土坑・ピット群(第4~5図)

第4~5図のとおり、ここで紹介する土坑・ピット群は、主にⅤ層及びⅥ層上面で検出されたものである。ピット群については住居跡等の建物の柱穴である可能性が考えられるのであるが、それを判断できるような規則的に並ぶピットは見あたらなかった。調査区の幅がわずか5m程度と狭いので、調査区が広がると規則的な並びのあるピットが確認される可能性は高い。土坑については、R-5区、Q-5区、Q-6区に一群あって、さらに、K-7区、K-8区にもう一群検出された。ただし、ほとんどの土坑で遺物の出土が無いので、縄文土器などを出土した土坑についてのみ記述する。

ア T-5 Pit1 Ⅳ層で検出した。プランはほぼ円形で、径は32cmで深さは12cmを測る。埋土から、割れたものを含めて、20点ほどの炭化したブナ科コナラ属(FAGACEAE Quercus)の種子が出土した。炭化種子は、埋土の中からの出土であり、並べられたような状態ではなかった。

イ T-5 Pit2 同じⅣ層で検出した。プランはほぼ円形で、径は31cm、深さは10cmであった。ここからも炭化した種子が8点出土し、共にして縄文後期の深鉢の底部が出土した。

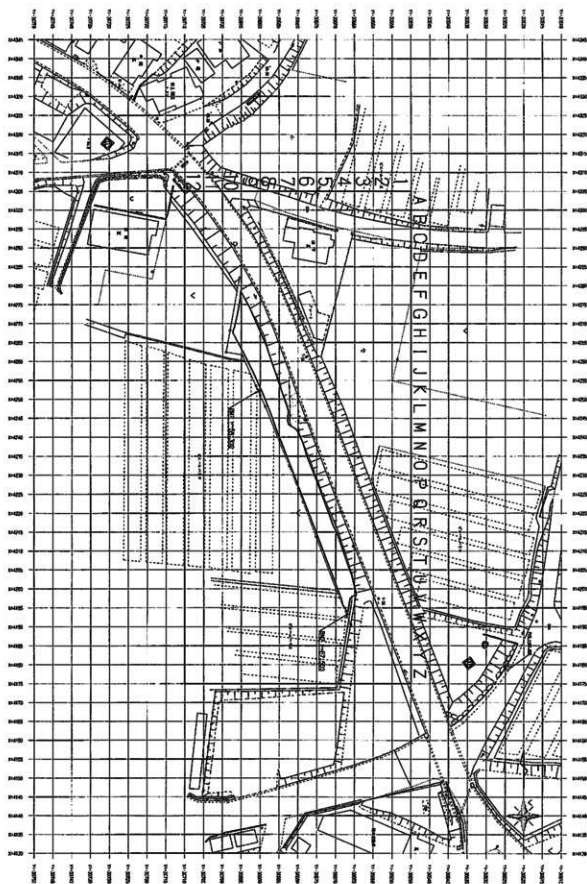
(2) 埋室

埋室は2基検出された。1号は欠番である。

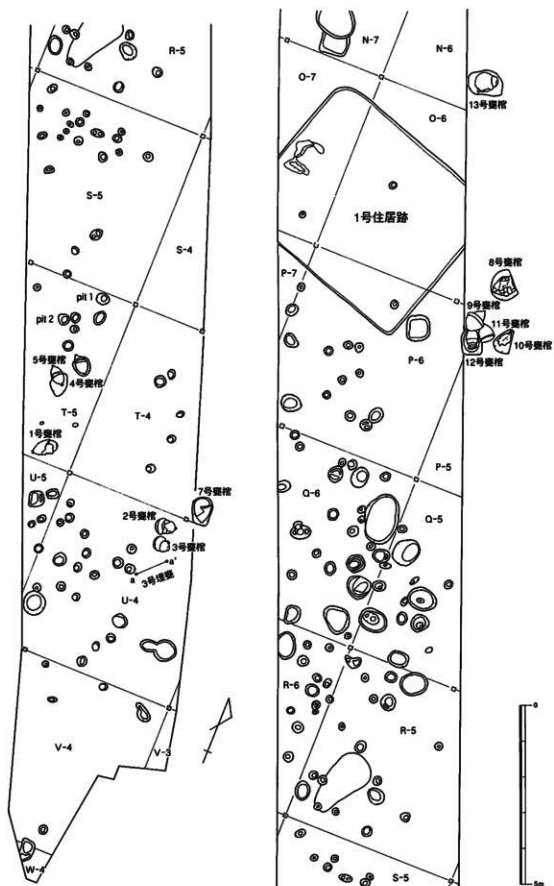
①2号埋室(第6図、第8図1 図版3、図版6)

2号埋室は調査区G-9区で確認された。残念ながら幕城が確認できなかったが、Ⅳ層に掘りこんでいたものと考えられる。下壁は口縁部側が北西に約25度傾いた状態で見つかった。上壁、下壁とも出土したが、北東部がカクランに覆っていたため、上壁の残存状況は良好ではなかった。

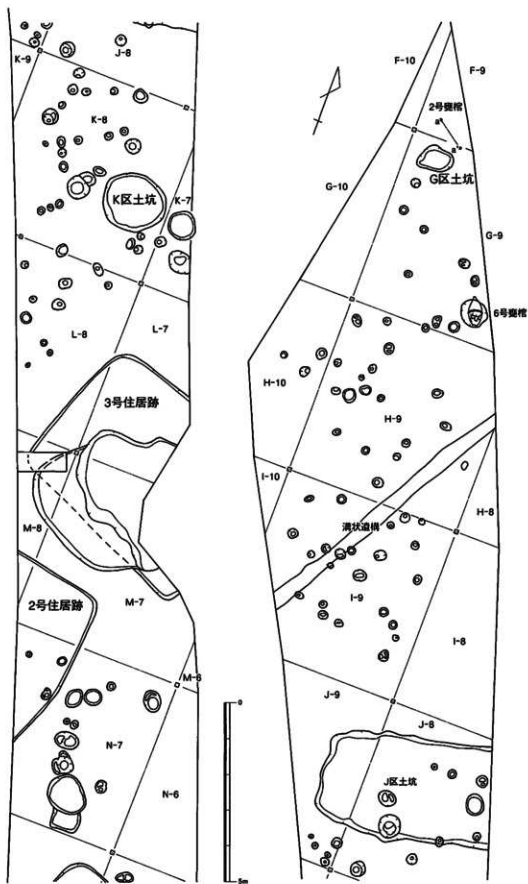
上壁は浅鉢で、底部は胴部の境が明瞭ではないが、平底気味である。口縁部は山形突起を有し、内と外にそれ



第3図 調査区グリッド設定図(S=1/1000)



第4図 梅迫遺跡遺構配置図①(M区~W区)



第5図 梅迫遺跡遺構配置図②(F区～N区)

ぞれ1条の沈線（しんせん）を施している。横方向のヘラ（へら）磨き（も）を施す。

下壁（したかべ）の深鉢（ふかばち）は、腹部（ふぶ）が横に広がり器高（きこう）が低い。腹部には界線（かいせん）を巡らし、底部（そこ）は若干（せう）上げ底（あげぞこ）である。ほぼ垂直（たて）に立ち上がる口縁帯（くちりんたい）には2条（ふた）の凹線（へりせん）がめぐる。外面（うへめん）の肩部（かた）には横方向（よこほう）のヘラ磨き痕（へらもきあと）、底部（そこ）から腹部（ふぶ）にかけては縦方向（たてほう）のヘラ磨き痕（へらもきあと）が見られる。内面（うちめん）は横方向（よこほう）のヘラ磨き（も）を全面（ぜんめん）に施（ほ）している。

②3号埋壘（第7図、第8図2 図版3）

3号埋壘（まいり）は調査区U-4区で検出された。こちらも墓標（もひょう）は確認（きんぬん）できなかった。弥生（やよい）時代の3号（さんごう）変棺（へんくわん）墓（ぼ）がすぐ北側（きたがわ）に隣接（りんせつ）していて、検出（けんしゅつ）した標高（ひょうこう）もほとんど同じ（おな）であったため、検出（けんしゅつ）当初（しゅじう）は包含層（ふくがんそう）の遺物（いぶつ）かと考えていたが、掘り進（ほりしん）めていくうちに元位置（もとゐ）を留（とど）めていたことが分（わ）かった。平棺（へいくわん）の埋壘（まいり）でほぼ直立（たて）した状態（じょうたい）で埋納（まいな）されたようである。土圧（どあつ）の影響（えいこう）か、土器（どき）の残存（ざんぞん）状況（じょうきく）が非常に悪（わる）く、胴部（どうぶ）から下位（げゐ）は腐化（ふくわ）できないほどに粉々（こな）に割（や）れていた。

底部（そこ）は厚く上げ底（あげぞこ）を呈（しやう）している。腹部（ふぶ）には界線（かいせん）を強調（きやうきう）したものの、屈折部（くつせつぶ）の上位（じやうゐ）が突帯（とつたい）をめぐらしているかのように膨（は）らんでいる。口縁帯（くちりんたい）には2条（ふた）の凹線（へりせん）が施（ほ）されているが、上位（じやうゐ）の凹線（へりせん）は非常に薄（うす）く、うっすらとしか見（み）えない。

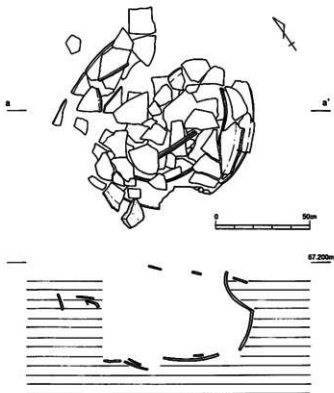
2 遺物

(1)土器（第9～14図 図版3、11～12）

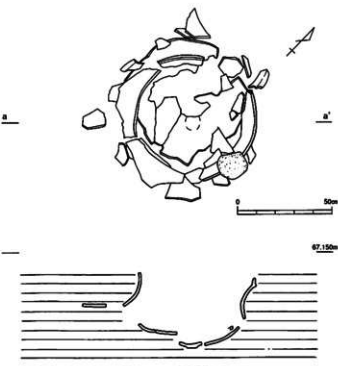
今回の調査（きさ）では、縄文（じま）時代（じだい）後期（こうき）から晩期（ばんき）の土器（どき）が出（で）土（ど）した。残念（ざんねん）ながら、土器片（どきかた）は小さいため、器形（きけい）を復元（ふくげん）できるのは非常に少（すく）ない。本来（もと）ならば、形式分類（けいしきぶんるい）を行うべきところであるが割愛（わりあい）させていただき、今（いま）までの研究成果（けんきうけいこ）を頼（たの）りに、型式（けいしき）ごとに分けて紹介（せうかい）することにとどめる。ご了承（ごうしや）願（ねが）いたい。

太郎迫式土器（第12図21～32、38、42～46）

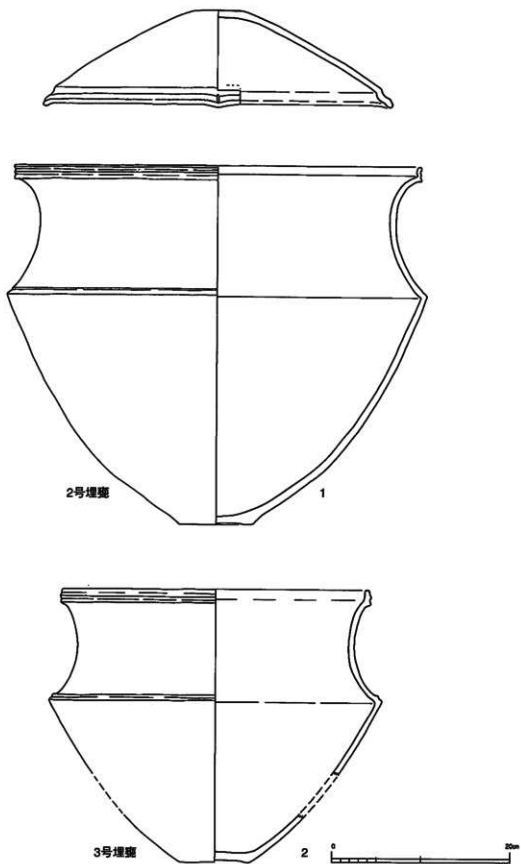
深鉢（ふかばち）が出（で）土（ど）した。すべて小片（せうぺい）の土器片（どきかた）しか出（で）土（ど）していないため、器形（きけい）全体（けんたい）を知る資料（しりょう）はなかつ



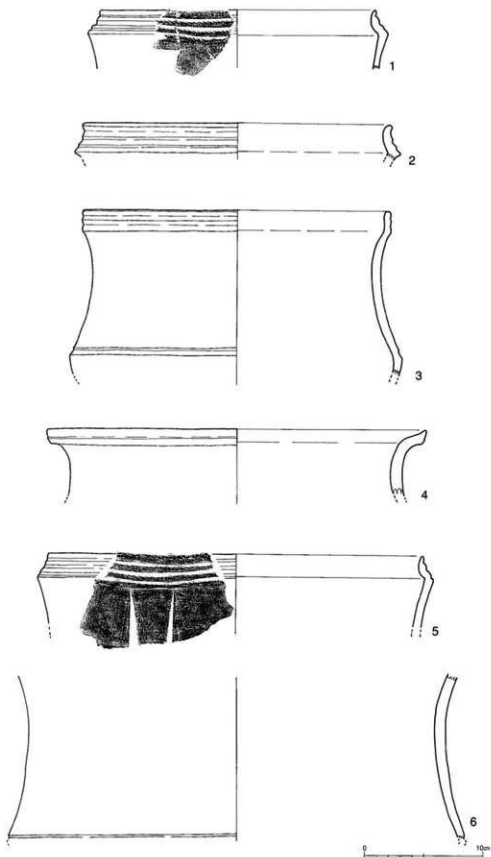
第6図 2号埋壘出土状況実測図



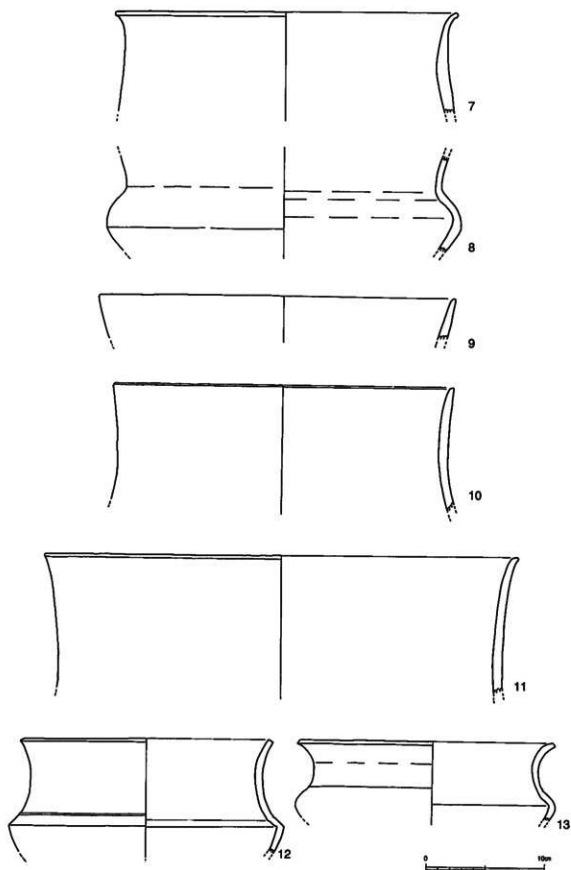
第7図 3号埋壘出土状況実測図



第8图 2号、3号埋甕实测图



第9図 縄文土器実測図(1)



第10図 縄文土器実測図(2)

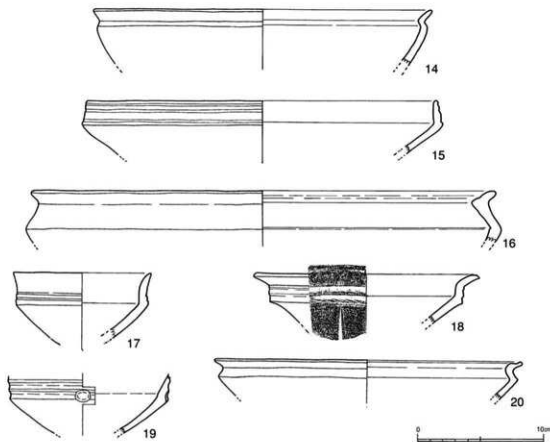
た。文様については、平行沈線文、鋸歯状文で構成されているものが出土した。磨り消し縄文が施されているものは極小片の2点のみであった。

深鉢(21～32, 38, 42～46) 29は沈線文とX字状沈線紋で構成された肩部と思われる。30, 32は胴部が球形に膨らむ深鉢の肩部であろう。平行沈線文の間に鋸歯状文が施文されている。31は、頸部で逆「く」の字状に折れ曲がる。肩部に平行沈線文と貼付粘土浮文、格子状の細線文が施されている。38は口縁部に2本の沈線が引かれ、下側の沈線の下に列点文が施される。波状口縁も出土した(44)。口縁部に2本の平行沈線がひかれ、口縁の波の頂部に刺突文が施されている。

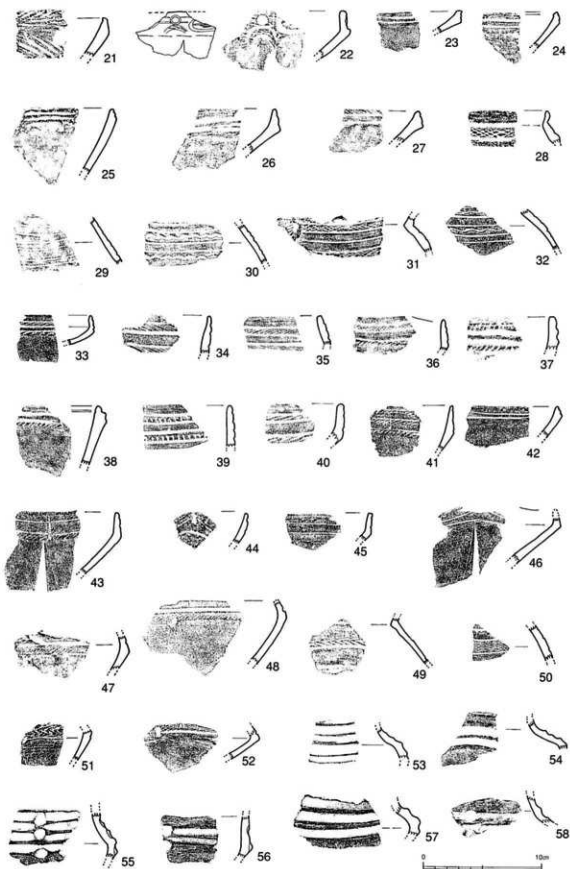
三万田式土器(第10～12図13, 17, 19, 33～37, 39～41, 47, 49～52) 深鉢と浅鉢が出土した。出土数はそれほど多くない。文様は、平行沈線文、細線羽状文で構成される。

深鉢(13, 47, 49～52) 13は小型深鉢で口縁部から胴部下半まで残っていた。胴部はやや丸みを帯びながら膨らみ、胴部上部に1条の沈線がはしる。胴部から口縁部に欠けてはきつく外反する。口径は胴部の最大径よりやや小さい。47, 51, 52は胴部の屈折する部分で、52は強く折れ曲がる。外面にやや幅のある沈線と細沈線が施され、51は羽状文がつく。49は肩部にあたり、胴部上位で屈曲し頸部へ続く。文様は平行沈線文と羽状文からなる。50も肩部でこちらはやや丸みを帯びる。沈線の間に細線羽状文が入る。

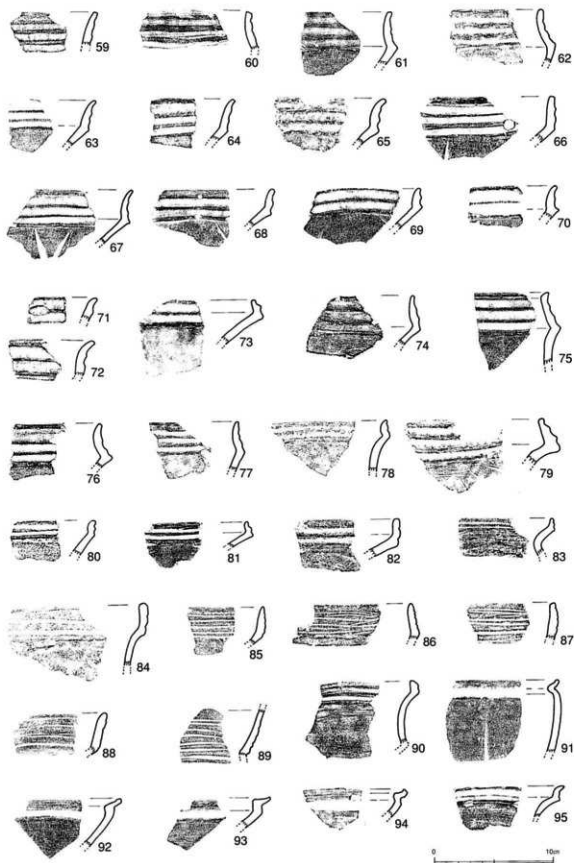
浅鉢(17, 19, 33～37, 39～41) 17は小型の浅鉢で底部を欠く。胴部で屈折し、若干内傾しながら頸部へ向かい、口縁部はわずかに外反する。胴部上半には2本の沈線がめぐる。土器片はすべて口縁部で、やや内傾するものと直立するものがある。文様は沈線文と細線羽状文または沈線文と列点文が組み合わされている。



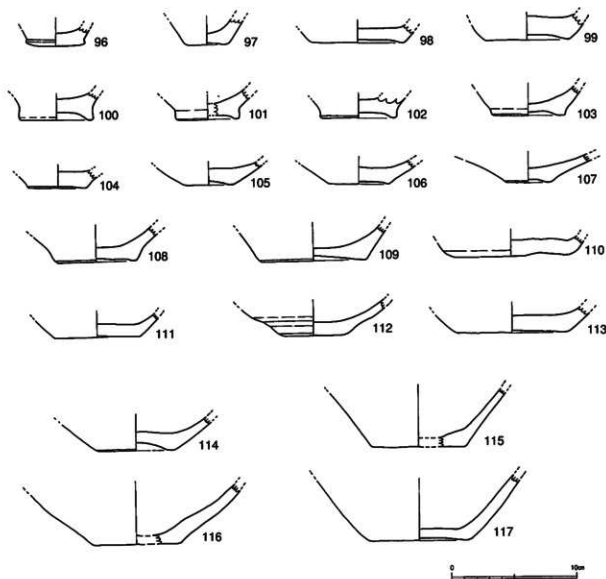
第11図 縄文土器実測図(3)



第12図 縄文土器実測図(4)



第13図 縄文土器実測図(5)



第14図 縄文土器実測図(6)

鳥居原式土器(第9~13図1~2.5, 18, 53~73, 75~77, 79)
 深鉢(1~2.5, 12, 60~62, 75~77, 79) 口縁は内傾し、内湾しながら胴部の最大径部へいたる。口縁部に3本の凹線が施してあり、そのうち1と5には凹線内の下半に細線羽状文が施文されている。これ以外の土器片は口縁部で、内傾する口縁部に2本から3本の凹線が施されている。
 浅鉢(18, 59, 63~73) 18は胴部から口縁部にかけてのもので、胴部で屈折し垂直気味に頸部へ向かい、そこから口縁はきつく外反する。胴部上半に2本の凹線がめぐる。土器片はすべて口縁部で、口縁は外反するか垂直に立つもので

ある。2本から3本の凹線文が口縁部に施され、66, 71は凹点文がつく。

注口土器(53~58) 小片が計6点出土した。すべて胴部の一部で、凹線文が施されている。また、55, 56, 58には凹線文と凹点文が組み合わされている。

御領式土器(第9~10図3, 7, 9~11, 第13図78, 80~84)

深鉢(3, 11, 78, 84) 3は胴部から口縁部にかけてのもので、胴部屈折部のやや上位に1条の沈線が施されている。78, 84と同様に口縁部はほぼ垂直に立ち、2本の凹線がめぐる。7, 9~11は口縁部を持たない深鉢の上半部である。

浅鉢(80~83) 小片のみの出土であった。口縁部の幅が小さくなり、2本の沈線が引かれている。83は口縁からきつく内湾しながら胴部へ続く。

天城式土器(第9図4、6、第13図85~88、90)

深鉢(85~88) 6以外はすべてI縁部である。88は若干外傾するが、それ以外は直立かわずかに内傾する。口縁帯には条痕がのこる。6は胴部で屈折部に沈線がめぐる。

浅鉢(90) 口縁部は直立し、内湾しながら胴部へつづく。I縁帯に2本の凹線が引かれているが、上側の凹線はかすかに見える程度しかない。

古陶I式(第11図16、20、第13図89、91~95)

深鉢(89) 口唇部を欠く口縁部1点が出土した。内湾しながら外に開くと考えられる。

浅鉢(16、20、91~95) いずれも短頸の口縁部である。

(2)土偶・土製品(第15図)

動物形土製品が1点(1)、土偶が7点(2~8)出土した。

1は四本足の動物をかたどった土製品である。K-8区で出土した。黒褐色を呈し、焼成は良好である。二次的被熱を受けており、首から前足にかけては明褐色を呈する。頭部と脚を欠いている。実測図で右側端部に肛門を表現したと思われる孔が施されているのが確認され、それをもって首尾方向を判断した。右前足の大腿部は粘土の隆起が見られ、脚の筋肉(ヒトでいう大腿筋)の様子を詳細に表現している。さらに、下腹部の膨らみを強調しており、妊娠したメスを表現していると思われる。肛門を表現したと思われる孔は、長さ(深さ)が6mm、幅が2mmである。どのような動物をかたどったのかという問題であるが、動物形土製品の中で最も多いイノシシにしては、あまりに首が細長いことからその特徴を表現しているものとは言えない。九州地方での出土例は少ないが、全国的な出土例から考えると、イヌの可能性が強いのではないと思われる。

2は右腕と思われる。U-4区で出土した。平坦な面(実測図では左側)が背中側で、やや膨らむ方を胸部と考えた。背中には沈線がナナメ方向に見られるが、焼成後に施されたものである。後世の傷である可能性もある。これも二次的被熱を受けている。

3は、胴体左半分と思われる。N-7区で出土した。脇に

あたる側面部分には、明瞭なくぼみが縦方向にある。さらに下側面には円錐形の差し込み痕が2箇所見られる。いわゆる不整合剥離面で、両脚だった棒状の物体が抜けた痕と考えられる。胴体部が軟らかい状態のときに両脚が差し込まれたことが分かり、脚の後に胴部が作られたという製作順序が見て取れる。また、表面にわずかではあるが、赤色顔料が所々に付着している。

4も胴体左半分であると考えられる。K-8区で出土した。背中側には肩甲骨を表したのであろうか、ミミズ状に膨らんだ部分がある。腹部はちょうど下腹部あたりが盛り上がり、欠損部表面がいずれも肌色に変色しているため、二次的被熱を受けていることがわかる。

5も胴体左半分であると思われる。L区で出土した。2本の太い棒状の粘土から胴体部を作るタイプのものであろう。胴体のくびれ部を表現するために、背中側に横方向に沈線上のしわが施されている。

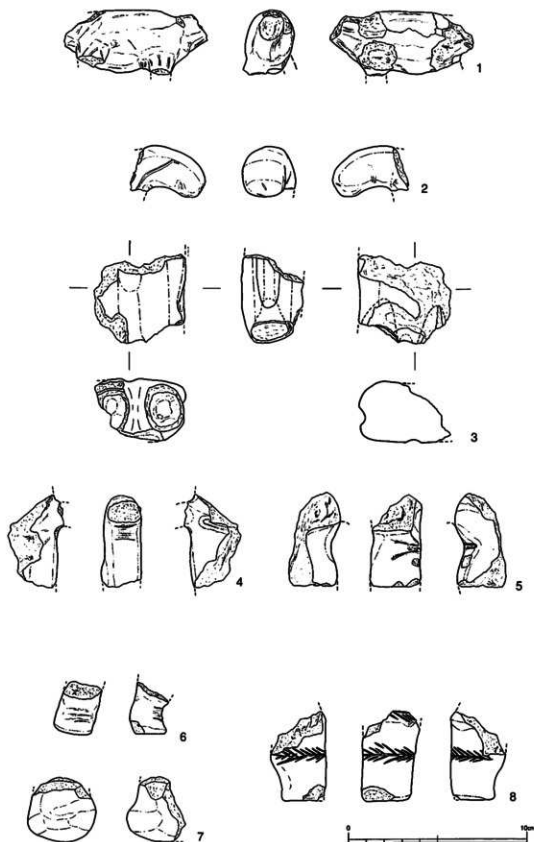
6は右足部である。K-8区で出土した。正面から見ると、やや内側に傾いており、横から見ると若干前方へ傾く。

7は大型の足か? G-9区で出土した。天地を逆にすると頭部にも見えるが、このタイプの頭部は類例が無い。ここでは、大型土偶の足としておきたい。

8も左足部である。V-4区で出土した。正面から見ると、内股のラインがわずかに内側へカーブする。横から見るとほぼ垂直に立つ。上端部は骨盤を表現したかのように、横にやや膨らみを持つ。その骨盤部と脚部中位には横方向に綾杉文が施されている。この綾杉文は三万田式土器の文様と非常に似ている。器面には、わずかに赤色顔料が付着する。

第1表 梅田追跡 縄文土器 一覧表

No	地区	村	器種	部位	色調	Hue	備考	No	地区	村	器種	部位	色調	Hue	備考
1	J-8	野村	深鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4	1E:23.0, L:5.0	61	O1K	野村	深鉢	1 輪部	黒褐色	Hue10YR2/1	
2	U-4	野村	深鉢	1 輪部	灰黄褐色	Hue10YR6/2	1E:25.6, L:3.0	62	V-4	野村	深鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4	
3	S-4	一括	深鉢	上下	明褐色	Hue10YR6/6	1E:25.0, L:3.8	63	T-5	野村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR6/4	
4	遺物No. 1302	深鉢	1 輪部	黒褐色	Hue7.5YR2/1	1E:32.0, L:5.0		64	T-5	野村上村	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR4/3	
5	J1K	一括	深鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR4/3	1E:31.4, L:3.0	65	Q-5	野村	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue2.5YR6/8	
6	遺物No. 1575	深鉢	胴部	暗褐色	Hue10YR3/3	1E:31.2, L:3.7		66	331往	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・褐色	Hue7.5YR5/4	
7	遺物No. 1000	深鉢	1 輪部	黒褐色	Hue7.5YR2/2	1E:28.4, L:3.4		67	U-1	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・赤褐色	Hue5YR5/4	
8	J1K	P-5	浅鉢	胴部	にじみ・黄褐色	Hue10Y5/4	L:3.0	68	O-6	野村	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue5YR6/6	
9	T-3	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・赤褐色	Hue5YR6/4	1E:30.4, L:3.2	69	K-8	野村	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue5YR6/6	
10	11往	P-27.78	深鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4	1E:23.0, L:5.0	70	T-5	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3	
11	遺物No. 1388	深鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR4/6	1E:29.0, L:11.3		71	U-1	野村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3	
12	遺物No. 1571	浅鉢	上下	褐色	Hue7.5YR3/3	1E:20.8, L:3.7		72	N-7	一括	浅鉢	1 輪部	赤褐色	Hue5YR4/6	
13	N-6	一括	浅鉢	上下	暗褐色	Hue7.5YR2/3	1E:20.0, L:3.6	73	U-4	野村上村	浅鉢	1 輪部	灰褐色	Hue2.5YR2/6	
14	H-9	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR3/2	1E:26.6, L:4.5	74	T-5	野村上村	深鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR7/6	
15	R-6	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/4	1E:27.8, L:4.2	75	G-9	P-2	深鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR7/6	
16	H-9	P-19	浅鉢	上下	出	Hue1.5N/1	1E:36.0, L:3.0	76	U-1	野村	浅鉢	1 輪部	暗褐色	Hue9Y3/1	
17	R-5	野村上村	浅鉢	底部分	にじみ・褐色	Hue7.5YR5/4	1E:10.8, L:10.6	77	V-1	野村	深鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR6/6	
18	V-4	野村	浅鉢	上下	暗褐色	Hue7.5YR3/3	1E:16.8, L:3.0	78	Q-5	野村上村	深鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4	
19	Q-6	野村上村	浅鉢	胴部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4	1E:13.8, L:3.7	79	T-3	野村上村	深鉢	1 輪部	黒褐色	Hue10YR5/3	
20	T-1	野村	浅鉢	上下	暗褐色	Hue10YR4/1	1E:23.0, L:5.0	80	I-9	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/4	
21	H-9	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4		81	21往	一括	浅鉢	1 輪部	灰黄褐色	Hue10YR5/2	
22	T-3	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3		82	H-9	野村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR6/4	
23	K-8	野村直上	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue5YR7/6		83	K-8	野村直上	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue5YR7/6	
24	N-6	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue7.5YR7/4		84	Q-6	野村上村	深鉢	1 輪部	にじみ・褐色	Hue7.5YR6/3	
25	U-4	野村	深鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR7/4		85	H-9	野村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3	
26	G-9	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		86	S-5	野村	深鉢	1 輪部	黄褐色	Hue7.5YR7/6	
27	V-4	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue5YR6/4		87	Q-6	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4	
28	O-6	野村	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		88	Q-6	野村	深鉢	1 輪部	褐色	Hue5YR6/6	
29	U-4	野村上村	深鉢	胴部	灰黄褐色	Hue10YR4/2		89	K-8	野村	深鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR7/4	
30	G-9	野村上村	深鉢	胴部	にじみ・褐色	Hue7.5YR5/3		90	S1K	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4	
31	P-6	野村上村	深鉢	胴部	黒褐色	Hue10YR3/1		91	T-1	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3	
32	T-5	野村上村	深鉢	胴部	にじみ・赤褐色	Hue5YR6/4		92	J-9	野村直上	浅鉢	1 輪部	黒褐色	Hue7.5YR3/1	
33	L-8	一括	浅鉢	1 輪部	赤褐色	Hue5YR3/2		93	H-9	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR7/3	
34	J-8	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		94	331往	一括	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR6/6	
35	N-7	野村	浅鉢	1 輪部	灰褐色	Hue7.5YR4/2		95	T-5	野村	浅鉢	1 輪部	黒褐色	Hue2.5YR3/1	
36	V-4	野村上村	浅鉢	1 輪部	黒褐色	Hue7.5YR3/2		96	Q-6	野村上村	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		
37	N-7	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue10YR7/3		97	Q-6	一括	一 底部	にじみ・黄褐色	Hue10YR7/3		
38	H-9	野村	深鉢	1 輪部	黄褐色	Hue2.5YR6/1		98	N-6	一括	一 底部	明赤褐色	Hue2.5YR5/6		
39	G-9	野村	浅鉢	1 輪部	褐色	Hue7.5YR2/1	ペン99付着	99	J-8	野村上村	一 底部	にじみ・黄褐色	Hue10YR7/4		
40	N-7	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4		100	V-4	野村	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4		
41	N-7	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4		101	Q-6	野村上村	一 底部	褐色	Hue5YR6/6		
42	S-5	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		102	S-5	野村上村	一 底部	明褐色	Hue7.5YR5/6		
43	S1K	一括	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3		103	N-7	一括	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4		
44	J-9	野村上村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR7/2		104	R-5	一括	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		
45	R-5	野村直上	浅鉢	1 輪部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		105	J-8	野村上村	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		
46	S-5	野村上村	深鉢	1 輪部	黒褐色	Hue10YR2/2		106	H-9	野村直上	一 底部	褐色	Hue5YR6/6		
47	U-4	野村	深鉢	胴部	にじみ・褐色	Hue7.5YR5/3		107	T-3	野村上村	一 底部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3		
48	U-4	野村	浅鉢	1 輪部	にじみ・黄褐色	Hue10YR5/3		108	Q-6	野村	一 底部	褐色	Hue7.5YR6/6		
49	G-9	野村上村	深鉢	胴部	暗赤褐色	Hue5YR3/4		109	H-9	一括	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4		
50	N-7	野村	深鉢	胴部	褐色	Hue5YR6/6		110	N-7	野村上村	一 底部	にじみ・棕色	Hue10YR6/3		
51	O-7	野村	深鉢	胴部	黒褐色	Hue10YR2/2		111	N-6	野村	一 底部	暗赤褐色	Hue5YR4/1		
52	T-3	野村上村	浅鉢	胴部	褐色	Hue5YR2/1		112	R-5	野村	一 底部	明赤褐色	Hue5YR5/6		
53	T-5	野村上村	注1 胴部	暗赤褐色	Hue2.5YR5/6		113	S-5	野村	一 底部	褐色	Hue5YR7/8			
54	S-5	野村上村	注1 胴部	黒褐色	Hue7.5YR3/1		114	F-9	野村	一 底部	褐色	Hue7.5YR6/6			
55	P-5	野村上村	注1 胴部	暗赤褐色	Hue2.5YR2/2		115	N-7	野村上村	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4			
56	21往	P-33	注1 胴部	にじみ・棕色	Hue7.5YR5/4		116	N-7	野村	一 底部	褐色	Hue5Y4/1			
57	21往	P-32	注1 胴部	にじみ・棕色	Hue7.5YR7/4		117	遺物No. 1532	一 底部	にじみ・棕色	Hue7.5YR6/4				
58	V-4	野村	浅鉢	注1 胴部	褐色	Hue2.5YR6/6									
59	N-6	野村	深鉢	1 輪部	褐色	Hue5YR7/6									
60	V-4	野村	深鉢	1 輪部	灰黄褐色	Hue10YR5/2									



第15図 動物形土製品 土偶実測図

第2節 弥生時代

1 遺構

弥生時代の遺構は、甕棺墓が13基、土坑が3基である。住居跡などは検出しなかった。

(1) 甕棺墓(第17～18図 図版2～4、図版6～9)

甕棺墓は調査区全体で13基確認した。番号は検出した順につけたため位置と番号がバラバラになってしまっているがご了承願いたい。

① 1号甕棺墓(第17図1、第19図1 図版3、図版6)

T-5区で検出した。上甕が鉢で、下甕が甕の合口甕棺墓である。主軸はN-58°-Eで、埋納角度は35°である。上甕が後世の耕作等で破壊されており、そこから土が流れ込んで埋まっていた。なお、墓域の埋土と検出面の土の判別がほとんどつかず、墓域は確認できなかった。

1号甕棺墓からは、磨製の石製刀子が1点出土した(第16図)。出土状況は刃を天に向け、切先が底部方向に向いていた。ただし、かなりの土が流入しているため、埋葬時の位置を保っている可能性は大変低い。刀子の大きさがそれほど大きくないこと、甕棺も小児棺であるこ

とから考えて、この刀子は埋葬された者への護身用として副葬されたもの、あるいは生前に携帯していたものを副葬したものではないかと考える。

上甕の鉢は、胴部から口縁部までしか残存していなかった。口縁部はいわゆる鋤形を呈し、その下に1条の三角突帯を施している。器面調整は、内器面及び外器面の胴部から突帯部までは横方向のへら磨き、外器面の突帯部から口縁部にかけてはナデである。胴部下半の一部に黒斑を有する。

下甕は中型の甕である。底部は上げ底で、胴部のやや上位が最大径になる。丸みを帯び厚だった口縁部はわずかに内傾する。その下には1条の三角突帯がめぐる。底部から口縁部下の突帯まではハケ調整、口縁部はナデ調整が施されている。

石製刀子は長さ11.7cm、幅2.9cm、厚さ0.8cmを測る。緑色片岩製で、刃部は研磨によって丁寧に調整されているが、基部は打製による調整のみである。

② 2号甕棺墓(第17図2、第19図2 図版3、図版6)

U-4区で検出した。墓域は確認できなかった。上甕が甕型上器、下甕が甕の合口甕棺墓である。主軸はN-79°-Eで、埋納角度49°である。下甕の穿孔部が床面の方を向いていた。甕棺墓内部からの遺物はなかった。

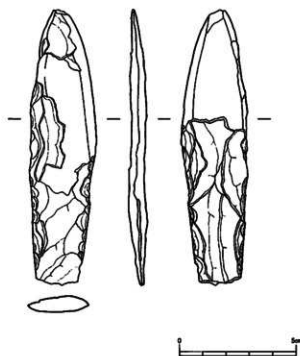
上甕は最大径が胴部やや上位の小型の甕である。脚台状の底部を有し、断面形が分厚い三角形を呈する口縁部を持つ。口縁部上面は平坦である。器面は、口縁部のナデ調整以外はすべてハケで調整しているが、最大径の部分に境に方向が異なる。最大径から底部にかけては縦方向で、胴部は横方向になる。

下甕は甕で、口縁部を欠く。底部は平底で、最大径になる胴部やや上位に1条の突帯を有する。また、胴部中位で穿孔が施されている。底部から胴部下位は縦方向の、そこから上位は横方向のへら磨きによる器面調整がなされている。

③ 3号甕棺墓(第17図3、第19図3 図版3、図版7)

U-4区で検出。2号甕棺墓とほぼ平行に隣接している。上甕が鉢で、下甕が甕の合口甕棺墓である。主軸はN-46°-Eで、埋納角度は64°。副葬品と思われるような遺物は何も出土しなかったが、東へ約1mの地点で埋葬時に打ち欠かれたと思われる下甕の口縁部が出土した。

検出した時点で、下甕の胴部に6本からなる直線状の



第16図 1号甕棺内出土石製刀子実測図

へう描き文が確認された。へう描きの部分はちょうど真上を向いており、埋葬時にはこれを意識していたと思われる。

なお、検出位置は2号甕棺墓と隣接しており、レベルもほとんど変わらない。また、下甕の器形もよく似ていることなどから考えると、2号、3号の埋葬された時期差はほとんどないものと考えられる。

3号甕棺の上甕は鉢である。平底の底部で、口縁部下には1条の突帯がめぐり、平坦な口縁部にはナデ調整が施されている。この部位以外の器面調整については、器面の残存状況が良好でないために確認できない。

下甕は中型の甕で、平底の底部から外傾しながら立ち上がり、最大径で1条の三角突帯がめぐり肩部を境にして内傾する。口縁はラッパ状に開き、上面はやや内傾する。外器面は全体にへう磨きが施されており、口縁部はナデ調整である。

また、前述のように肩部には5つの箇所5～6本の沈線が描かれてある。この沈線は特に平行というわけでもなく、長さ、幅、向きともにバラバラである。施文箇所の間隔はほぼ同じである。

④ 4号甕棺墓(第17図4、第20図4 図版3、図版7)

T-5区で確認された。主軸はN-135°-Eで、埋納角度は40°であった。甕棺の残り具合はとてもよく、土圧によるヒビが入っていたものの、土はほとんど流れ込んでいなかった。

上甕、下甕ともに甕の覆口式甕棺墓であるが、下甕の口縁部を打ち欠いてあり、口径の大きい上甕が下甕の一部を覆うように組み合わせてあった。甕棺墓内部からの遺物はなかった。

上甕は小型の甕である。脚台状の底部で、胴部上位が最大径となる。口縁部は分厚く、丸みを帯びており、上面はほぼ平坦である。口縁部、及び口縁部下は幅5cmがナデ調整で、そのほかはすべてハケ調整を施している。

下甕も小型の甕で、口縁部は打ち欠かれ残っていない。脚台状の底部を有し、胴部やや上位が最大径となり、そこから頸部にかけてややすぼまる。また、胴部上位には1条の沈線を施している。器面調整は全体的にハケで、口縁部のみナデ調整である。

⑤ 5号甕棺墓(第17図5、第20図5 図版3、図版8)

T-4区で検出された。主軸はN-133°-Eで、ほとん

ど4号甕棺墓と同じ向きをとる。埋納角度は35°。墓域は甕棺が入るぎりぎりの大きさに掘っている。残存状況は良好で、甕棺内部への土の流入もほとんどなかったが、土圧のために下甕が横に広がった楕円形に変形していた。

5号甕棺墓も、上下ともに甕の覆口式甕棺墓で、こちらでは4号甕棺墓とは逆で、上甕の口縁部が打ち欠いてある。しかし、上甕の口径が大きいので、同様に上甕が下甕を覆う状態となっている。

内部に遺物は何もなかった。

上甕は小型の甕で、外器面の全面にススが付着していた。脚台上の底部で、胴部やや上位が最大径になる。そこから口縁部までは残存していない。全面ハケ調整である。

下甕も上甕と同じく小型の甕で、やや裾が広がった脚台状の底部を持つ。胴部やや上位が最大径で、口縁部下には1条の沈線がめぐり、口縁部は断面が角の丸い三角形を呈し、上面がほんのわずかに内傾する。器面は、沈線から上位はナデ調整で、それ以外はハケ調整を施している。

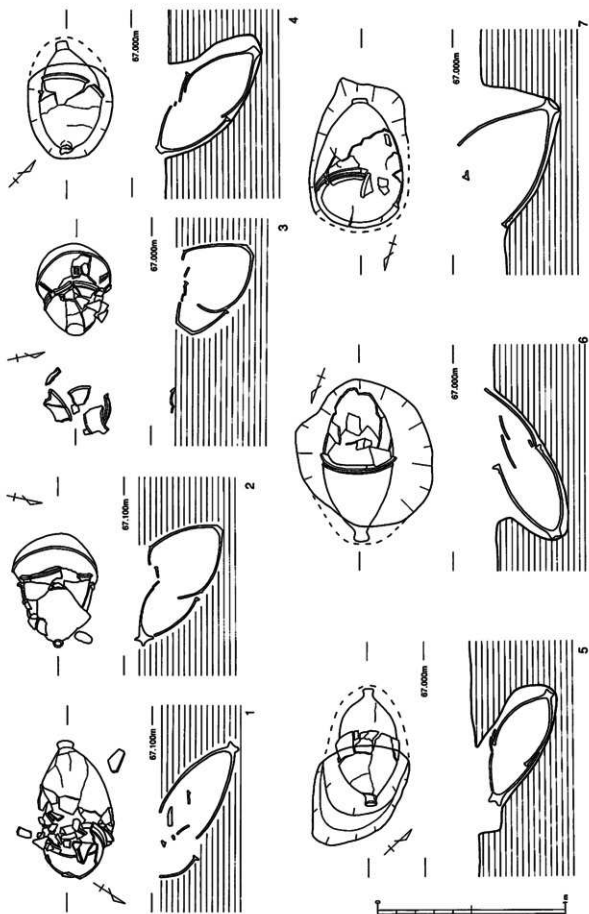
⑥ 6号甕棺墓(第17図6、第20図6 図版3、図版8)

G-9区で検出された。主軸はN-21°-W、埋納角度は63°である。墓域は円形のプランで、V層に掘りこんでおり、大きさは甕棺とほとんど変わらない。墓域内にはV層の土が埋まっていた。

上甕、下甕ともに甕の合口式甕棺墓で、上甕の口縁部は打ち割られている。また、上甕は土圧のためつぶれており、そこから土が流入している。遺物はなかった。

上甕は小型の甕で、胴部中位から下は被熱し、色調が赤褐色となっている。口縁部と底部を欠いているが、口縁部は埋葬当初から打ち欠かれてはいなかったものと考えられる。最大径は胴部上位で口縁部下には断面が三角形の刻目突帯が1条めぐっている。また、その突帯の下位は幅8mm程度凹線状にくぼんでいる。器面は全体的にハケ調整で、突帯の下5cm幅はナデで調整されている。

下甕は中型の甕で、脚台状の底部を有する。胴部やや上位が最大径で、口縁部下に1条の三角突帯がめぐり、口縁部は断面が三角形で、上面はやや内傾する。底部から胴部にかけてはハケ調整が、口縁部はナデ調整が施されている。



第17图 1号~7号菱帽属实测图

⑦7号壺棺墓(第17図7、第21図7 図版4、図版7)

T-4区で検出された主軸N・19°・W、埋納角度46°の単棺の壺棺である。墓域は長方形のプランであったと考えられ、検出面から床までの深さは41cmであった。

7号壺棺は中型の甕で、裾がやや広がる上げ底の底部を持つ。胴部上位が最大径になり、内湾しながら口縁部へ至る。口縁部下には2条の三角突帯が施されている。口縁部は上面がややくぼみ、やや内傾する。底部にはハケ調整の痕がみられ、胴部上位から口縁部にかけてはナデ調整が施されている。

⑧8号壺棺墓(第18図8、第21図8 図版4、図版7)

O-6区で検出された単棺と思われる壺棺墓である。この壺棺は頸部から口縁部にかけて掘削されて残っていなかったため、上甕があった可能性も完全には否定できない。墓域は楕円形を呈しており、長軸は推定で1m、短軸は0.8mを測る。遺物はない。

8号壺棺は丸みを帯びた中型の甕である。平底の底部で、緩やかに内湾しながら胴部に続く。胴部やや上位が最大径の部分で、そこには1条の三角突帯が貼り付けられている。口縁部は、断面形が角の丸い三角形を呈しており、上面は平円で、やや内傾する。器面調整は、焼成が不良のため不明瞭だが、口縁部にナデ調整が施されているのは確認できた。

⑨9号壺棺墓(第18図9、第21図9 図版4、図版8)

O-6区とP-5区の境で見つかった。この部分は、3つの壺棺が非常に密集した状態で検出された。9号壺棺墓上甕のすぐ下に12号壺棺墓があり、そして9号壺棺墓の覆口部東脇には11号壺棺の底部があるという状態である。

9号壺棺は主軸がN・157°・W、埋納角度が31°で、上甕が鉢、下甕が甕型土器の覆口式壺棺墓である。上甕の口径が下のそれよりも大きいので、上甕が下甕の中位まで被さった状態で検出された。上下甕とも上庄のためにやや下につぶれており、壺棺内部は土が流れ込んでいた。

9号壺棺上甕は、大型の鉢である。平底の底部から直線状に開き、胴部上位から口縁部にかけて直立する。口縁部下に1条の三角突帯をめぐらす。口縁は外側にのびた鋸形口縁で、上面はやや膨らみ、わずかに内傾する。精

緻なつくりで、器面は縦ハケ調整の後、胴部から下半は斜め方向のヘラ磨きが施され、口縁部は横方向のナデ調整が施されている。

下甕は中型の甕で、長胴である。やや裾が広がる脚台状の底部からほぼ直線状に、最大径である胴部上位へ伸びていく。そこから内湾しながら口縁部へ至る。口縁部下には断面が三角形の突帯がめぐる。口縁部は薄く、しゃくれあがる。器面調整は、全面にハケ調整で、口縁部にはナデ調整がさらに施される。

⑩10号壺棺墓(第18図10、第22図10 図版4、図版8)

P-5区で検出された。西隣には11号壺棺がある。10号壺棺は、かなりの削平をうけており、縦半分しか残っていなかった。そのため、単棺か複棺であったかは不明である。主軸はN・164°・W、埋納角度は推定18°である。

壺棺は小型の甕であるが、胴部上位から口縁部を欠いている。脚台状の底部を持ち、胴部やや上位が最大径になる。底部にハケ調整が施される。

⑪11号壺棺墓(第18図11、第22図11 図版4、図版9)

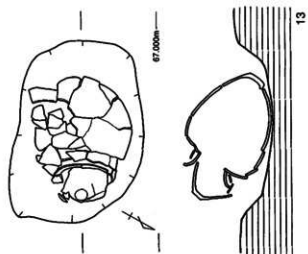
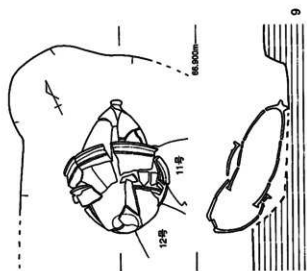
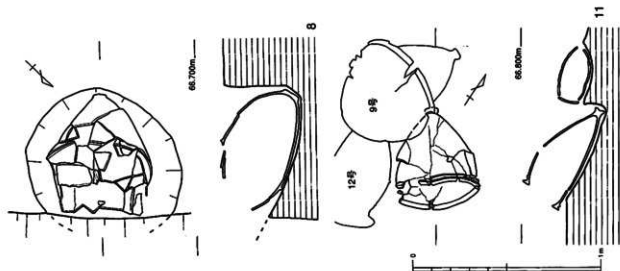
P-5区で検出された。西隣には12号壺棺墓があり、胴部下半上面には9号壺棺がある。主軸N・144°・E、埋納角度38°の単棺の壺棺墓で、遺物は出土しなかった。

11号壺棺は中型の甕で、低い脚台状の底部から胴部へと立ちあがり、最大径である胴部やや上位から若干内湾しながら口縁部に至る。口縁部下には三角突帯が1条めぐり、口縁部は内傾し、上面はややくぼむ。器面全面にハケ調整が施され、突帯部および口縁部はナデ調整が施されている。

⑫12号壺棺墓(第18図12、第22図12 図版4、図版9)

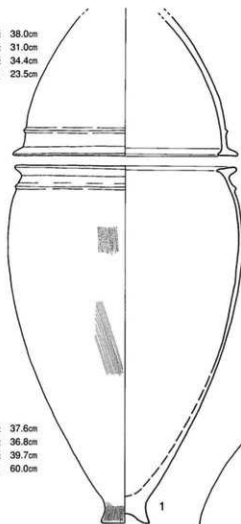
P-4、5区の境付近で見つかった。主軸はN・157°・Eで、埋納角度は18°を測る。1体の完形の壺からなる単棺の壺棺墓で、蓋などは確認されなかった。墓域は不整五角形で、底部方向にいくに従ってすばまっていく。最も長いところで長さ0.8m、幅0.6mになる。深さは検出面から0.2mである。

壺棺は中型の卵形甕を呈する甕である。底部は平底で、胴部やや上位が最大径になる。最大径である胴部やや上位と頸部、さらにその中間の肩部の合計3ヵ所に、それぞれ1条の突帯がめぐる。胴部と肩部は刻み目突帯で、頸部は三角突帯が施されている。口縁部は

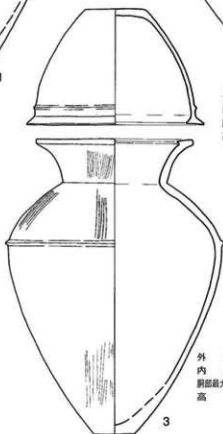


第18图 8号~13号墓棺盖实测图

外 径 38.0cm
内 径 31.0cm
胴部最大径 34.4cm
高 さ 23.5cm



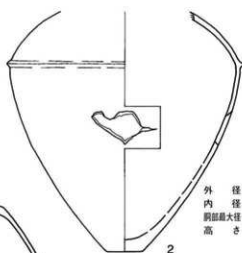
外 径 37.6cm
内 径 36.8cm
胴部最大径 39.7cm
高 さ 60.0cm



外 径 30.0cm
内 径 24.0cm
胴部最大径 27.4cm
高 さ 20.0cm

外 径 26.6cm
内 径 21.0cm
胴部最大径 37.0cm
高 さ 49.6cm

外 径 31.8cm
内 径 26.4cm
胴部最大径 30.0cm
高 さ 36.8cm

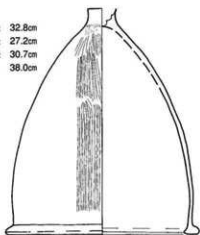


外 径 22.0cm
内 径 22.4cm
胴部最大径 40.0cm
高 さ 40.2cm



第19図 1号～3号甕棺実測図

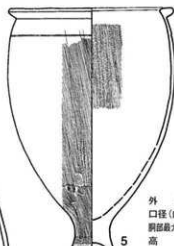
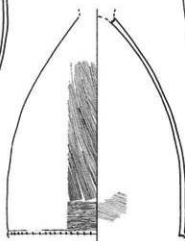
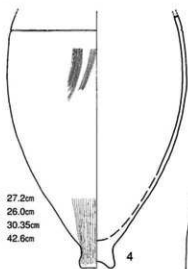
外 径 32.8cm
内 径 27.2cm
胴部最大径 30.7cm
高 さ 38.0cm



外 径 29.4cm
口径(内) 28.4cm
胴部最大径 29.8cm
高 さ 34.4cm

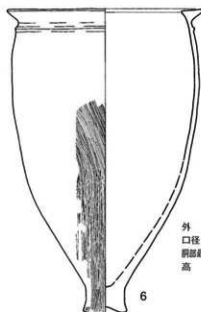


外 径 27.2cm
内 径 26.0cm
胴部最大径 30.35cm
高 さ 42.6cm



外 径 28.0cm
口径(内) 23.0cm
胴部最大径 28.1cm
高 さ 40.2cm

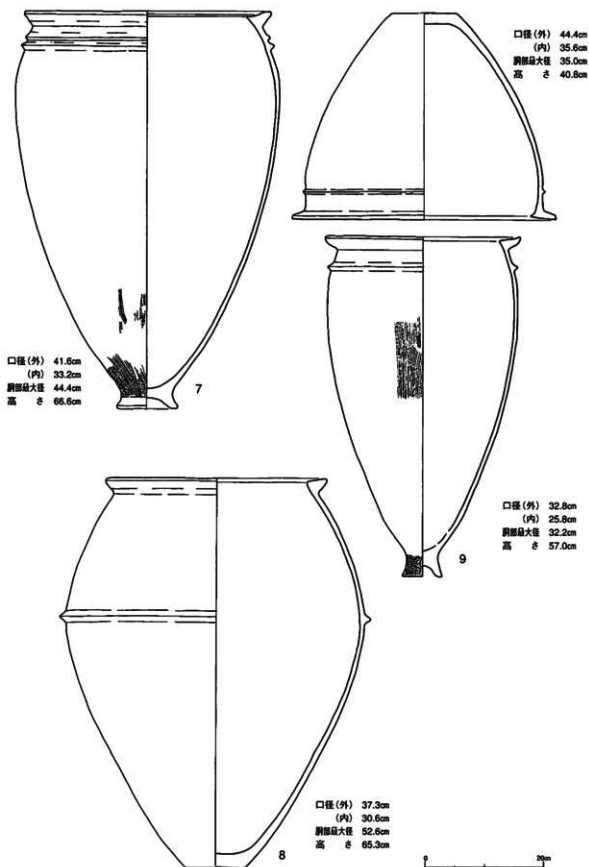
外 径 29.6cm
内 径 26.8cm
胴部最大径 30.2cm
高 さ 37.0cm



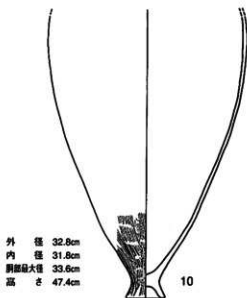
外 径 33.2cm
口径(内) 33.6cm
胴部最大径 31.8cm
高 さ 51.3cm



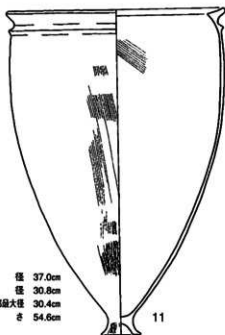
第20図 4号~6号甕棺実測図



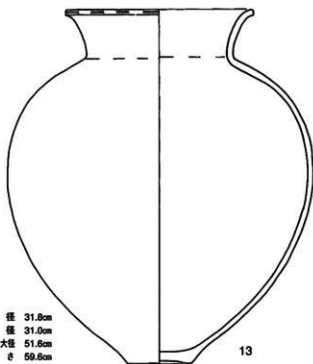
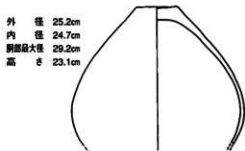
第21図 7号～9号甕棺実測図



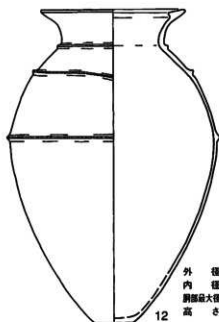
10



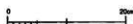
11



13



12



第22図 10号~13号甕棺実測図

外湾しながら外に開き、上面は中央がややくぼみ、若干内傾する。肩部と口縁部の外器面に縦のハケ調整が施されている。

⑬13号甕棺墓(第18図13、第22図13 図版4、図版9)

N-5区で検出された。主軸はN-65°・Eで、埋納角度は29°である。甕の底部を上甕に、大型甕を下甕とするⅡ式甕棺墓で、下甕の甕の口縁部は打ち欠かれず、上甕で蓋をした状態で検出された。下甕は完形であるが、上甕は胴部から上位を欠く。残存状況が良好であったことを考えると、上甕の上半部は埋葬時に打ちかかれたものと思われる。墓壇は不整楕円形で床面はほぼ平らであるが、中央部でややくぼみ。長径は0.98m、短径は0.67mである。

上甕は胴部の張った甕で、最大径である胴部中央部から上位は残っていない。やや上底の底部で、最大径は胴部中位である。外器面はヘラ磨きで調整されている。

下甕は大型の胴部の丸い甕である。やや上底の底部から胴部下位まで大きく外に開き、そこから最大径の胴部上位までは緩やかに開きながら立ちあがっていく。胴部上位から頸部にかけて内湾し、口縁部はやや反しながらか外へ開く。口唇部は角張り、中央部はややくぼみ。肩部の両器面及び口縁部の内器面はヘラ磨きで、口縁部の外器面はナデ調整が施されている。

(2) その他の遺構

①J区土坑(第23図)

J-8及びJ-9区で検出された。長さ4.9m以上で、幅3.0mを測る隅丸の長方形のプランを呈すると思われる性格不明の整穴の土坑である。Ⅵ層上面で確認され、Ⅳ層とⅤ層の混じった(粘性がありややしまった暗褐色)土が堆積していた。検出面から床面までの深さは5~18cmで北壁が比較的良好に残っている。床はほぼ平地で全体がかなり硬化していた。床面で大小合わせて8基のピットが検出され、このうち2基は径60センチ程度のもので、かなり大きなピットがみつかった。埋土、床面ともに焼土や炭化物は確認されなかった。

出土遺物は礫や小片の弥生時代の土器がほとんどであった(第26図16、第27図39)。そのほか、床面から円盤状土製品(第24図、図版11)がほぼ完形で出土した。円盤状土製品は、直径7.7cm、厚さ最大1.9cmを測り、実測図下部

が少し欠けている。厚みは中心部から外側にかけて徐々に薄くなっていくので、断面形は菱形に近い形状となる。中心部には直径5mmの孔が穿たれる。穿孔方向は実測図右から左方向である。上製品の面には幾何学的な文様が施されている。穿孔後、中心から外側へ向かって、円を6等分するような直線状の2本の凹線と、その区画された間に弧状の凹線が2本引かれている。2本の凹線は互いに平行ではなく、1つの工具で施文されている。直線と弧線の順序は一定ではない。

②G区土坑(第5図)

G-9区で検出された不整楕円形を呈する土坑で、長径1.05m、短径0.77mを測る。Ⅳ層で検出され、その検出面から床までの深さは10cm程度である。埋土はⅣ層よりほんのわずかに暗い暗褐色土で、焼土、炭化物などはない純粋な層であった。

この土坑から、定形の石包丁が1点出土した(第39図13)。また、礫が2点出土した。

③K区土坑(第5図)

K-8区で検出された。直径約1.4mの円形の土坑で、検出面から床までの深さは約10cm、床面はスリパチ状で、最も深いところで20cmを測る。

遺物は、埋土から小片に割れた小型の甕型土器が1点出土した(第26図21)。

2 遺物(第25~30図 図版10、図版12)

土器

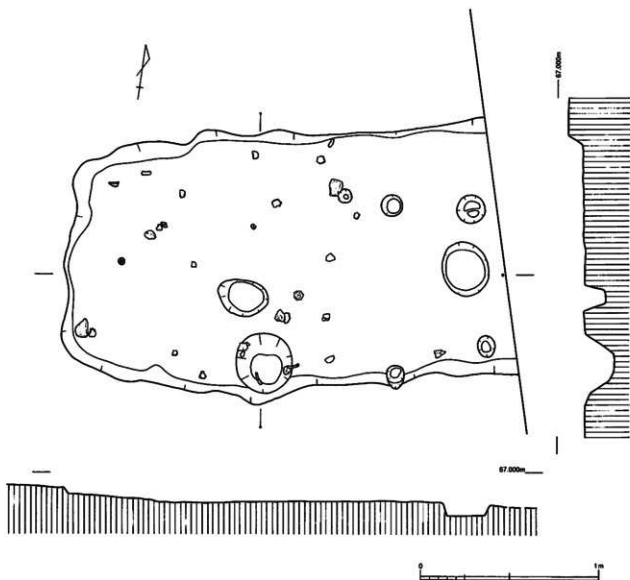
出土した土器は、甕、壺、鉢、高杯、器台でそのうち大半が甕であった。土器の出土量もかなり多かったが、カクランなどの影響を受けていたためか接合する資料は少なく、一単位として図化できるものはごくわずかである。

(1)甕(第25図~27図) 小型と祭祀用甕は別に分けた。

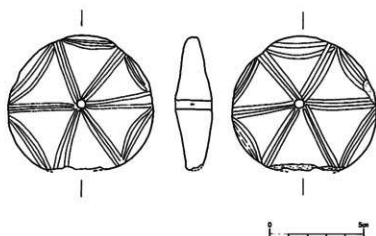
口縁部 口縁部の形態からいくつかのタイプに分類した。

①口縁部が小さく突き出ており、刻目があるもの(15、18)。口縁部下に15は2条、18は1条の刻目突帯がめぐっている。18はその突帯の下に縦方向のハケ調整が施されている。

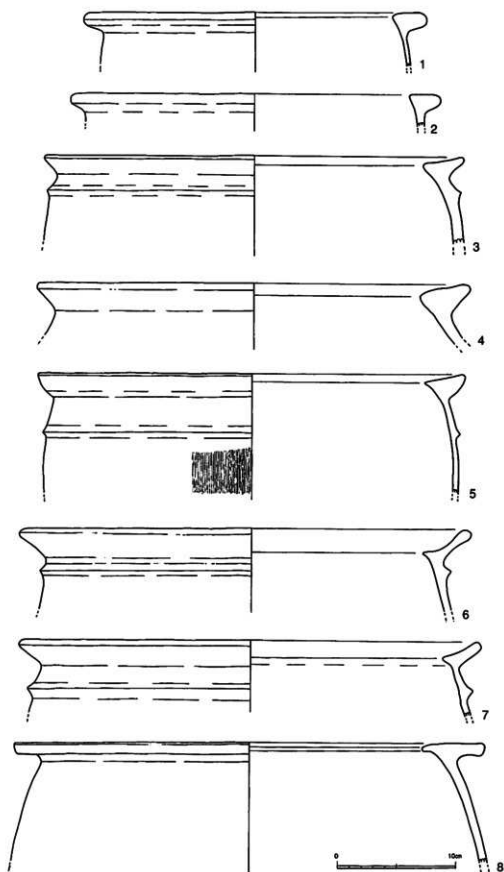
②口縁部が分厚く丸みを持ち、上面が平坦なもの(1、2、10)。10は刻目が口縁部部に施されている。



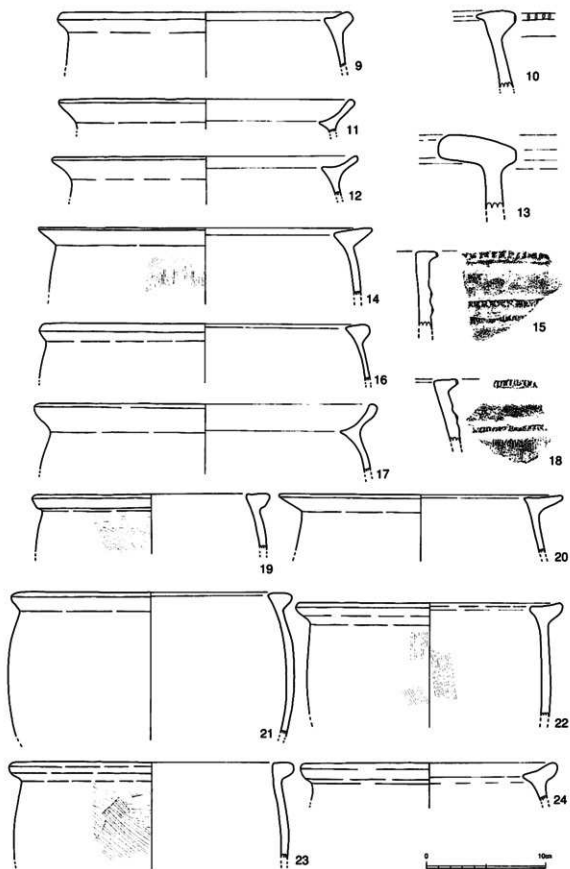
第23図 J区土坑実測図



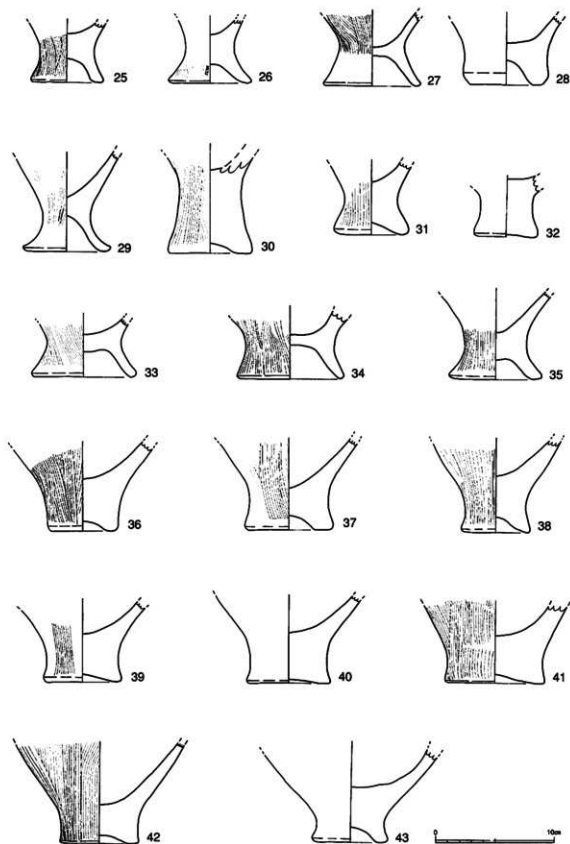
第24図 円盤状土製品実測図



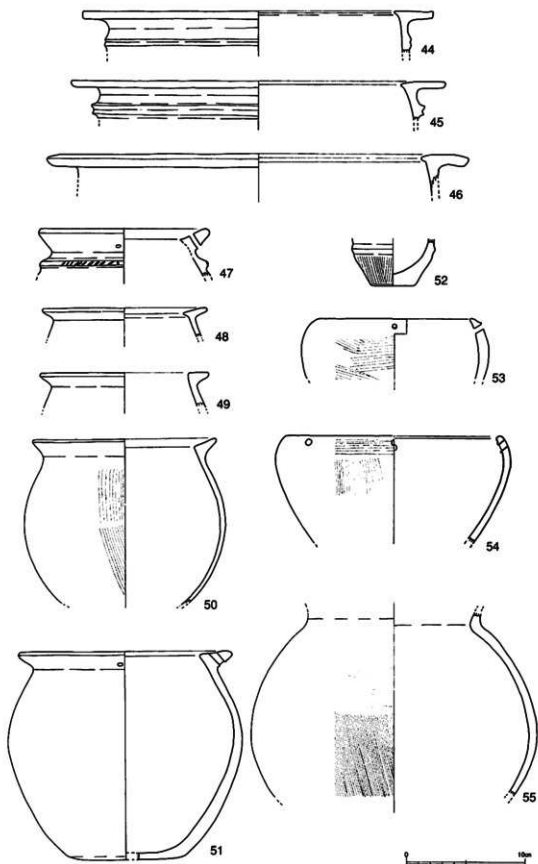
第25図 弥生土器実測図(1)



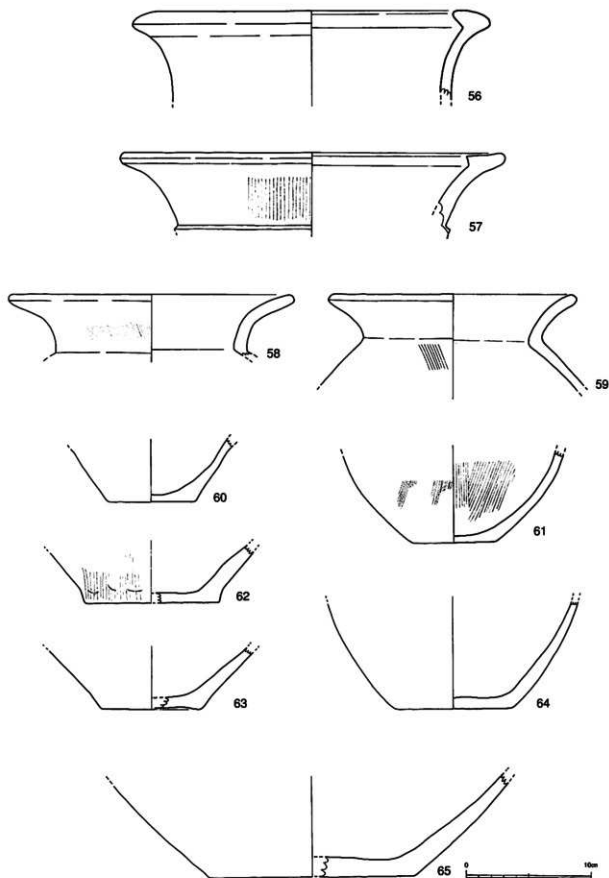
第26图 弥生土器实测图(2)



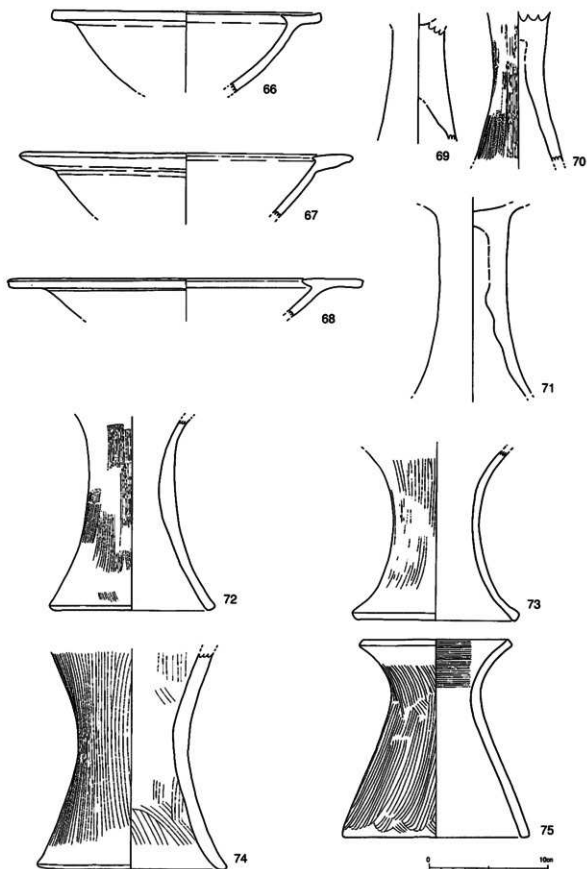
第27图 弥生土器实测图(3)



第28圖 弥生土器実測圖(4)



第29圖 弥生土器実測圖(5)



第30圖 弥生土器実測圖(6)

③口縁端部が分厚く角張り、上面が平坦かややくぼむもの(9, 16, 19, 21, 22, 23)。

④口縁端部が分厚く角張り、外傾するもの(24)。

⑤口縁部が外傾し、端部がやや厚く断面が三角形を呈するもの(3, 4, 5)。3と5は、口縁部下に三角断面の突帯がめぐる。

⑥鋤形口縁で上面が平坦なもの(8)。

⑦鋤形口縁で口縁部が内傾するもの(13)。大型甕棺の口縁部であろう。外器面に赤色顔料が塗布してある。口縁部がやや薄く断面が三角形のもの(14, 20)。外傾するもの(14)と上面が平坦なもの(20)がある。

⑧口縁部がくの字に折れ、上面がくぼむもの(6, 7, 11, 12, 17)。

底部 底部も形態、上底のくぼみ具合などから分類した。

①底部が柱状に細長くのび、やや上底になるもの(30, 31, 32, 36, 38)。

②底部が柱状で、上底になるもの(28)。

③底部が平坦で、上底にならない(39, 40, 41, 42)。

④底部が細く、裾が広がり、上底になるもの(25, 26, 29, 35)。

⑤底部が平坦で、裾がやや広がり、やや上底になるもの(37, 43)。

⑥底部が平坦で、裾が広がり、上底のもの(27, 33, 34)。

(2) 祭祀用甕(第28図44～46)

広口で鋤形口縁。44と45には口縁部下に断面形がM字状の突帯がめぐる。外器面全体と内器面の一部に赤色顔料が塗布してある。

(3) 小型甕(第28図47～51)

口縁部の断面が三角形を呈し内傾する。48は鋤形口縁でやや内傾する。47は口縁部に穿孔されており、頸部下に断面が台形を呈する刻目突帯を巡らしている。51はほぼ定形の小型甕で、これも口縁に穿孔が施されており、ほぼ胴部中位で最大径となり、平底の底部へ続く。

(4) 壺(第28～29図55～65)

口縁部

①丸みを帯びた二重口縁で口縁端部が内傾するもの(57)。

②鋤形口縁で、口縁端部上面が平坦のもの(58)。

③頸部からそのまま外湾しながら口縁部に至るもの

(59, 60)がある。

胴部 51は小型の壺の下半部と思われる。平底で胴部最大径の部分に断面径が三角形の低い突帯がめぐる。55は胴の張った丸みを帯びた壺である。ほぼ胴部中位で最大径になると思われる。胴部下半は斜め方向のハケ調整で、上半部は横方向のハケ調整を施している。

底部 すべてほぼ平底を呈する。底部から胴部にかけて外湾するもの(60, 62, 63, 65)と内湾するもの(61, 64)がある。61は55のような球胴形の胴部につながるものと思われる。

(5) 鉢(第28図53～54)

口縁部は内湾し、口唇部下に穿孔を施している。穿孔方向は、53は内側から外側へ、54は外側から内側へ穿っている。孔の数は、53については残存状況により不明であり、54については少なくとも5つ以上あると思われる。

(6) 高坏(第30図66～71)

坏部の口縁部はいわゆる鋤形口縁で、内側にやや張り出す。66は口縁部上面がややくぼんでいる。脚部は上半から中位にかけて若干内湾し、中位から裾部にかけて緩やかに外へ開く。

(7) 器台(第30図72～75)

最小径部が中位のあるものと(72, 75)、上半部にあるものの(73, 74)2つのタイプがある。73はやや細身で、外器面を目の細かいハケで調整されている。その他のハケ目はやや目が粗い。

第3節 石器

石器については、縄文と弥生の時代の判別が難しいものもあるため別にした。計測値等については、第6表を参照していただきたい。

(1) 石匙(第31図1～5 図版12)

横長のもの(1～4)と縦長のもの(5)がある。ただし、2と5については石材が緑色片岩で、従来言われている石匙といっているのか疑問が残る。その他は安山岩製である。

(2) 打製石磨丁(第31図6, 7 図版12)

いずれも緑色片岩製で、横断面に挟りが入る。6は半分欠損しているが、湾曲する刃部を持つものと考えられる。

第2表 弥生土器 観察一覧表

図号	図名	器種	部位	出土地点	土層等	1目尺	色調	Hue	備考
1	変	11 鉢 部	V-4	IV層上層	24.2	褐色		Hue2.SYR6/8	
2	変	11 鉢 部	L-8	IV層上層	36.0	褐色		Hue2.SYR6/8	タテハケ
3	変	11 鉢 部	遺物No.	1499	35.0	黒褐色		Hue10YR3/2	
4	変	11 鉢 部	N-6	IV層上層	35.0	にぶい黄褐色		Hue2.SYR7/3	タテハケ
5	変	11 鉢 部	L-8	IV層上層	36.0	褐色		Hue2.SYR6/6	
6	変	11 鉢 部	N-6	IV層上層	36.0	浅黄色		Hue10YR8/3	
7	変	11 鉢 部	U-4	P-24	38.0	褐色		Hue2.SYR7/6	
8	変	11 鉢 部	R-5 上坑	P-2	33.0	褐色		Hue2.SYR6/8	
9	変	11 鉢 部	S区	IV層上層	34.0	灰黄色		Hue10YR6/2	
10	変	11 鉢 部	L-8	IV層上層	—	にぶい黄褐色		Hue2.SYR7/2	
11	変	11 鉢 部	N-6	IV層上層	24.0	にぶい褐色		Hue2.SYR7/4	スズ付着
12	変	11 鉢 部	2分住居跡	P-5	25.4	灰黄色		Hue10YR6/2	
13	変	11 鉢 部	遺物No.	1499	—	褐色		Hue5YR7/6	赤色顔料塗布
14	変	11 鉢 部	K-7	IV層上層	21.6	赤褐色		Hue2.SYR4/8	ハケ ベンガラ塗布
15	変	11 鉢 部	H-9	IV層上層	—	にぶい黄褐色		Hue10YR6/4	斜めハケ
16	変	11 鉢 部	J区不明土坑	P-24	15.0	にぶい褐色		Hue2.SYR5/3	斜めハケ
17	変	11 鉢 部	O-6	IV層上層	27.6	にぶい黄褐色		Hue10YR7/2	スズ付着
18	変	11 鉢 部	H-9	IV層上層	—	黒褐色		Hue10YR3/1	斜めハケ
19	変	11 鉢 部	L区	IV層上層	16.0	灰黄色		Hue10YR6/2	
20	変	11 鉢 部	K-8	I-31	23.0	褐色		Hue2.SYR2/1	
21	変	上 手	K-8	大土坑	10.6	にぶい褐色		Hue2.SYR6/4	
22	変	11 鉢 部	N-7	IV層上層	22.0	にぶい黄褐色		Hue10YR7/3	タテハケ
23	変	11 鉢 部	3分住居跡	P-62.83	20.4	にぶい褐色		Hue5YR6/3	ハケ
24	変	11 鉢 部	2分住居跡	P-44	21.0	浅灰褐色		Hue2.SYR6/4	
25	変	脚 台	S区	IV層上層	4.6	にぶい黄褐色		Hue10YR6/3	タテハケ
26	変	脚 台	遺物No.	1508	6.8	にぶい黄褐色		Hue10YR6/2	
27	変	脚 台	K-6	墓跡	7.2	褐色		Hue5YR7/6	タテハケ
28	変	脚 台	J-9	墓跡直上	4.2	にぶい褐色		Hue2.SYR7/3	
29	変	脚 台	K-8	I-32	5.8	褐色		Hue5YR7/6	うすいタテハケ
30	変	脚 台	L区	IV層上層	6.8	にぶい黄褐色		Hue10YR6/4	
31	変	脚 台	K-7	IV層上層	5.4	灰白色		Hue2.SYR6/2	タテハケ
32	変	脚 台	N-7	墓跡	5.0	褐色		Hue5YR7/6	タテハケ
33	変	脚 台	Q-5	IV層上層	8.0	にぶい褐色		Hue2.SYR6/4	
34	変	脚 台	N-6	IV層上層	8.2	浅灰褐色		Hue2.SYR6/3	タテハケ
35	変	脚 台	L-8	IV層上層	6.2	褐色		Hue2.SYR7/6	タテハケ
36	変	脚 台	T-5	IV層上層	5.0	にぶい黄褐色		Hue10YR7/3	タテハケ
37	変	脚 台	H-9	IV層上層	7.0	にぶい黄褐色		Hue2.SYR7/4	
38	変	脚 台	R-5	墓跡直上	5.9	にぶい黄褐色		Hue2.SYR7/4	
39	変	脚 台	J区不明土坑	P-14	5.4	にぶい褐色		Hue2.SYR7/4	タテハケ
40	変	脚 台	T-4	I-4	6.6	浅灰褐色		Hue2.SYR6/4	うすいタテハケ
41	変	脚 台	H-9	IV層上層	8.4	褐色		Hue5YR6/6	タテハケ
42	変	脚 台	H-9	IV層上層	6.4	褐色		Hue2.SYR6/6	タテハケ
43	変	脚 台	N-7	IV層上層	5.8	浅灰褐色		Hue2.SYR6/4	
44	変	11 鉢 部	K-8	I-27	22.4	にぶい黄褐色		Hue10YR7/3	ベンガラ塗布
45	変	11 鉢 部	N-6	IV層上層	25.2	赤褐色		Hue2.SYR4/8	ベンガラ塗布
46	変	11 鉢 部	N-6	IV層上層	28.2	赤褐色		Hue5YR4/8	ベンガラ塗布
47	変	上 手	遺物No.	1254	13.4	にぶい黄褐色		Hue10YR7/3	穿孔 斜めハケ
48	変	11 鉢 部	V-4	IV層上層	13.0	にぶい黄褐色		Hue2.SYR6/3	ベンガラ塗布
49	変	11 鉢 部	V-4	IV層上層	10.8	赤褐色		Hue2.SYR4/6	ベンガラ塗布
50	変	法定定形	N-6	IV層上層	15.0	にぶい黄褐色		Hue10YR7/4	ハケ
51	変	法定定形	H-9	IV層上層	16.0	褐色		Hue2.SYR7/6	
52	変	F 手	F-9	IV層上層	—	褐色		Hue2.SYR7/6	タテハケ
53	変	井 上 手	N-6	IV層上層	12.6	にぶい褐色		Hue2.SYR6/3	穿孔 ナデ ハケ
54	変	井 上 手	N-7	IV層上層	17.2	にぶい褐色		Hue2.SYR6/4	穿孔 ハケ
55	変	脚 台	遺物No.	1625	—	浅灰褐色		Hue10YR6/3	ヨコハケ 斜めハケ
56	変	11 鉢 部	N-7	IV層上層	20.6	にぶい黄褐色		Hue10YR7/4	
57	変	11 鉢 部	L-8	IV層上層	29.4	にぶい黄褐色		Hue10YR6/4	タテハケ
58	変	11 鉢 部	O-6	IV層上層	22.0	にぶい黄褐色		Hue10YR7/4	斜めハケ
59	変	上 手	N-7	IV層上層	19.0	灰黄色		Hue10YR5/1	
60	変	底 部	遺物No.	1251	—	灰黄色		Hue10YR5/2	
61	変	底 部	F 手	遺物No.	1623	—	にぶい褐色	Hue2.SYR7/4	タテハケ
62	変	底 部	Q-6	IV層上層	10.6	にぶい黄褐色		Hue10YR7/3	
63	変	底 部	L-7	IV層上層	7.8	にぶい褐色		Hue2.SYR7/4	ベンガラ塗布
64	変	底 部	F 手	H-9	IV層上層	9.2	にぶい黄褐色	Hue10YR7/3	
65	変?	底 部	K-8	I-51	16.0	赤褐色		Hue5YR4/6	
66	変	底 部	H-9	IV層上層	16.0	明褐色		Hue5YR5/6	
67	変	底 部	K-8	カララ層跡	24.0	褐色		Hue2.SYR6/6	一部ベンガラ
68	変	底 部	U-4	IV層上層	9.3	赤褐色		Hue2.SYR4/6	ベンガラ塗布
69	変	脚 台	O-6	IV層上層	—	にぶい褐色		Hue2.SYR7/4	一部ベンガラ
70	変	脚 台	N-6	IV層上層	—	赤褐色		Hue2.SYR4/6	ベンガラ塗布
71	変	脚 台	遺物No.	1621	—	褐色		Hue5YR6/8	
72	変	法定定形	K-8	I-9	14.2	にぶい黄褐色		Hue10YR7/4	11鉢部を欠く
73	変	法定定形	N-6	IV層上層	—	浅黄色		Hue10YR6/3	タテハケ
74	変	法定定形	H-9	IV層上層	14.4	褐色		Hue2.SYR7/6	
75	変	法定定形	N-6	IV層上層	12.0	明褐色		Hue2.SYR7/2	全面ハケ

(3) 石鐮(第31図8、9 図版12)

緑色片岩製の石鐮で、8は先端部を、9は基部を欠く。刃部はほぼ直線で、基部には両辺に浅い袈刈をいれている。袈刈と刃部との角度は、8が鈍角に、9がほぼ直角になる。

(4) 打製石斧(第32～34図1～15 図版13)

上部先端が尖っており、刃部のラインが直線的なもの(1～3)。

上部先端が尖っており、刃部のラインが湾曲するもの(4～7)。

上部先端がすぼまり、刃部のラインが湾曲するもの(8～11)。

平面形がほぼ長方形で刃部が直線的なもの(12～14)。

平面形が楕円形のもの(15)。

(5) 十字形石器(第35図1～2 図版13)

1は、実際は十字形でないが、この系統のものだと判断し組み込んだ。突出部が3ヵ所あり、その先端は磨耗し角が丸くなっている。また、両表面とも剥離以外の面が磨減して光沢を持つ。2はピンク色を呈した凝灰岩製の十字形石器である。

(6) 円盤形石器(第35～36図3～9 図版13)

ほとんどが緑色片岩製であるが、4のみ安山岩製である。大きさは径8cm～10cmの範囲に収まる。

ほぼ一周に調整痕を持つもの(4、6、9)

一部調整されていない辺があるもの(3、5、7、8)とがある。

(7) 凹石(第37図1～4 図版13)

円形または楕円形の礫を転用して利用したものと思われる。両面がくぼんでいるもの(1、3)と片面のみくぼむもの(2、4)がある。2はくぼみが浅く、片面は磨石として利用されている。さらに、持ちやすいように、指があたり部分を打ち欠いている。

(8) 磨石(第37図5～8 図版13)

いずれもどちらかの面が磨り減って平坦になっており、長期間使用されたことがわかる。5は両側面を磨石としても利用している。

(9) 磨製石斧(第38～39図1～11 図版14)

1は小型の片刃の石斧で先端部を欠いている。2は刃先の部分で、刃部のラインと垂直方向の使用痕が明確に残っている。石材は粘板岩である。3は扁平片刃石斧の

類のものか、両面とも研磨され、刃の上端以外は刃を持ち、使用痕が残る。4は見事に整形された完形の小型磨製石斧である。側面の一部に装着痕が見られる。5も完形の磨製石斧である。6は扁平な磨製石斧で、表面が全体の8割程度剥離または、欠損している。刃部に使用痕がはっきりと残っている。7は今山産の太型片刃石斧の刃部と思われる。8～10は扁平片刃石斧で、9以外は欠損品である。完形である9は平面形がほぼ台形で、厚さは6mm程度と他のものに比べ薄い。刃部に使用痕を残し、前主面右側の磨減は、長期間の使用を物語っている。11はほぼ完形の小型柱状片刃石斧である。横四角はすべて凹レンズ状に若干膨らむ。特に後主面は舟底を呈する。

(10) 石砲丁(第39図12～13 図版14)

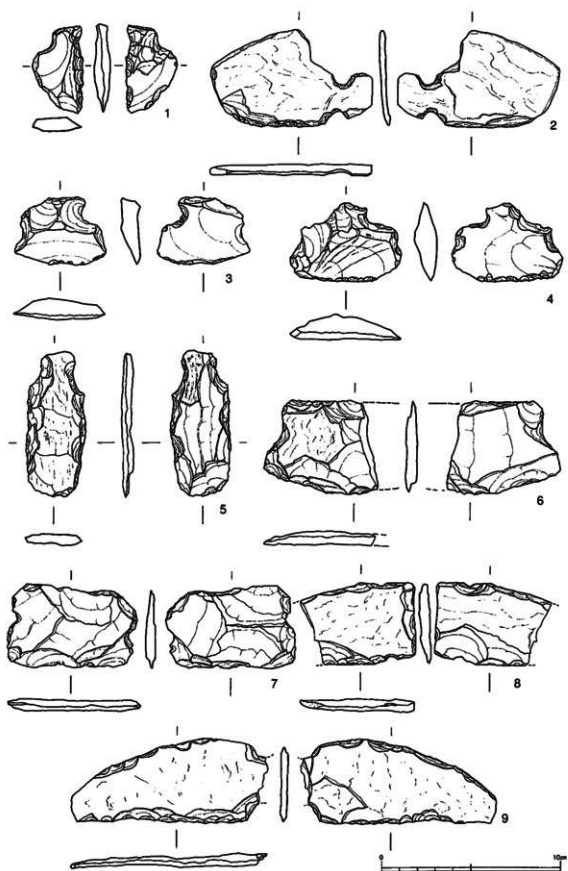
12、13は磨製の石砲丁である。12は4割近くを欠く。幅は5.1cm、厚さ0.55cm。長さを復元すると20cmとなり、かなり大型のものになる。石材は暗赤灰色を呈する砂岩である。13の石砲丁は完形品で、長さは19.2cm、幅5.5cm、厚さ0.45cmを測る。こちらも大型と考えられるが、厚みがなく実用品として利用した場合、その耐久性に疑問が残る。石材は風化の度合いが激しく判別しづらいが、砂岩と思われる。2つの孔は背部に対し、斜めに穿孔されており、その間隔は1.95cmである。両面とも刃部以外はあまり研磨されておらず、部分的に敲打痕が残る。

(11) 磨製石斧未製品(第40図1 図版14)

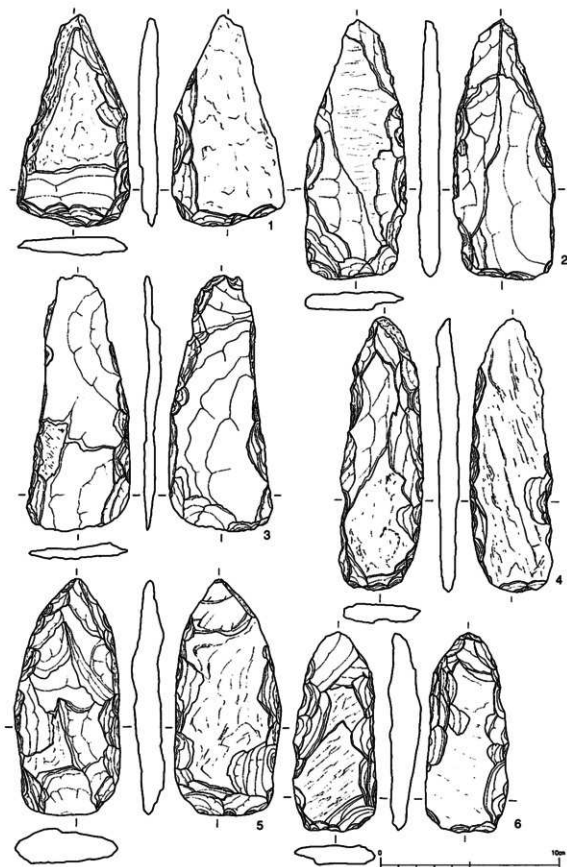
敲打調整が終わり、研磨段階に入った直後の段階のものと思われる磨製石斧未製品である。全面に敲打痕があり、刃部のごく一部に研磨面が確認される(実測図左図の右下部)。長さは12.5cm、幅は広いところで5.8cmを測る。

(12) 敲打具(第40図2～7 図版14)

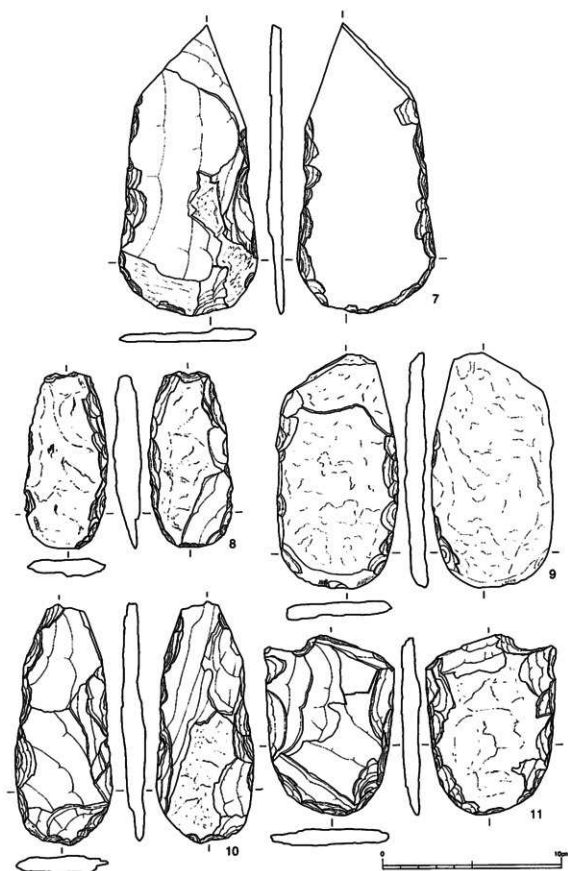
2～6は敲打具として掲載した。石材は、2が緑色片岩で、3が硬質の頁岩(?)、4～7は安山岩である。いずれも手によくなじむ太さ、長さのもので、特に5については故意に側面の2ヵ所を打ち欠いた箇所がある。手にもつと親指と中指がうまくあたる。後に触れるが、当遺跡では上記の磨製石斧未製品のほかに、128点の磨製石斧未製品が出土している。2～6の石器は、これら磨製石斧の製作段階(調整段階)で使用された敲打具ではないかと思われる。



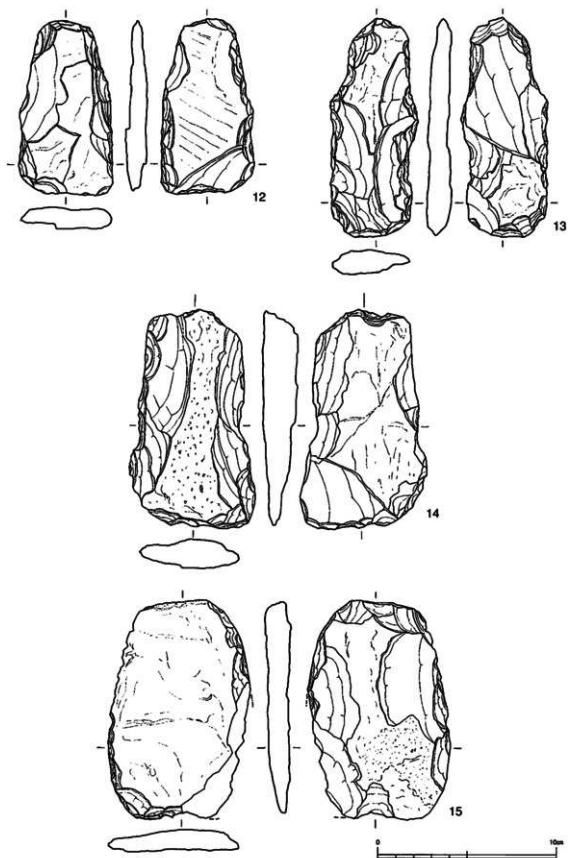
第31圖 石匙、打製石庖丁、石錐實測圖



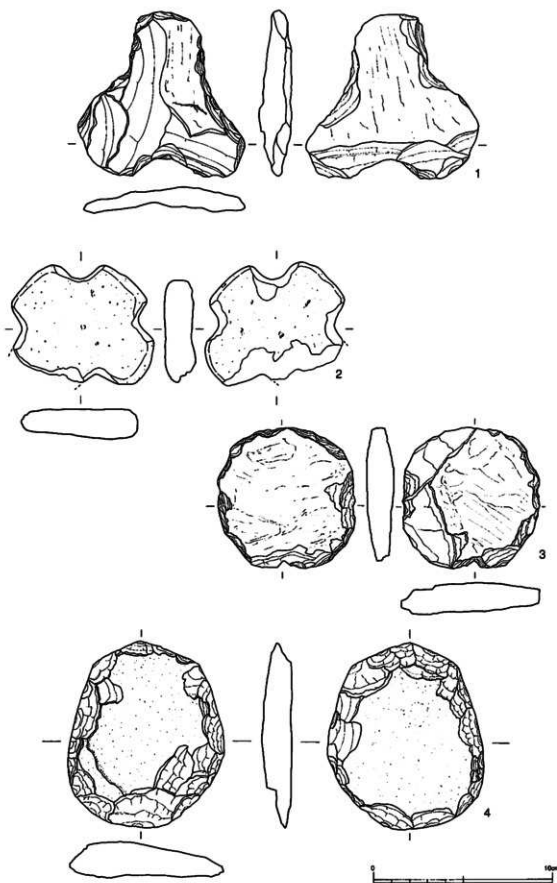
第32图 打製石斧実測図(1)



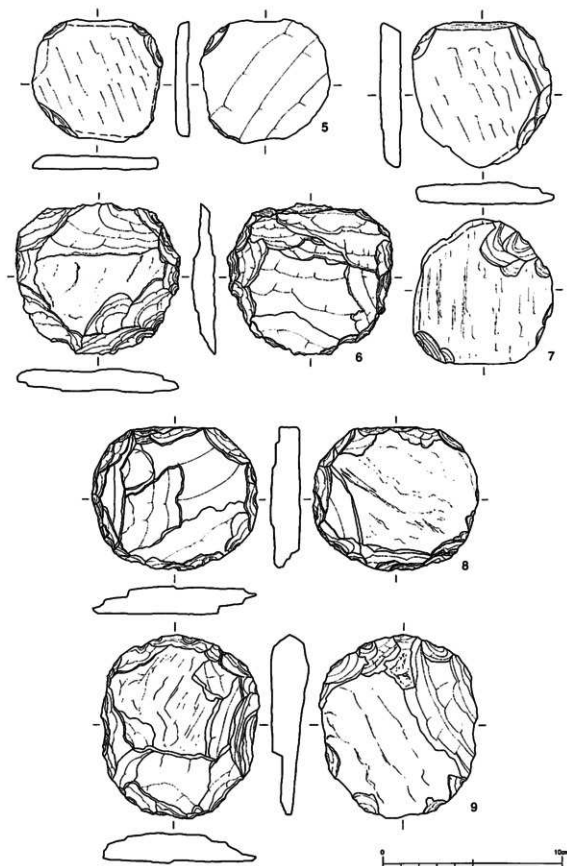
第33图 打製石斧实测图(2)



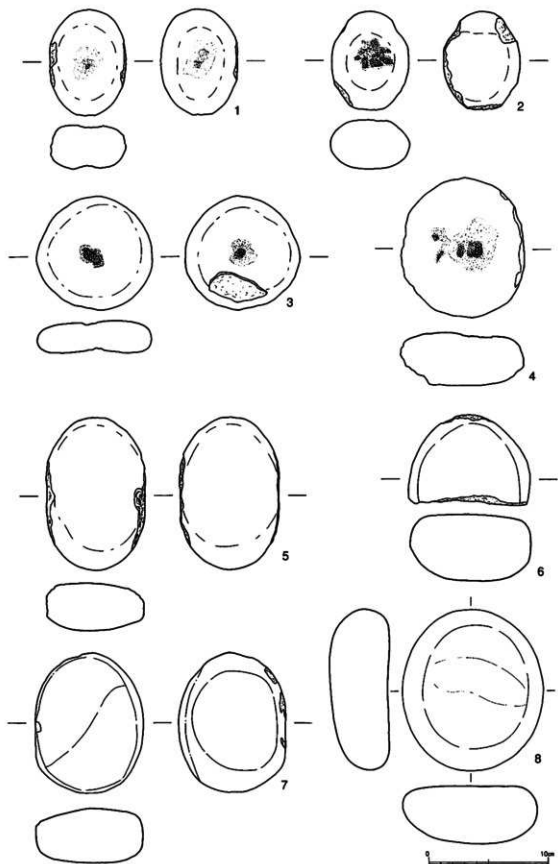
第34図 打製石斧実測図(3)



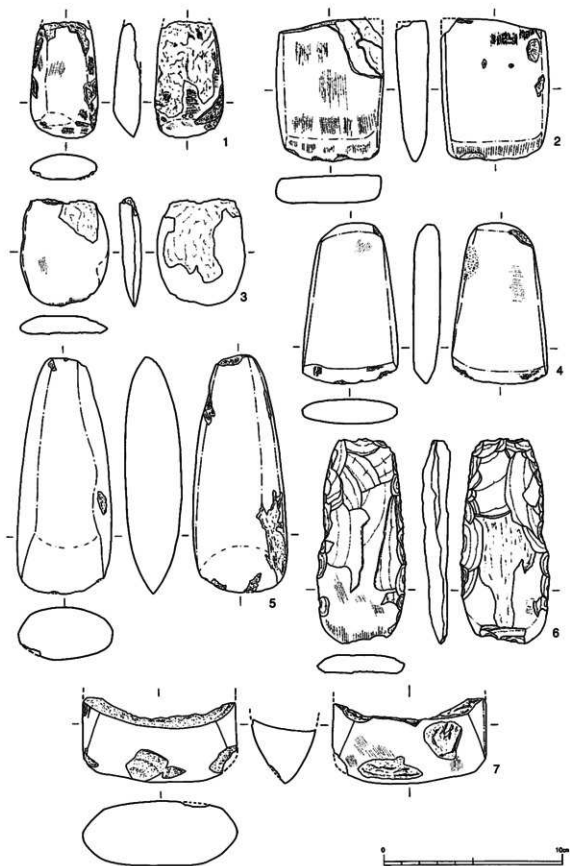
第35圖 十字形石器、円盤状石器実測図



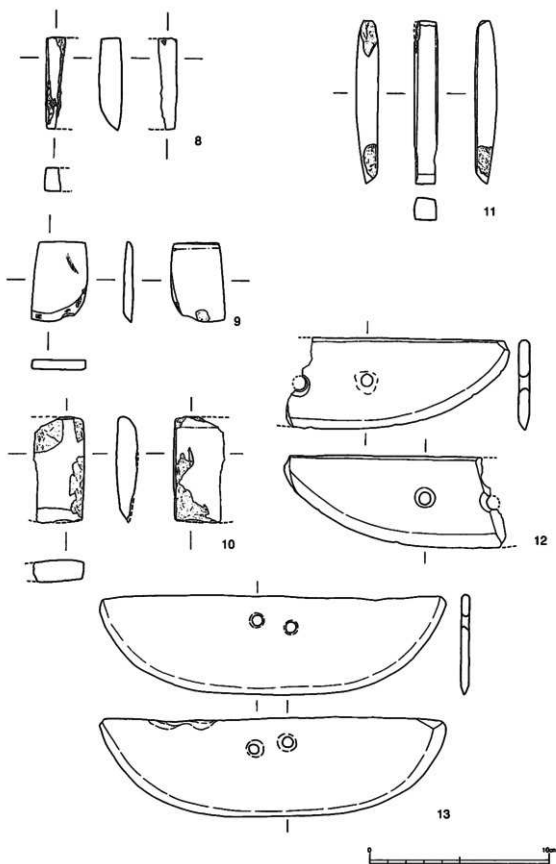
第36図 円盤状石器実測図



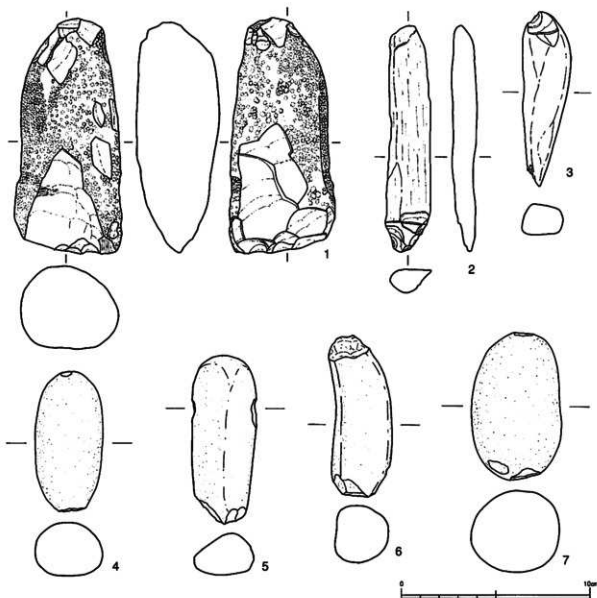
第37图 凹石、磨石实测图



第38図 磨製石斧実測図



第39圖 柱狀片刃石斧、扁平片刃石斧、石砲丁実測圖



第40図 磨製石斧未製品、棒状石器実測図

(13) 打製石鏃(第41図1～12 図版15)

打製石鏃は調査区全体で計63点出土した。地区別で見ると、N-7区が6点と最も多く、K-8区が5点と続く。また、O区とP区合わせたところから計6点出土しており、N区からP区が出土量のピークとされる。ページの都合上、代表的な形のものを図化し、タイプ別ごとの出土量を記載する。図化したものの石材、計測値等は表3のとおりである。

①二等辺三角形を呈し、平基式の石鏃(1、2、9)。12点

出土した。

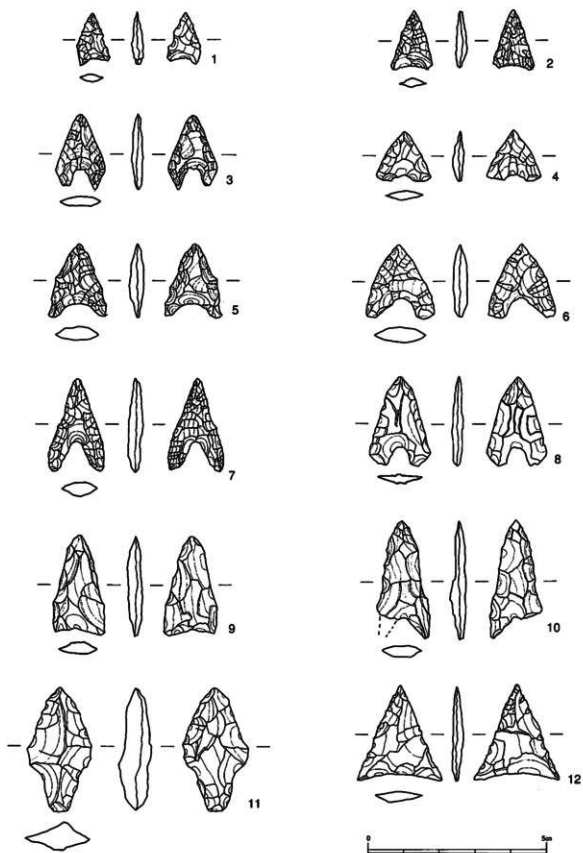
②二等辺三角形を呈し凹基式の石鏃で基部の先端が尖っているもの(3)。2点出土した。

③ほぼ正三角形でわずかに凹基式の石鏃(4)。5点出土した。

④二等辺三角形でわずかに凹基式の石鏃(5)。19点出土した。

⑤ほぼ正三角形で凹基式の石鏃(6)。6点出土した。

⑥二等辺三角形を呈し凹基式でかつ長脚の石鏃(7)。6



第41图 打製石鏃実測図

点出土した。

- ⑦二等辺三角形で凹基式の石鏃(8、10)。9点出土した。
- ⑧有基式の石鏃(11)。1点のみの出土である。
- ⑨正三角形で平基式の石鏃(12)。1点出土した。
- ⑩これ以外の形態のものが2点ある。

(14) 磨製石鏃(第42図 図版15)

磨製石鏃は欠損品を含めて24点出土した。石材はすべて緑色片岩である。形態から3つのタイプに分類した。なお、1と2については、切先部のみであるため、分類の対象から外している。

- 1 平面形が正三角形に近いもの(3～11)。
- 2 二等辺三角形を呈するもの(12～19)。
- 3 柳葉形を呈するもの(20～24)。

(15) 磨製石鏃未製品(第43図～第45図 図版15～16)

今回の調査で明らかとなった当遺跡の特徴の一つとして、磨製石鏃未製品の多量な出土が挙げられる。わずか450㎡の面積で計128点の未製品が出土し、荒削、調整、研磨という、各段階の未製品が確認された。石材はすべて緑色片岩である。

製作過程を検出できなかったのが残念であるが、地区ごとの出土量を見てみると、N-7区が17点と最も多く、次いでO-7区が11点、U-4区が10点となっている。概観すると、N区とO区に出土量のピークがあり、やや離れたQ区とU区にも集中して出土した地区がある。

平面形の特徴から大きく三つにタイプに分類し、さらに細かい分類も試みた。なお、計測値等については表5を参照いただきたい。

- A 平面形が正三角形に近いもの(1～33)。
- B 二等辺三角形を呈するもの(34～101)。これを、両縁が広がるもの(24～67)①と広がらないもの(68～101)②に細分する。
- C 柳葉形を呈するもの(102～128)。

(16) 砥石(第46図～第47図 図版16)

砥石は割れたものや表面が一部剥離したものなどを含めると、計23点出土した。そのうち14点を掲載した。石材は砂岩のほか、文晶花崗岩がほとんどである。このなかで、砥ぎ面に1～4条の溝を有するものもある(6、8)。12は石の粒子がやや粗く、粗砥ぎまたは中砥ぎ用として利用されたものと考えられる。そのほかは目が細かく、仕上げに使われたものと考えられる。

(17) 石鏃(第48図 図版16)

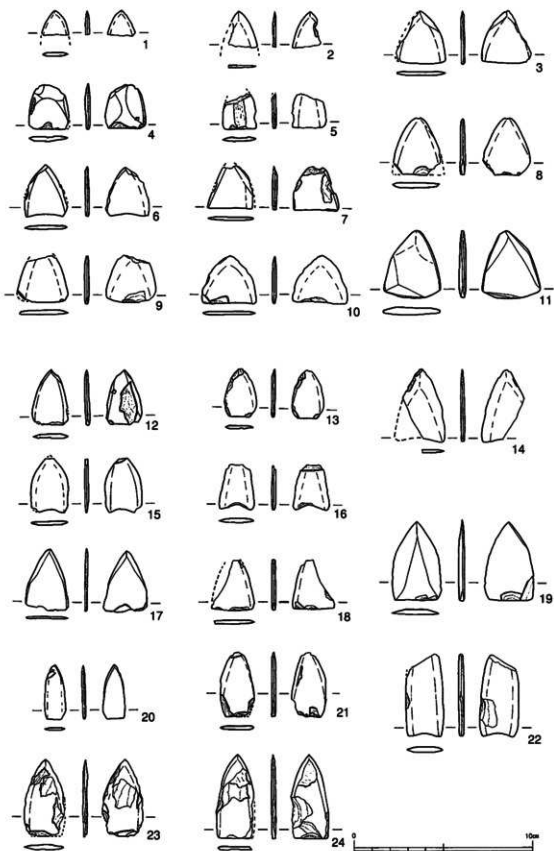
計13点出土し、9点を掲載した。9の有溝石鏃以外はすべて上下両端を打ち欠いたものである。重さは約20g～103gの範囲内で、20g台のものが主体をなす。

(18) 磨製石剣(第49図 図版16)

1～3は磨製石剣の破片である。1は刃部で、幅が見られる。幅は4.0cmで、厚さは0.8cmと推定される。断面形は菱形を呈する。2は、石剣の基部である。小豆色を呈した砂岩質からなる。基部には1つ直径5mmの穿孔が施されている。一边は刃部と思われる先が薄くなっているが、もう一边は若干伏れた部分があり、刃部は形成されていない。3は大型の石剣基部であり、幅は最大7.5cm、厚さは2.4cmを測る。緑色の粘板岩製で、全面に研磨痕が明瞭に見える。基部上部には挟りがある。かなり巨大な石剣になると思われる。

(19) 玉類(第50図)

調査区からは玉類が3点出土した。1は破損した管玉である。緑色を呈した硬い石である。直径は推定8mmで、両方向から穿孔されたことが分かる。2は軟質の石でできた玉である。尖潤な面が平らになっている。平面形はいびつな円形で、直径は最大1.3cmである。3は勾玉である。石は軟質で、色調は緑がかった灰色を呈する。長さは2.2cm、幅は1.5cm、厚さは5mmを測る。孔は両側から穿っており、直径は4.5mmである。



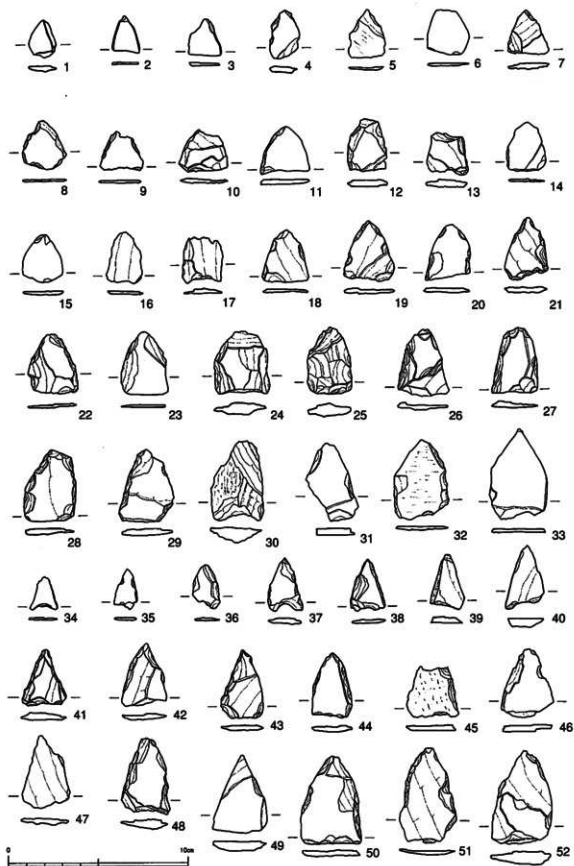
第42図 磨製石鏃実測図

第3表 打製石礫 計測一覧表

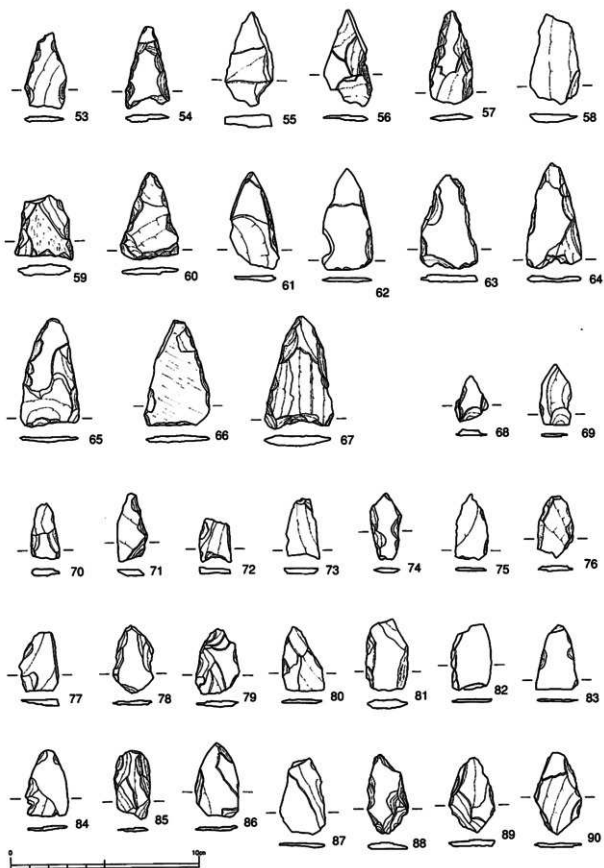
No	出土地点	土層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	その他
1	1号住居跡	一括	1.5	1.0	0.2	0.3	黒曜石	
2	N-7	一括	1.7	1.2	0.3	0.5	黒曜石	
3	N-7	一括	2.1	1.5	0.3	0.5	黒曜石	
4	O-6	一括	1.4	1.5	0.3	0.4	安山岩	
5	M-7	一括	2.0	1.6	0.4	1.0	黒曜石	
6	U-6	一括	2.0	1.9	0.2	1.1	黒曜石	砥石?
7	N-7	IV層上層	2.5	1.5	0.4	1.0	黒曜石	
8	1号住居跡	床下	2.5	1.7	0.2	1.1	安山岩	
9	Q-6	IV層上層	2.8	1.3	0.4	1.4	安山岩	
10	1号住居跡	埋土	3.3	1.4	0.5	1.5	安山岩	
11	3号住居跡	埋土	3.4	1.8	0.9	3.7	玄武岩	有茎
12	N-7	IV層上層	2.7	2.4	0.2	1.2	安山岩	

第4表 磨製石礫 完成品 計測一覧表

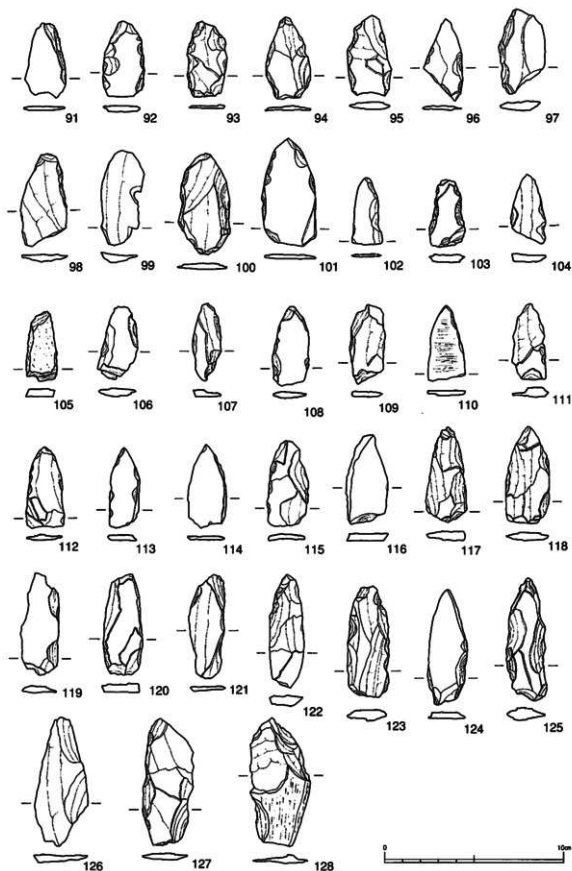
No	出土地点	土層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	その他
1	R-5	IV層上層	—	—	0.2	0.4	緑色片岩	切先部のみ
2	R-5	IV層上層	—	—	0.15	0.5	緑色片岩	切先部のみ
3	L-8	IV層	2.4	2.8	0.2	2.2	緑色片岩	
4	T-5	IV層	2.4	2.1	0.2	2.3	緑色片岩	
5	P-6	IV層上層	2.5	1.9	0.2	1.4	緑色片岩	切先部を欠く
6	H-9	IV層上層	2.8	2.5	0.2	2.2	緑色片岩	遺物Na 6 7 2
7	1号住居跡	一括	2.6	2.6	0.2	2.1	緑色片岩	
8	表探	—	3.1	3.5	0.3	3.5	緑色片岩	基部両端を欠く
9	I-9	IV層上層	3.0	2.9	0.25	2.8	緑色片岩	切先部を欠く
10	2号住居跡	一括	2.6	3.1	0.2	2.5	緑色片岩	
11	L区	III層	3.7	3.2	0.5	8.4	緑色片岩	
12	Q-5	IV層上層	3.1	2.0	0.2	1.9	緑色片岩	
13	I-9	IV層	2.6	1.8	0.2	1.7	緑色片岩	
14	K-7	IV層上層	4.0	3.0	0.2	2.8	緑色片岩	
15	K-8	III層直上	3.0	2.0	0.2	2.2	緑色片岩	
16	表探	—	3.0	2.0	0.2	1.7	緑色片岩	切先部を欠く
17	H-9	IV層上層	3.4	2.4	0.15	2.0	緑色片岩	遺物Na 6 7 5
18	2号住居跡	一括	—	—	0.2	2.1	緑色片岩	
19	O-6	IV層上層	4.3	2.8	0.3	6.2	緑色片岩	
20	M-7	IV層上層	3.0	1.2	0.15	1.0	緑色片岩	
21	U-4	IV層	3.5	2.0	0.2	2.8	緑色片岩	
22	R-5	IV層上層	—	2.0	0.3	5.9	緑色片岩	切先部を欠く
23	U-4	IV層	4.3	2.3	0.25	3.2	緑色片岩	
24	V-4	IV層	4.7	2.2	0.2	3.5	緑色片岩	



第43圖 磨製石鏃未製品実測図(1)



第44図 磨製石鏃未製品実測図(2)

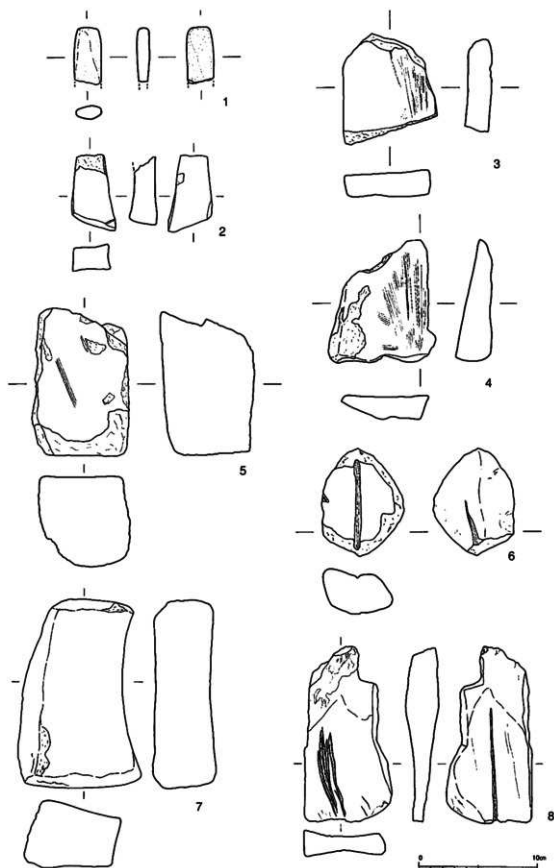


第45図 磨製石鏃未製品実測図(3)

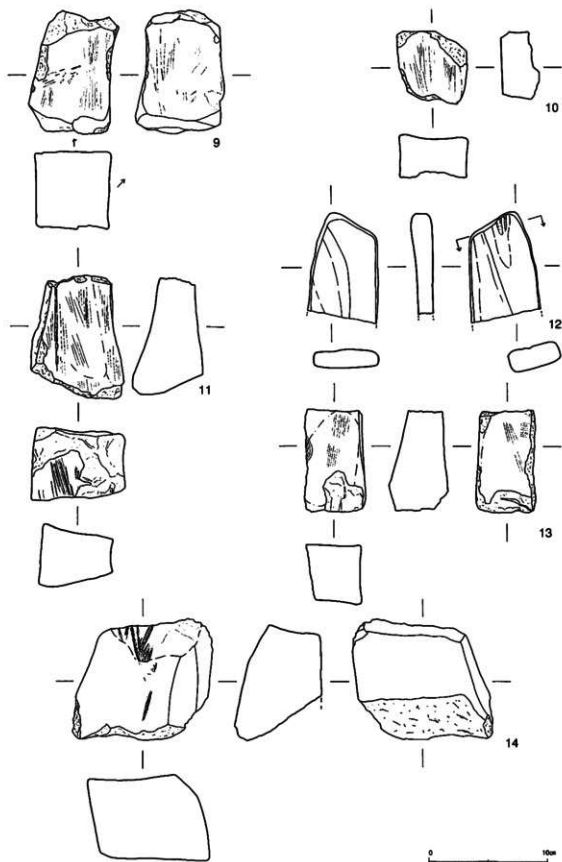
第5表 磨製石鏡 未製品 計測値等一覧表

(単位:長さ、mm;厚さ、mm;重量、g)

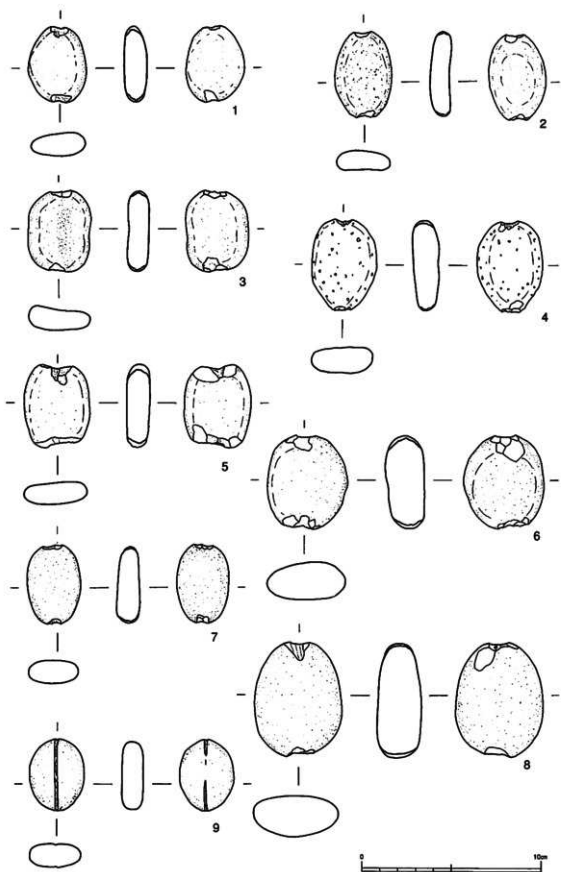
No.	長さ	幅	タイプ	片さ	重量	片ノ幅	内径	出土地区	その他	No.	長さ	幅	タイプ	片さ	重量	片ノ幅	内径	出土地区	その他
1	2.0	1.5	A	0.30	1.2	1.3	調整	〇-7		66	5.5	2.7	B-①	0.30	10.7	2	調整	N-6	
2	1.9	1.5	A	0.10	0.5	1.3	調整	N-7		67	5.5	3.5	B-①	0.50	15.7	1.6	調整	N1507	
3	2.0	1.8	A	0.15	1.0	1.1	調整	〇-7		68	2.2	1.8	B-②	0.30	1.5	1.2	調整	I-8	
4	2.7	1.5	A	0.20	2.0	1.8	調整	〇-7		69	3.2	1.5	B-②	0.30	2.2	2.1	調整	〇-6	
5	2.7	2.0	A	0.17	2.0	1.4	調整	3号住		70	2.8	1.5	B-②	0.40	1.8	1.9	調整	I-8	
6	2.4	2.2	A	0.10	2.0	1.1	調整	L-7		71	3.4	1.6	B-②	0.10	2.2	2.1	調整	I-8	
7	2.4	2.3	A	0.30	2.2	1.9	調整	Q・R区		72	1.8	1.6	B-②	0.30	2.2	1.1	調整	〇-6	切先欠損
8	2.6	2.5	A	0.10	1.5	1.9	調整	L区		73	3.0	1.7	B-②	0.28	2.5	1.8	調整	〇-6	
9	2.1	2.4	A	0.20	1.2	0.9	調整	〇・P区		74	3.5	1.6	B-②	0.20	1.7	2.2	調整	不明	
10	2.3	2.7	A	0.20	1.2	0.9	調整	〇・P区	切先欠損	75	3.4	1.6	B-②	0.20	1.7	2.1	調整	U-4	
11	2.4	2.7	A	0.20	3.0	0.9	調整	H・I区		76	3.2	1.9	B-②	0.30	2.7	1.7	調整	〇-6	
12	2.9	2.1	A	0.30	3.2	1.4	調整	L区		77	3.2	1.9	B-②	0.30	3.2	1.7	調整	Q・R区	
13	2.1	2.4	A	0.35	2.7	0.9	調整	N-6		78	3.6	2.0	B-②	0.30	2.8	1.8	調整	L区	
14	2.7	2.1	A	0.10	1.7	1.3	調整	N-7		79	3.4	2.3	B-②	0.30	3.3	1.5	調整	N-7	
15	2.6	2.2	A	0.20	2.0	1.2	調整	N-7		80	3.1	2.0	B-②	0.30	2.2	1.6	調整	H-5	
16	2.8	1.9	A	0.15	1.7	1.5	調整	T-5		81	3.8	2.1	B-②	0.40	5.5	1.8	調整	H・I区	切先欠損
17	2.3	2.2	A	0.20	2.2	1.9	調整	K-7	切先欠損	82	3.4	2.1	B-②	0.20	3.2	1.6	調整	L区	
18	2.9	2.6	A	0.20	3.2	1.1	調整	Q-6		83	3.4	2.3	B-②	0.10	2.0	1.5	調整	I-8	
19	3.2	2.7	A	0.20	4.3	1.2	調整	P-6		84	3.5	2.3	B-②	0.20	2.3	1.5	調整	J-8	
20	2.9	2.3	A	0.20	3.2	1.3	調整	〇-7		85	3.4	1.6	B-②	0.30	2.5	2.1	調整	〇-6	
21	3.2	2.4	A	0.30	3.7	1.3	調整	J-8		86	2.8	2.2	B-②	0.20	3.5	1.7	調整	K-8	
22	3.2	2.7	A	0.20	4.0	1.2	調整	P-6		87	3.8	2.3	B-②	0.30	3.0	1.7	調整	Q-6	
23	3.5	2.7	A	0.15	2.7	1.3	調整	N-7		88	4.0	2.1	B-②	0.30	4.5	1.9	調整	T-4	
24	3.5	2.9	A	0.70	9.8	1.2	調整	U-1		89	3.9	2.4	B-②	0.30	4.2	1.6	調整	Q-5	両側欠損
25	3.6	2.5	A	0.60	7.2	1.4	調整	S-5		90	4.3	2.4	B-②	0.40	3.5	1.8	調整	P-6	両側欠損
26	3.6	2.8	A	0.50	6.3	1.3	調整	Q-5		91	3.9	2.3	B-②	0.30	3.5	1.7	調整	Q-6	
27	3.6	2.5	A	0.40	6.0	1.4	調整	Q-6		92	4.2	2.2	B-②	0.30	5.8	1.9	調整	G-9	
28	3.9	2.9	A	0.30	7.7	1.3	調整	〇-7		93	4.0	2.0	B-②	0.30	3.7	2.0	調整	P-6	
29	4.0	2.7	A	0.30	6.2	1.5	調整	P-6	一側欠損	94	4.4	2.4	B-②	0.20	5.0	1.8	調整	N-6	
30	4.0	2.9	A	0.60	10.8	1.4	調整	G-9		95	4.2	2.5	B-②	0.40	6.5	1.7	調整	M-7	
31	4.0	2.4	A	0.40	1.8	1.7	調整	L-8	一側欠損	96	4.5	2.1	B-②	0.20	3.2	2.1	調整	N-7	一側欠損
32	4.1	2.7	A	0.20	4.7	1.5	調整	U-1		97	4.7	2.4	B-②	0.60	9.2	2.0	調整	Q-5	一側欠損
33	4.7	3.2	A	0.20	6.2	1.5	調整	Q-6		98	5.2	2.6	B-②	0.30	7.5	2.0	調整	H-9	
34	1.7	1.4	B-①	0.10	0.7	1.2	調整	S-5		99	5.1	2.1	B-②	0.40	6.2	2.4	調整	N-7	一側欠損
35	2.2	1.3	B-①	0.10	0.5	1.7	調整	T-1		100	5.6	2.7	B-②	0.30	11.5	2.1	調整	〇-6	
36	2.1	1.4	B-①	0.15	0.8	1.5	調整	J-8		101	5.9	2.9	B-②	0.25	8.0	2.0	調整	U-4	
37	3.0	1.9	B-①	0.35	2.5	1.6	調整	不明	打製石鏡か?	102	3.7	1.6	C	0.10	2.0	2.3	調整	不明	
38	2.9	1.9	B-①	0.20	1.8	1.5	調整	U-4		103	3.6	2.0	C	0.40	4.5	1.8	調整	N-7	
39	3.0	1.8	B-①	0.35	2.2	1.7	調整	N-7		104	3.6	1.9	C	0.30	3.5	1.9	調整	L区	
40	3.5	2.1	B-①	0.40	4.0	1.7	調整	H-9		105	3.9	1.7	C	0.40	5.5	2.3	調整	Q・R区	
41	3.0	2.5	B-①	0.30	2.7	1.2	調整	H-5		106	4.0	1.7	C	0.40	5.2	2.4	調整	Q・R区	
42	3.3	2.5	B-①	0.20	3.0	1.3	調整	N-7		107	4.3	1.5	C	0.40	5.5	2.9	調整	〇-7	一側欠損
43	3.7	2.3	B-①	0.30	4.0	1.6	調整	〇-7		108	4.4	1.9	C	0.40	5.5	2.3	調整	U-4	
44	3.5	2.1	B-①	0.30	3.7	1.7	調整	N-6		109	4.1	1.8	C	0.30	4.2	2.3	調整	〇-6	切先欠損
45	2.7	2.6	B-①	0.30	4.7	1.0	調整	H-9	切先欠損	110	4.0	2.1	C	0.40	4.2	1.9	調整	〇-7	
46	3.8	2.8	B-①	0.40	4.7	1.4	調整	〇-7		111	4.2	1.8	C	0.50	4.0	2.3	調整	N-7	
47	4.1	2.6	B-①	0.30	4.5	1.6	調整	U-4		112	4.4	2.1	C	0.30	4.0	2.1	調整	N-7	
48	4.2	2.3	B-①	0.40	5.0	1.8	調整	U-4		113	4.4	1.5	C	0.20	3.2	2.9	調整	N-7	
49	3.8	2.4	B-①	0.20	5.0	1.6	調整	K-8		114	4.6	2.1	C	0.20	3.7	2.2	調整	不明	
50	4.8	3.1	B-①	0.30	11.3	1.5	調整	Q-6		115	4.7	2.3	C	0.20	5.7	2.0	調整	H・I区	
51	5.3	3.2	B-①	0.20	6.8	1.7	調整	H-9		116	4.8	2.3	C	0.40	7.0	2.1	調整	不明	
52	5.2	3.2	B-①	0.70	18.3	1.6	調整	L-8		117	5.3	2.2	C	0.50	10.0	2.4	調整	H-9	
53	3.7	2.2	B-①	0.20	2.8	1.7	調整	H-9		118	5.3	2.4	C	0.40	8.7	2.2	調整	Q-6	
54	4.2	2.3	B-①	0.40	5.0	1.8	調整	U-4		119	5.5	2.0	C	0.40	6.5	2.8	調整	〇-7	
55	5.0	2.5	B-①	0.50	8.3	2.0	調整	2号住		120	5.5	2.2	C	0.60	10.0	2.5	調整	L-7	
56	4.9	2.3	B-①	0.25	4.5	2.1	調整	T-4		121	5.6	1.9	C	0.40	5.2	2.9	調整	P-6	
57	4.9	2.2	B-①	0.25	6.0	2.2	調整	U-4		122	6.2	1.9	C	0.60	8.0	3.3	調整	G-9	
58	4.5	2.6	B-①	0.40	6.5	1.7	調整	N-7	切先欠損	123	6.1	2.2	C	0.60	12.0	2.8	調整	〇・P区	
59	3.2	3.0	B-①	0.40	6.7	1.1	調整	N-6	切先欠損	124	6.5	2.0	C	0.30	8.7	3.3	調整	N-7	
60	4.5	3.0	B-①	0.30	7.2	1.5	調整	〇-7		125	6.6	2.3	C	0.60	12.2	2.9	調整	2号住	
61	4.8	2.4	B-①	0.30	5.5	2.0	調整	N-7	一側欠損	126	7.2	3.0	C	0.40	11.8	2.4	調整	J-8	一側欠損
62	5.3	2.6	B-①	0.30	5.7	2.0	調整	K-7		127	6.8	2.5	C	0.30	12.2	2.7	調整	J-8	
63	4.8	3.1	B-①	0.40	8.0	1.5	調整	N-6		128	7.0	3.2	C	0.40	14.7	2.2	調整	S-5	
64	5.5	2.8	B-①	0.25	8.3	2.0	調整	N-7											
65	5.5	3.0	B-①	0.30	10.0	1.8	調整	Q-6											



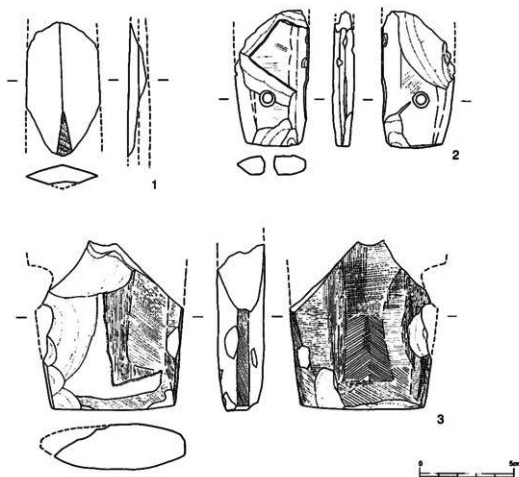
第46図 砥石実測図(1)



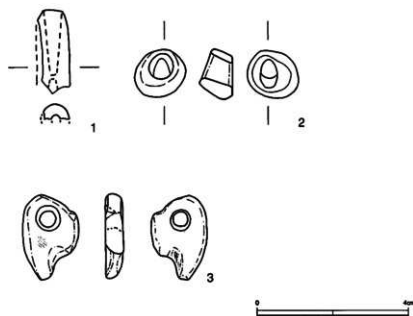
第47图 砾石实测图(2)



第48図 石錘実測図



第49図 磨製石刻実測図



第50図 玉類実測図

第6表 石器計測値等一覧表

図	No.	器種	出土層/区	土層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	その他
1		石鏃	M-7	黄緑土層	4.9	2.9	0.9	11.0	ヤスカイト	
2		石鏃	N-7	一括	9.1	5.3	0.6	21.5	緑色片岩	
3		石鏃	H-9	一括	5.1	3.6	0.9	19.5	ヤスカイト	
4		石鏃	L-7	一括	6.1	4.3	1.2	29.8	ヤスカイト	
5		石鏃	P-6	黄緑土層	8.0	2.9	0.5	28.0	緑色片岩	
6		打製石鏃丁	R-6	黄緑土層	6.1	5.1	0.6	33.0	緑色片岩	下分を欠く
7		打製石鏃丁	G-9	黄緑土層	7.2	4.5	0.5	23.0	片岩	
8		打製石鏃	G-9	黄緑土層	6.4	4.6	0.6	28.5	緑色片岩	遺物No.656
9		打製石鏃	H-10	黄緑土層	11.0	4.4	0.4	47.0	緑色片岩	基部を欠く
1		打製石鏃	T-5	黄緑土層	11.7	6.2	0.9	106.0	緑色片岩	遺物No.1521
2		打製石鏃	I-9	黄緑土層	14.4	5.8	1.1	134.0	緑色片岩	
3		打製石鏃	I-10	黄緑土層	13.6	5.6	0.6	86.0	緑色片岩	3、4は共存
4		打製石鏃	I-10	黄緑土層	13.1	4.5	1.1	104.0	緑色片岩	
5		打製石鏃	H-9	一括	13.2	5.9	1.5	206.0	緑色片岩	
6		打製石鏃	U-4	黄緑土層	11.3	4.7	1.5	107.0	緑色片岩	
7		打製石鏃	I-9	黄緑土層	16.0	7.8	0.6	141.0	緑色片岩	遺物No.88
8		打製石鏃	K-9	黄緑土層	9.8	4.5	1.5	86.0	緑色片岩	
9		打製石鏃	R-5	黄緑土層	13.0	6.8	1.0	126.0	緑色片岩	遺物No.1602
10		打製石鏃	R-5	V層直上	13.1	5.4	1.0	122.0	緑色片岩	
11		打製石鏃	Q-6	黄緑土層	10.0	6.7	1.0	108.0	緑色片岩	
12		打製石鏃	H-9	黄緑土層	9.6	5.0	1.1	81.0	緑色片岩	
13		打製石鏃	K-7	黄緑土層	12.0	4.5	1.4	104.0	緑色片岩	遺物No.286
14		打製石鏃	K-8	黄緑土層	12.0	7.0	1.8	196.0	緑色片岩	
15		打製石鏃	I-10	黄緑土層	12.0	7.4	1.1	182.0	緑色片岩	
1		十字形石鏃?	S-5	黄緑土層	9.1	9.6	1.8	133.0	緑色片岩	
2		十字形石鏃	S-5	一括	6.6	7.8	1.5	99.0	凝灰岩	ピンク色を呈する
3		円盤状石鏃	O-5	一括	7.9	7.5	1.5	138.5	緑色片岩	
4		円盤状石鏃	U-4	一括	10.3	8.5	1.7	190.0	安山岩	
5		円盤状石鏃	V-4	黄緑土層	7.2	6.8	0.7	71.0	緑色片岩	
6		円盤状石鏃	K-8	カクラン層	8.3	9.0	1.2	146.0	緑色片岩	
7		円盤状石鏃	3号住居跡	埋土	8.0	7.7	1.1	139.0	緑色片岩	
8		円盤状石鏃	Q-6	黄緑土層	7.9	9.2	1.7	150.0	凝灰岩?	
9		円盤状石鏃	T-5	黄緑土層	10.0	13.6	1.7	196.5	凝灰岩?	
1		円石	N-7	黄緑土層	8.8	6.7	3.7	289.0	安山岩	
2		円石	R-5	V層直上	8.2	6.5	4.2	323.0	安山岩	
3		円石	N-7	一括	9.6	9.9	2.6	347.0	安山岩?	
4		円石	3号住居跡	埋土	11.6	10.1	4.5	645.0	安山岩?	
5		磨石	P-5	黄緑土層	12.8	8.4	4.0	556.0	安山岩	
6		磨石	F-9	黄緑土層	7.4	10.2	5.7	616.0	安山岩	下分を欠く
7		磨石	S-5	黄緑土層	12.0	9.2	4.7	804.0	安山岩	遺物No.1593
8		磨石	L-8	カクラン層	13.4	11.7	4.7	1129.0	安山岩	
1		磨製石鏃	O・P区	黄緑土層	6.5	3.8	1.5	58.0	凝灰岩?	
2		磨製石鏃	T-5	黄緑土層	8.0	6.0	1.6	102.0	凝灰岩?	遺物No.1585
3		磨製石鏃	J-8	黄緑土層	5.9	5.0	1.1	43.5	凝灰岩?	
4		磨製石鏃	N-6	一括	8.9	5.1	1.5	132.0	凝灰岩?	
5		磨製石鏃	L-8	黄緑土層	13.0	5.2	3.0	336.0	凝灰岩?	遺物No.139
6		磨製石鏃	N-6	一括	11.4	5.0	1.5	126.0	緑色片岩	剥離が激しい
7		磨製石鏃	K-7	黄緑土層	5.0	8.6	3.5	176.0	黄緑土層	今山産?
8		扁平磨製石鏃	J/K	黄緑土層	5.1	0.9	1.2	12.0	片岩	
9		柱状磨製石鏃	M-7	黄緑土層	9.2	1.3	1.2	29.0	片岩	
10		扁平磨製石鏃	K-8	黄緑土層	4.4	3.0	0.5	16.0	片岩	
11		扁平磨製石鏃	H-9	一括	5.9	2.8	1.2	33.0	片岩	
12		磨製石鏃丁	G-9	黄緑土層	19.4	5.5	0.5	61.5	砂岩	
13		磨製石鏃丁	P-6	黄緑土層	11.0	5.0	0.6	93.0	砂岩	
1		磨製石鏃未製品	K-8	黄緑土層	12.3	5.5	4.2	431.0	玄武岩	
2		磨石	G-9	黄緑土層	12.0	2.3	1.3	56.0	緑色片岩	
3		磨石	V-4	黄緑土層	9.2	2.5	1.6	32.0	片岩?	
4		磨石	G-10	黄緑土層	7.4	3.6	2.9	102.0	安山岩	
5		磨石	J-8	黄緑土層	8.9	3.5	2.1	109.0	安山岩	
6		磨石	N-6	黄緑土層	8.5	3.0	3.0	118.0	安山岩	
7		磨石	N-7	黄緑土層	7.9	4.6	3.2	222.0	安山岩	
1		砥石	O-6	黄緑土層	4.6	2.3	1.1	18.0	砂岩	
2		砥石	U-4	黄緑土層	6.0	3.2	2.0	68.0	砥石花崗岩	
3		砥石	S-4	一括	8.9	8.0	2.0	191.0	砥石花崗岩?	
4		砥石	L-8	黄緑土層	10.0	9.0	2.0	250.0	砥石花崗岩	砥石は1面
5		砥石	K-8	カクラン層	11.8	8.0	7.8	1309.0	砥石花崗岩	
6		砥石	R-5	黄緑土層	9.0	6.7	3.3	224.0	砥石花崗岩	溝あり
7		砥石	N-6	黄緑土層	15.8	9.6	5.2	1249.0	砥石花崗岩	
8		砥石	S-5	黄緑土層	14.8	7.2	2.8	339.0	砥石花崗岩	
9		砥石	L-7	黄緑土層	10.0	6.4	6.6	729.0	砥石花崗岩?	
10		砥石	3号住居跡	一括	6.0	6.0	3.5	148.0	砂岩	
11		砥石	G-9	黄緑土層	10.2	7.4	5.0	569.0	砥石花崗岩	
12		砥石	2号住居跡	一括	8.6	5.7	1.4	144.0	砂岩	
13		砥石	2号住居跡	一括	8.5	4.8	4.9	336.0	砥石花崗岩	
14		砥石	P-6土成	埋土	9.6	10.1	7.0	1029.0	安山岩?	
1		磨製石鏃	U-4	一括	7.0	3.9	1.0	25.0	?	
2		磨製石鏃	J/K	黄緑土層	7.2	3.9	0.9	37.0	片岩?	基部のみ
3		磨製石鏃	I-9	黄緑土層	9.0	7.4	2.4	99.0	凝灰岩?	基部のみ
1		磨製石鏃	1号遺物	黄緑土層	11.6	3.0	0.7	32.0	緑色片岩	

第4節 歴史時代

(1) 住居跡

① 1号住居跡(第51～52図 図版5、図版10)

O-6、7区及びP-6、7区で検出された。住居中央部は、1.0m×0.56mの長方形の土坑に切られている。長辺が5.6m、短辺が4.7mの長方形プランの住居跡で、長辺の軸は西北西―東南東を向く。西側壁沿いにカマドを持ち、柱穴と思われるピットを中央やや東側で1基検出したが、そのほかの柱穴は確認できなかった。

Ⅳ層上面よりやや下位で検出され、Ⅳ層に比べやや暗い暗褐色土が埋まっていた。粒状の焼土や炭化物の少し含む。検出面から床面までの深さは10～20cmで、壁はほぼ垂直に立ちあがる。床面はかなり硬化しており、ほぼ全面に硬化面は広がる。

遺物は、甕、碗、坏、坏蓋が出土した。1～4は土師器の甕または甕の口縁部である。5は須恵器の坏蓋であるが、口縁端部が片口状に突き出ている。またつまみの部分は、故意に打ち欠かれたのではなからうか。少量の液体を溜める皿のような役割が想定される。6～8は須恵器で、6は高台の内面に段がつく。

② 2号住居跡(第53図 図版5)

M-7及びN-7区で検出した。住居の北東部のみの検出のため、規模は不明である。Ⅳ層を掘りこんでおり、やや暗い色調の暗褐色土が堆積していた。検出面から床面までの深さは約20cmで、硬化面は確認できなかった。また床面には白粘土が一部集中して検出された。

遺物は甕または甕(1)と須恵器の坏(2)だけで非常に少ない。

③ 3号住居跡(第54～55図 図版5、図版10)

L-7、8区及びM-7、8区で検出した。長辺が5.7m、短辺が4.2mで、長方形を呈する。住居中央部から南側は後世のカクランにあっており、その理土は1cm角の小石や小片の上層片そして焼土と炭化物の粒を含む暗褐色粘土層であった。非常に粘性があり、しまった土である。Ⅳ層で検出され、そこから床面までの深さは、20～30cmである。Ⅳ層に比べ若干暗い暗褐色土が堆積していたが、土の差異の判別がつきにくく、検出に苦しんだ。住居床面はほぼ平坦で、ほとんど硬化していない。

遺物は土師器では甕や坏が(1～4、6)、須恵器では坏、碗、円面碗(5、7～9)が出土した。このほかにも流

れ込みと考えられる縄文時代や弥生時代の遺物が出土している。

(2) 溝状遺構(第5図)

H-9及びI-9区で検出した。Ⅳ層に掘りこんで、Ⅲ層が堆積する。幅は約40cmで、検出面から底面までの深さは12cmであった。確認できた長さは、7.85mである。

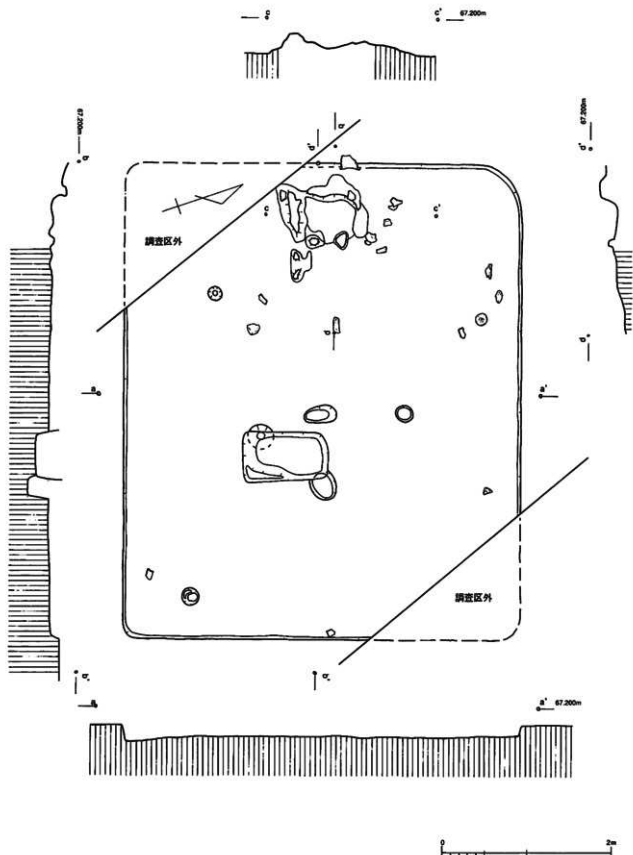
遺物は特になかったが、検出面の順序とその理土から判断して、歴史時代の遺構と判断した。

(3) 遺構に伴わない遺物(土師器、須恵器)(第56図 図版10)

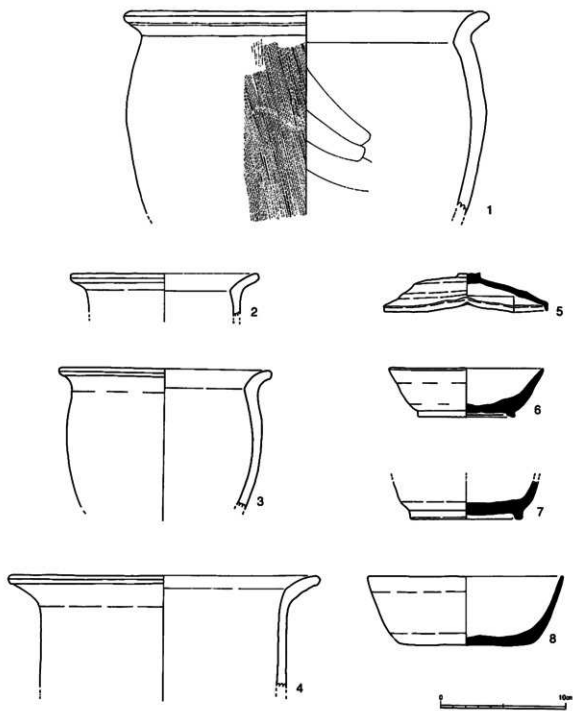
Ⅲ層及びⅣ層上層から出土した。

1～3は甕、または甕の口縁部である。2は内器面にヘラケズリを施す。4～9は土師器坏である。4は酸化赤鉄鉱粒を含む胎土で、両面にナデ調整を施す。しかし、焼成はあまりよくなく、つくりも雑な印象を受ける。5も4と同じ胎土で、焼成もあまりよくない。両器面ともナデの痕が見える。つくりは粗い。ヘラ切り後、赤彩したものと思われる。部分的に赤彩が残っている。6は焼成が悪く、調整等は不明。4、5と同じく酸化赤鉄鉱粒を含む胎土である。7は底面を除くすべての器面にヘラミガキを施す。焼成は良好である。8は焼成があまりよくなく、つくりの粗い坏である。内器面にナデの後を明瞭に残している。また、色調が内器面は浅黄褐色で、外は灰白色と両面で異なる。9は底部と体部の境に丸みを持ち、11縁部上端に浅い段を持つ坏である。外器面、内器面ともにヘラミガキが施されている。

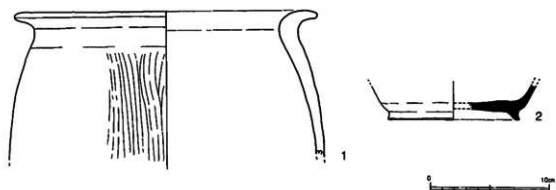
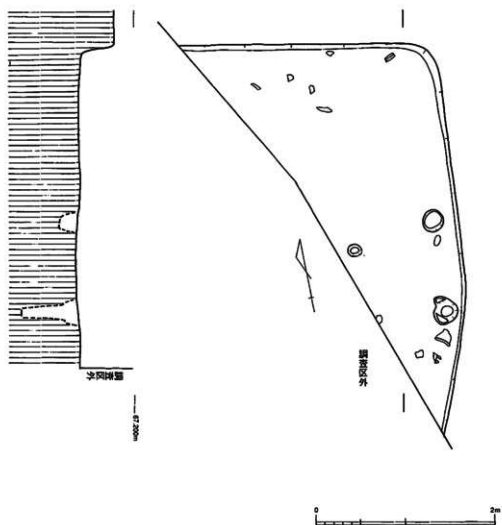
10は深さがほとんどない坏蓋で、扁平なつまみを持つ。11はやや深い坏蓋で、擬宝珠形のつまみを持つ。12は須恵器の甕口縁部で、外器面には平行タタキ目文、内器面には同心円のタタキ目が見える。13～20は須恵器の坏である。13は高台の底面がわずかにくぼむ。14は高台が底端に付き、断面形がほぼ四角形を呈する。焼成がよくないため内器面の色調は浅黄褐色である。15は高台がとれている。16～19は高台を持たないタイプのものである。16は底部が厚く、器自体も重い。外器面にナデを施す。17は内、外器面ともにナデを施す。18はやや深さがあり、底部と体部の境に丸みを持つ。ナデ調整。19は両器面ともにナデを施す。20は深みのある小型の碗で、底部から胴部上平にかけて直線に広がり、口縁部やや手前から若干内湾する。両器面ともナデ調整が施されている。焼成は良好である。



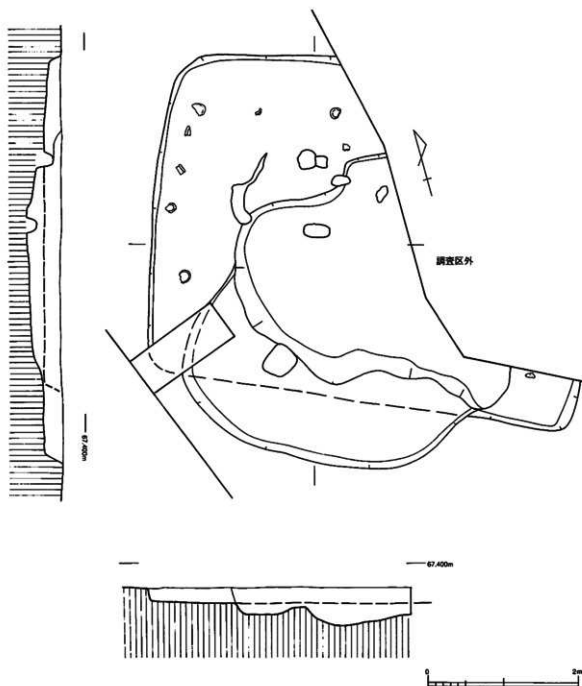
第51図 1号住居跡実測図



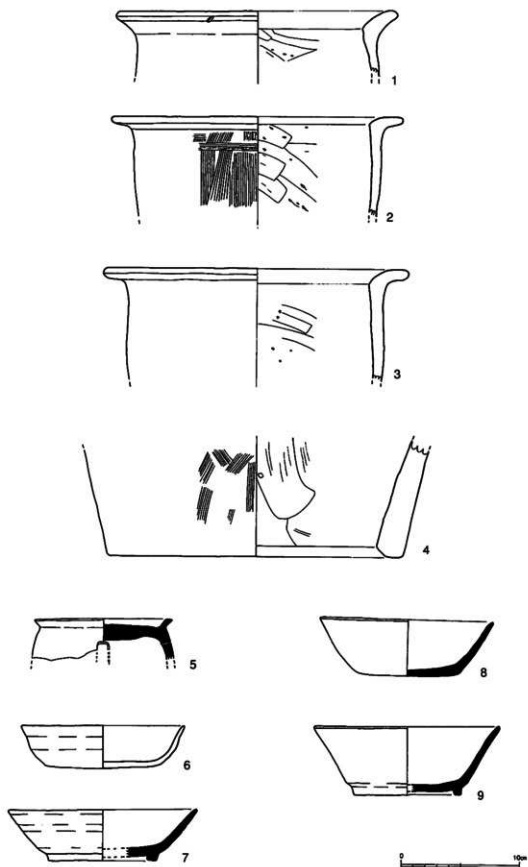
第52図 1号住居跡出土遺物実測図



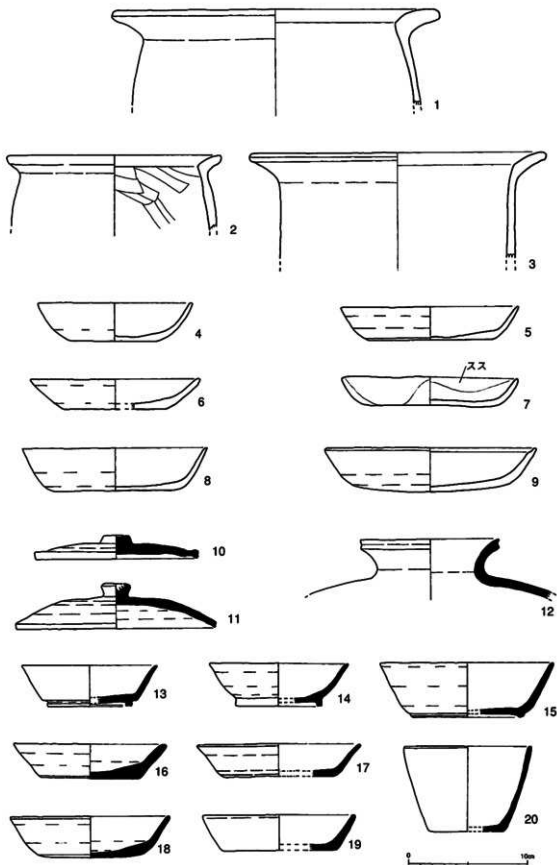
第53図 2号住居跡実測図及び出土遺物実測図



第54图 3号住居跡実測图



第55图 3号住居跡出土遺物実測図



第56図 土師器、須恵器実測図

第7表 古代土器 観察表一覽表

図-Na	出土地点	層、番号	器種	口径	色調	Hue	調整、その他
52-1	1号住居跡	カマド周辺	土師 カメ	29.2	褐色	Hue2.5YR6/6	ハケ、ナデ、ヘラケズリ、スス付着
52-2	1号住居跡	一括	土師 カメ	15.2	褐色	Hue2.5YR7/6	ナデ、ヘラケズリ
52-3	1号住居跡	P-38,69	土師 カメ	16.0	褐色	Hue5YR6/6	スス付着
52-4	1号住居跡	一括	土師 カメ	25.0	褐色	Hue2.5YR6/8	ナデ、ヘラケズリ
52-5	1号住居跡	P-39	須恵 坏蓋	12.6	青灰色	Hue10BG2/1	片14枚になっている
52-6	1号住居跡	P-16	須恵 碗	12.0	暗青灰色	Hue5B3/1	
52-7	1号住居跡	P-35	須恵 碗	—	にぶい黄褐色	Hue10YR7/3	ナデ
52-8	1号住居跡	P-29	坏	15.8	灰白色	Hue7.5Y7/2	ナデ、一部ヘラケズリ
53-1	2号住居跡	P-16	土師 カメ	22.6	にぶい褐色	Hue10YR6/4	ハケ、ナデ
53-2	2号住居跡	一括	須恵 碗	10.2	灰色	Hue5Y5/1	
55-1	3号住居跡	P-74	土師 カメ	22.0	褐色	Hue5YR6/8	ナデ、ヘラケズリ、モミ痕あり
55-2	3号住居跡	P-10	土師 カメ	21.4	浅黄褐色	Hue7.5YR8/3	ハケ、ナデ、ヘラケズリ
55-3	3号住居跡	一括	土師 カメ	22.0	灰白色	Hue7.5YR8/2	ナデ、ヘラケズリ
55-4	3号住居跡	P-3	土師 甕	22.0	浅黄褐色	Hue7.5YR8/3	ハケ、ヘラケズリ
55-5	3号住居跡		門面甕	10.2	灰白色	HueN7/	ナデ
55-6	3号住居跡	P-1	土師 坏	13.4	浅黄褐色	Hue7.5YR8/3	ナデ、ヘラケズリ、スス付着
55-7	3号住居跡	P-2	須恵 碗	15.8	暗緑灰色	Hue7.5GY3/1	
55-8	3号住居跡		坏	14.8	明オリーブ灰色	Hue2.5GY7/1	ナデ
55-9	3号住居跡	床直上	須恵 碗	15.2	灰色	Hue7.5Y5/1	
56-1	遺物Na	1001-3	土師 カメ	24.0	にぶい褐色	Hue7.5YR7/4	ナデ、ヘラケズリ
56-2	遺物Na	1466	土師 カメ	18.0	陶灰色	Hue10YR4/1	ヘラケズリ
56-3	L-7	カクラン層	須恵 碗	—	にぶい赤褐色	Hue5YR4/3	
56-4	遺物Na	211	土師 坏	12.4	にぶい褐色	Hue7.5YR7/3	
56-5	遺物Na	293	土師 坏	14.6	浅黄褐色	Hue7.5YR8/4	
56-6	遺物Na	396	土師 坏	13.8	褐色	Hue5YR7/8	
56-7	O-7	一括	土師 皿	15.0	にぶい褐色	Hue7.5YR7/4	ヘラミガキ、ヘラケズリ、スス付着
56-8	P-6		土師 坏	15.2	浅黄褐色	Hue10YR8/3	ナデ
56-9	LIX	III層	土師 坏	17.4	明赤褐色	Hue5YR5/6	
56-10	M-7	III層	須恵 坏蓋	13.2	灰白色	Hue5Y7/1	
56-11	L-7	カクラン層	須恵 坏蓋	16.6	灰色	HueN6/	
56-12	K-7	IV層	須恵 甕	11.2	黒褐色	Hue7.5YR3/1	タタキ
56-13	LIX	IV層上層	須恵 碗	11.2	灰色	HueN5/	
56-14	L-7	カクラン層	須恵 碗	11.4	灰色	HueN6/	
56-15	N-7	III層	須恵 碗	14.0	極暗赤褐色	Hue2.5YR2/2	
56-16	Q-6		須恵 皿	12.0	灰白色	Hue10YR7/1	
56-17	L-7	カクラン層	須恵 坏	23.4	灰白色	HueN7/	
56-18	K-8	IV層	須恵 坏	13.0	灰白色	Hue7.5Y7/1	
56-19	J-9	IV層	須恵 坏	12.2	灰色	Hue5Y6/1	
56-20	L-8	カクラン層	須恵 碗	10.4	灰色	Hue5Y5/1	

第5章 科学分析

梅迫遺跡から出土した炭化植物遺体について

北海道大学理蔵文化財調査室 椿坂 恭代

(1) 遺跡の概要

遺跡名 梅迫遺跡(うめさこいせき)

所在地 熊本県山鹿市大字城字松の本原(まつのきばら)

調査主体 熊本県山鹿市教育委員会

遺跡の年代 縄文時代後期、弥生時代中期、

古代(平安時代)

検出遺構 住居跡3基、甕棺13基、埋甕2基

(2) 扱った資料

今回送付されてきた資料は、総数10点である。資料は古代の住居跡の床下からと、縄文時代後期の深鉢の底部の上器片に伴う、ほぼ円形を呈するピット中から肉眼で見える炭化遺物を採取したものである。これらの資料を水道水で洗浄し自然乾燥後、実体顕微鏡で観察、撮影を行った。検出された種子については第8表に示しておいた。

(3) 検出された炭化種子

モモ *Prunus persica* (L.) Batsch; (図版-1、2)

1号住居跡床下からモモの核が2粒検出されている。出土層準は明らかに竪穴住居構築以前を示しているのだが、発掘担当者は、この住居跡の年代とモモの出土層準との間にどのくらい時間差があるのか、確認できなかったという。

図でも分かるように、核の大きさに差がある。形態は円形またはやや楕円形で、一端に突頂部がある。核表面の構造は穴や溝のある、ごく一般的な形態を示す。計測値は1-長さ19.01mm、幅17.78mm、厚さ13.77mm、2-長さ24.73mm、幅19.71mm、厚さ13.15mm。この大きさから見ると福田美和(福田:1998、205-206)のいう古代のものに近い。

ブナ科 *FAGACEAE* (図版-3、T-5 pit 1 から出土、図版-4、T-5 pit 2 から出土)

小型の遺構C-pit1には、年代の指標となる遺物が伴出されていない。ここからはブナ科 *FAGACEAE* の子葉部分の破片含めてほぼ形態の観察可能な果実が4粒検出されている。一方T-5 pit 2からは縄文時代後期の深鉢底部が出土し、縄文時代後期に作られたものと推定されているが、ここからブナ科 *FAGACEAE* の子葉が1粒検出された。子葉の大きさと形態の特徴からはコナラ属 *Quercus* L. に分類できる。

コナラ属 *Quercus* L. には、イチイガシ *Quercus gilva*

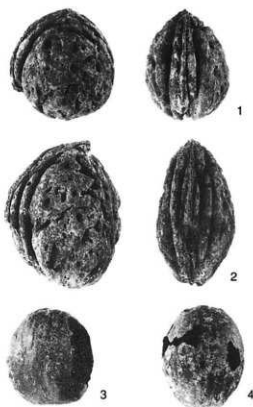
Blume、アラカシ *Quercus glauca* Thunb. などがある。しかし、炭化による資料のダメージが大きいため、種までの分類は不可能であった。計測値は3-長さ11.34mm、幅10.04mm、4-長さ13.38mm、幅10.35mmである。

引用文献

1998 福田美和:山王遺跡町地区出土の大型植物遺体、「山王遺跡町地区の調査-県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ」宮城県教育委員会 204-208

第8表 梅迫遺跡出土炭化植物遺体表

No.	遺構名	植物遺体	備考
1	1号住	サクラ属(モモ核) 粒	平安時代
2	1号住	サクラ属(モモ核) 粒	平安時代
3	C-pit1	ブナ科(粒)	
4	C-pit1	ブナ科(粒)	
5	C-pit1	ブナ科(粒)	
6	C-pit1	ブナ科(片)	
7	C-pit1	ブナ科(片)	
8	C-pit1	ブナ科(片)	
9	C-pit1	ブナ科(片)	
10	C-pit2	ブナ科(粒)	縄文後期



梅迫遺跡出土炭化種子

第6章 まとめ

今回の調査では、縄文時代後期から古代までの遺構の検出、遺物の出土があった。時代ごとで簡単なまとめを行う。

(1) 縄文時代

① 土器、埴輪について

この時代の遺構として、埴輪2基を検出した。2基とも御領式の深鉢で、2号埴輪については浅鉢で蓋がされていた。そのほか、ビットを多数検出したが、遺物がないため、時代が判別できるものが少なかった。しかし、T-5区で検出された2つのビットからは炭化したブナの種子が出土し、そのうち一つからは深鉢の底部が共存した。

調査区から出土した土器は、太郎迫式から古閑Ⅰ式までの浅鉢、深鉢、注口土器が出土した。ほとんどが破片で、全体の形を知ることのできるものは無かった。判別できた土器を、様式ごと出土率で見ると、鳥居原式が最も割合が高く、以下は三万田式、太郎迫式、御領式、天城式、古閑式の順であった。土器の出土だけで述べるのは甚だ危険ではあるが、概して言うと、鳥居原式期に一つのピークをみることはできる。

② 土偶、動物形土製品について

当時の祭祀を考えるうえで貴重な資料となる土偶及び土製品が合わせて8点出土した。なかでも、動物をかたどった土製品は、九州においても数点しか出土例がなく、貴重な発見となった。わずかな調査面積にもかかわらず、これだけの数の土偶を出土したことは注目に値する。それぞれの出土地点を見ると、1点を除いてすべての土偶が調査区の北半分から出土している。特にK-8区が計3点と集中した出土が見られる。

③ その他

上記の遺物のほか、石器については、打製石斧、石鏃、打製石筴など、量の多少はあるが、耕作具と収穫具と考えられる遺物が出土した。このうち、打製石斧は欠損品も含めて43点出土しており、その数は発掘面積から考えるとかなりの数と言える。

これ以外に、円盤状石器、磨石、敲石が10数点出土した。また、玉類も2点出土している。

以上のように、集落跡として判断できる遺構は検出されなかったが、多量の土器片や石器、そのほか土偶、玉類

など出土遺物は豊富であった。縄文時代後期における重要な集落跡である可能性を示唆する、貴重な資料を得ることができた。

(2) 弥生時代

① 甕棺墓について

弥生時代中期の甕棺墓が13基検出された。その順序について考えてみたい。

2号、3号の下甕は器形から見てほぼ同形であり、互いの甕棺の埋葬方向も同じである。おそらくほぼ同時期に埋葬されたのであろう。

同様に、4号甕棺、5号甕棺も同形で、埋葬方向もほぼ一緒である。この二つの甕棺も同時期のものと考えられる。

重複して検出された9号、11号、12号甕棺については、墓間の切合い関係をおさえることができなかったため、前後関係は明確ではない。ただ互いの棺を割ることなく、一箇所に4基もの甕棺を埋葬していたことから、互いの時間差はそれほどなかったのではないと思われる。

また、1号甕棺と9号甕棺は上甕が鉢、下甕が甕の組み合わせである。これらの鉢を見比べてみると、9号の上甕の方が、胴状口縁部がより発達し、先に伸びており、こちらが後出のものと思われる。そこで次に互いの下甕を比べると、9号甕棺下甕は、1号下甕に比べ、器形がよりスマートで、口縁部が内傾し、口縁部上面がくぼんでいる。さらに、底部は上げ底がより発達し、脚台に近づきつつある。

まとめると、

〈1〉(4号、5号)口縁端部が丸みを持つ。最大径が胴部中位かやや上位。

〈2〉(2号、3号)口縁端部が三角形を呈する。甕は小型で最大径が中位やや上。

〈3〉(6号、8号)口縁端部が三角形。甕は中型になり、最大径が中位やや上。長細くなる。

〈4〉(1号、7号)口縁端部が丸みのある三角形で上面がややくぼむ。最大径が胴部上位。

〈5〉(9号、10号)口縁部がやや内傾する。甕の底部は上げ底から脚台へ変わる過渡期。

〈6〉(11号、12号)胴部が長くなり、口縁部は内傾する。

変は底部が脚台となる。

という変遷が追える。13号については上変(壺)の器形の特徴から横口編年のKⅡc頃に当てはめたいと考える。よって13号は上記のKⅡcに該当すると考える。

当遺跡の甕棺墓は弥生時代中期前半(城の越式期)に始まり、中期後半(黒髪Ⅰ式)で終焉を迎えたと考えられる。

甕棺の配置を見てみると、単体で埋葬されたタイプ(1号、6号、7号、13号)、2つが平行に並んで埋葬されたタイプ2号と3号、4号と5号)、複数の甕棺が一つの場所に集中して埋葬されたタイプ(9号と11号と12号)の三通りのタイプが見受けられた。これを先ほどの時代ごとで見えてみると、二列埋葬→単体埋葬→集中埋葬という変遷をたどることができる。果たして、当遺跡だけの傾向なのか、それとももう少し広範囲にわたるのか、このわずかな調査範囲だけでは判断できないが、今後の調査の着目点としたい。

また、今回の調査で検出された甕棺墓はすべて小児用の小型の甕等が使用されていた。当地方でも須玖式の大型甕棺の存在は確認されているが、当地点でなぜ大型甕棺が使用されなかったのか、疑問が残った。

②磨製石鏃製作について

今回の調査で合計128点にのぼる磨製石鏃未製品のほか、大量の緑色片岩片が出土した。このほか、形を整えるために使われたと考えられる棒状の敲打具や、粗目から目の細かいものまでの砥石が数多く見つかった。

石鏃の石材入手については、当遺跡から直線距離で北東方向に約3kmにある、彦岳のふもとの緑色片岩塊露頭部が候補地に挙げられる(第1図上方)。(石材鑑定をしていただいた古家先生のご教示による)理化学的な石材鑑定は行っていないが、肉眼観察では同様のものと思われる。未製品の石材が緑色片岩だけに限られていること、さらに緑色片岩片が多数に出土していることから考えても、これらの石材は彦岳の露頭部から入手した可能性が高い。

図を掲載していないが、母岩と考えられる重さ1kg程度の緑色片岩塊(長細く、角がとれて丸みを帯びている)が1点出土している。わずかに1点であるが、この塊だけからでも相当数の石片を得ることができるであろう。

以上のことから、当遺跡は磨製石鏃製作遺跡である可

能性が高い。工程としては、1kg程度の緑色片岩塊を持ち込み、荒削りから完成までの一連の作業を一貫して行ったことが想定される。

さて、未製品の大量の出土数に対して、完成品の数はそれほど多くない。もちろん石鏃は、戦いの場合は別として、集落内で消費されるものではない。作られた石鏃は、自集落の人々が消費した場合と、他の集落に供給した場合の二つの可能性が考えられるが、今回はこの問題を明らかにできるほど、近隣の磨製石鏃の出土例は多くない。市内での磨製石鏃出土地は、中尾下原遺跡の甕棺内の1点と方保田東原遺跡出土の甕棺内の6点、南島遺跡の甕棺内点の3例にすぎない。方保田出土の石鏃を実見したが、石材が明らかに異なっていた。今後、さらに出土数が増えることを期待したい。

また、今回の調査では残念ながら製作跡と思われる遺構を検出することはできなかった。弥生時代後期の石器製作遺跡として知られる阿蘇地方の谷須遺跡や高瀬赤立遺跡では竪穴住居内で磨製石鏃が製作されたことが確認されている。今後周辺を調査することがあるならば、このような製作遺構が確認される可能性がある。

③その他の遺構

弥生時代のもう一つの遺構として、縦に細長い長方形の土坑を検出した(J区土坑)。幅の狭さから住居跡として取り扱うには疑問が残る。出土遺物も特徴は無いため、どのような性格を持つ遺構なのか、今後の検討を待ちたい。

④遺物について

中期、特に中期後半の土器が破片ながら全器種出土し、当地方の弥生時代中期の土器様相を知る良好な資料を得た。片塗りの土器もわずかではあるが出土した。これらは甕棺墓と関係した祭祀的な遺物と考えられる。

このほか注目される石器として、磨製石斧のほか大型の石庭丁、大型の磨製石剣片が出土した。当地方では出土例の少ない遺物である。特に、G-9区出土の大型磨製石剣片(図40-3)は、これまでの出土例の中でもかなり大型の部類に入るものと思われる。

(3)古代

古代の遺物は、8世紀後半から9世紀初頭にかけての土器が主体となる。このなかでも目を引く遺物が、山鹿市内

において2例目となる円面硯である。

官衙の歴史的環境の章でも触れたが、この地は律令時代の「山鹿郡緒緑郷(おどりごう)(のち尾登利郷)」内と考えられている。現在も小島町(おどりまち)という集落が残っていて、その場所が政治的中心地ではないかと一般的に考えられてきた。(小島町は、当道跡の東側の岩野川沿岸にあって、周囲は条理跡とされている水田が広がる)しかし、今回の調査の結果、緒緑郷の中心地についても再考する必要がでてきたと言えよう。現在の小島町周辺の調査が全くなされていないため、比較検討ができないが、中心地が移ったのか、並存していたのかなど新たに考えるべき課題が残された。

また、道跡南には「西福寺」という小字名が残っている。西福寺については文献の記録も少なく、発掘調査も行われていないため、まったく不明であるが、今後の調査、研究が進めば、当道跡との関連が明らかになるかもしれない。

当道跡が官衙的性格か寺院的なものか、今回の調査では明らかにできなかったが、古代においても重要な場所であったことは間違いないと言えよう。

主要参考文献

- 金岡惣・佐原真編 1985 『弥生文化の研究 5 道具と技術』雄山閣
- 古森政次編 1994 『ワクド石道跡』熊本県教育委員会
- 長谷部洋一編 1995 『道門寺原道跡』熊本県教育委員会
- 梅崎重司編 1979 『門川道跡』北九州教育委員会 熊本九州教育文化事業団
- 鈴木道之助 1991 『図録・石器入門事典(縄文)』柏古房
- 松村道博編 1978 『谷頭道跡』谷頭道跡調査団
- 清田純一 1998 『縄文後・晩期土器考』『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 村井航輝ほか編 1986 『伊坂土原道跡石佛道跡』熊本県教育委員会
- 大川清・鈴木公雄・王楽吉通 1996 『日本土器事典』雄山閣
- 酒井龍一 1991 『弥生時代の石器生産』『季刊考古学』第35号 雄山閣
- 下條昌行 1975 『北九州における弥生時代の石器生産』『考古学研究』22・1
- 細田龍生 1994 『奈良時代肥後の土器』『先史学・考古学論究』熊本大学文学部 考古学研究室創設20周年記念論文集 龍田考古会
- 坂田和弘編 1998 『鶴羽川道跡』熊本県教育委員会
- 富田紘一編 1981 『上南部道跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 富田紘一 1982 『上南部道跡出土土偶の観察』『古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論集
- 高木正文 1980 『九州縄文時代の取巻川石器—打製石硯と打製石鏃について—』『鏡山猛先生古稀記念古文化論究』
- 益木浩二 1994 『前原長清喪棺群』前原長清道跡発掘調査団
- 橋川達也 1979 『考察4. 喪棺の編年の研究』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXXI—』中巻
- 西健一彦 1982 『熊本県における弥生中期喪棺編年の予察』『古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論集

写 真 图 版



遠景



調査区全体



完掘状況



1 2号甕棺(左)、3号甕棺(右)



2 4号甕棺(左)、5号甕棺(右)



3 8号~12号甕棺
(右上:8号,左上:9号,右下:10号,
中央:11号,左下:12号)



2号埋甕検出状況



3号埋甕



1号甕棺



2号甕棺



3号甕棺



4号甕棺



5号甕棺



6号甕棺

图版 4



7号葬棺



9号葬棺



10号葬棺



8号埋甕



11号埋甕



12号葬棺



13号葬棺



1号住居跡



3号住居跡



2号住居跡



1号住居跡
杯蓋
出土状況



3号住居跡
内面碗
出土状況



2号埋甕;下



图〇一〇



1号甕棺;上



2号甕棺;上



1号甕棺;下



2号甕棺;下



3号甕棺;上



4号甕棺;上



3号甕棺;下



4号甕棺;下



7号甕棺



8号甕棺



5号甗棺;上



6号甗棺;上



5号甗棺;下



6号甗棺;下



9号甗棺



10号甗棺



11号甕棺;上



12号甕棺



11号甕棺;下



13号甕棺;上



13号甕棺;下



第30図-72



第30図-75



第30図-74



第28図-51



第29図-58



第52図-5



第56図-12



第52図-6



第55図-5



第55図-8



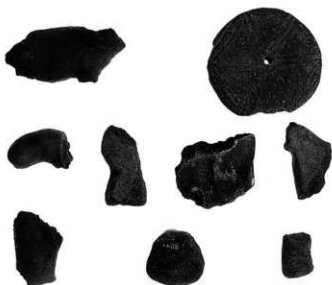
第55図-4



第56図-7



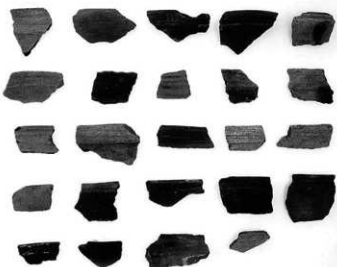
第56図-9



土偶、動物形土製品、円盤状土製品



縄文土器(太郎迫式～三万田式)



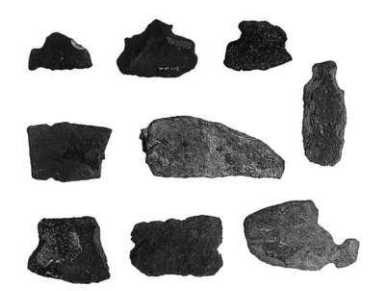
縄文土器(鳥居原式～黒川式)



弥生土器(甕)



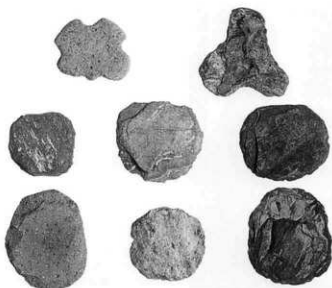
弥生土器(壺、高杯)



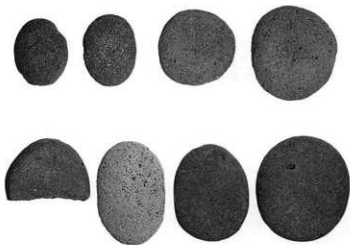
石器(石鎌、石匙、打製石庖丁)



石器(打製石斧)



石器(十字形石斧、円盤形石器)

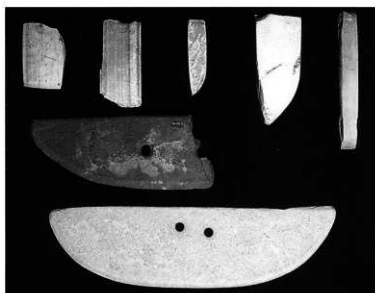


石器(凹石、磨石)

図版14



石器(磨製石斧)



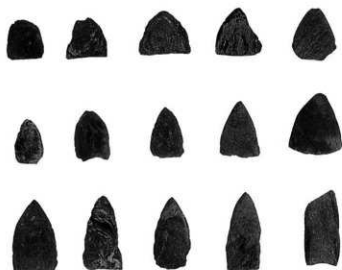
石器(石胞丁、柱状石斧など)



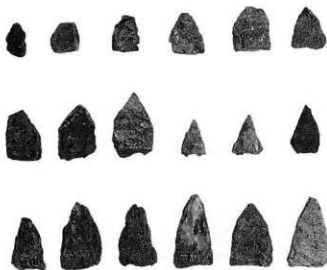
石器(磨製石斧未製品、敲打具、石鐃)



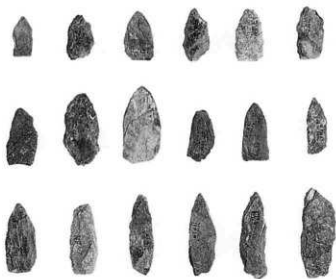
石器(打製石鏃)



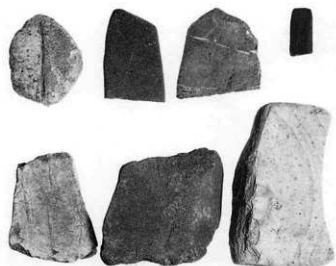
石器(磨製石鏃)



石器(磨製石鏃未製品①)



石器(磨製石鏃未製品②)



石器(砥石)



石器(磨製石剣、石製刀子)

報告書抄録

ふりがな	うめさこいせき							
書名	梅迫遺跡							
副書名	県道和仁山鹿線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	山鹿市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	山口健剛							
編集機関	山鹿市教育委員会							
所在地	〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田2085(山鹿市立博物館) TEL0968-43-1145							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
うめさこいせき 梅迫遺跡	くまもとけん 熊本県 やまがし 山鹿市 おむあびじょう 大字城 あびまつのきばら 字松の木原	43208	057	33°02'14"	130°40'18"	19981208 ～ 19990331	約500㎡	県道和仁山鹿線道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅迫遺跡	包蔵地	縄文時代	ピット群 埋没2基	土器 十字型石器 円盤状石器 打製石斧 打製石鎌 土偶 動物形土製品 勾玉 磨石 燧石	土偶及び動物形土製品 が計8点出土 炭化したコナラ核が出土
		弥生時代	甕棺13基 土坑多数	土器 丹塗土器 円盤形土製品 大型の石椀丁 石製刀子 磨製石鎌未製品多数 大型石剣	弥生時代中期前半を 中心とした甕棺墓 1号甕棺内から石製刀子 1点出土 磨製石鎌製作址か？
		古代	住居跡3基 溝状遺構1条	土師器 須恵器 円面甕	市内2例目となる円面甕

山鹿市文化財調査報告書第16集

梅 迫 遺 跡

平成16年3月31日

編集・発行 山鹿市教育委員会

〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田2085

TEL 0968-43-1145

印刷 株式会社 トライ

正誤表

『梅迫遺跡』山鹿市文化財調査報告書 第16集 熊本県山鹿市教育委員会2004年
県道と仁山鹿線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

頁	左右	行・図番	誤	正
8	右	26 行	肥後国主佐々成正と	肥後国主佐々成政と
9	右	32 行	2号埋壙は調査区G-9区で確認された。	2号埋壙は調査区F-9区で確認された。
12		第5 図	(図中 F-9内)2号壙棺	2号埋壙
13		28 行	(1)土器(第9～14図 図版3、11～12)	(1)土器(第9～14図 図版6、11)
20	左	1 行	鳥居原式土器(第9～13図1～2、5、18、	鳥居原式土器(第9～13図1～2、5、12、18、
20	右	7 行	深鉢(3、11、78、84)	深鉢(3、7、9～11、78、84)
21	左	5 行	深鉢(85～88)	深鉢(4、6、85～88)
25	左	40 行	T-4区で検出された。	T-5区で検出された。
27	右	30 行	P-4、5区の境付近で	P-5、6区の境付近で
33	左	5 行	N-5区で検出された。	N-6区で検出された。
34		第 # 図	(スケール目盛の数値) 0 1m	0 2m
41	左	35 行	(4)壺(第28～29図55～65)	(4)壺(第28～29図52、55～65)
41	左	38 行	内傾するもの(57)。	内傾するもの(56)。
41	左	39 行	平坦なもの(58)。	平坦なもの(57)。
41	右	1 行	(59、60)がある。	(58、59)がある。
41	右	2 行	胴部 51は小型の壺の下半部と思われる。	胴部 52は小型の壺の下半部と思われる。
41	右	23・24行	最小径部が中位にあるものと(72、75)、上半部にあるものの(73、74)2つのタイプがある。73はやや細身で、	最小径部が中位にあるものと(73、74)、上半部にあるものの(72、75)2つのタイプがある。72はやや細身で、
42		第2 表	(表の見出し)挿図	削除
42		第2 表 2	口径:36.0	口径:26.4
42		第2 表 5	出土地点:L-8	出土地点: I-8
42		第2 表 14	口径:21.6	口径:26.4
42		第2 表 16	口径:15.0	口径:26.0
42		第2 表 44	器種:壺	器種:(祭祀用)甕
42		第2 表 45	器種:壺	器種:(祭祀用)甕
42		第2 表 46	器種:壺	器種:(祭祀用)甕
42		第2 表 47	器種:壺	器種:(小型)甕
42		第2 表 50	部位:ほぼ完形	部位:底部欠
42		第2 表 56	口径:20.6	口径:23.1
42		第2 表 66	口径:16.0	口径:22.4
42		第2 表 68	口径:9.3	口径:20.8
42		第2 表 70	部位:脚	部位:脚部
42		第2 表 72	部位:ほぼ完形	部位:上端欠
42		第2 表 73	部位:ほぼ完形	部位:上端欠
42		第2 表 74	完形	部位:上端欠
43	右	2 行	2～6は敲打具として	2～7は敲打具として
44	右	2 行	2～6の石器は、	2～7の石器は、
55	左	2 行	両縁が広がるもの(24～67)	両縁が広がるもの(34～67)
55	右	2 行	(17)石錘(第48図 図版16)	(17)石錘(第48図 図版14)

正誤表

『梅迫遺跡』山鹿市文化財調査報告書 第16集 熊本県山鹿市教育委員会2004年
 県道と仁山鹿線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

頁	左右	行・図番	誤	正
57		第3表 20	出土地点 M-7	出土地点 N-7
61		第5表 49	長さ3.8 幅2.4 厚さ0.2 重さ5.0	長さ4.3 幅3.0 厚さ0.5 重さ8.7
61		第5表 80	長さ3.1 幅2.0 その他:空欄	長さ3.4 幅2.1 その他:切先欠損
61		第5表 81	その他:切先欠損	その他:(欠損はないため)削除
66		第6表	図番号記載漏れ	上段から1～9(石匙～打製石鏃):第31図、 1～6(打製石斧):第32図、 7～11(打製石斧):第33図、 12～15(打製石斧):第34図、 1～4(十字形石器?～円盤状石器):第35図、 5～9(円盤状石器):第36図、 1～8(凹石～磨石):第37図、 1～7(磨製石斧):第38図、 8～13(扁平磨製石斧～磨製石庖丁):第39図、 1～7(磨製石斧未製品～砥石):第40図、 1～8(砥石):第46図、 9～14(砥石):第47図、 1～3(磨製石剣):第49図 ※第48図は表に記載漏れ
66		第6表 3	(第32図3 打製石斧)長さ13.6	長さ14.2
66		第6表 4	(打製石斧) 長さ13.1	長さ15.0
66		第6表 9	(円盤状石器)幅13.6	幅8.7
66		第6表 7	(磨製石斧) 長さ5.0 その他:今山産?	長さ4.2 その他:今山産?、刃部のみ
66		第6表 12	(磨製石庖丁)出土地区:G-9 長さ19.4 幅5.5 厚さ0.5	出土地区:P-6 長さ11.0 幅5.0 厚さ0.6
66		第6表 13	(磨製石庖丁)出土地区:P-6 長さ11.0 幅5.0 厚さ0.6	出土地区:G-9 長さ19.2 幅5.5 厚さ0.5
67	左	19行	6～8は須恵器の坏で、…段がつく。	6. 8は須恵器の坏で、…段がつく。7は土師器の坏である。
73		第56図 3	(壺が52図4と同一遺物であった)	(56図3を削除)
74		第7表 52-7	器種:須恵 碗	器種:土師 碗
74		第7表 55-8	器種:坏	器種:須恵 坏
74		第7表 56-3	(56図3の遺物が52図4と重複して掲載)	(56図3を削除)
74		第7表 56-17	口径23.4	口径13.6
76	右	17行	一箇所に4基もの	一箇所に3基もの
77	右	11行	南島遺跡の墓棺内点の3例に	南島遺跡の墓棺内の3例に
77	右	34・35行	G-9区出土の大型磨製石剣片(図40-3)	I-9区出土の大型磨製石剣片(図49-3)
86		図版6 右上	図〇-〇	第9図3
89		図版 9	11号墓棺:上	9号墓棺:上

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告書第 16 集 梅迫遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告書第 16 集 梅迫遺跡』

県道と仁山鹿線道路拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 7 月 4 日